

京都大学構内遺跡調査研究年報

昭和60年度

京都大学埋蔵文化財研究センター



卷首図版 京都大学医学部構内AN18区 梵鐘鑄造遺構SX13(西から)

序

この年報は第Ⅰ部の昭和60年度における構内遺跡の調査報告と第Ⅱ部のそれら遺跡や遺物に関連する研究成果をまとめた研究紀要とからなる。

第Ⅰ部第2章は、医学部構内での調査の報告であり、とくに中世（13世紀前葉）の梵鐘鑄造遺構については昭和56年度の教養部構内の調査で発見した平安時代中期の梵鐘鑄造遺構とあわせて、第Ⅱ部紀要のなかで考察を深めた。第3章は北部構内北端の調査であり、構内では類例の少なかった古墳時代前半の貴重な資料をえた。また中世後半とみられる空堀を発見し、文献などでしられた田中構と関連をもつものとかんがえ、注目している。あらためて考察を深める予定である。

第Ⅱ部は構内遺跡を中心に各地の関連する遺跡について検討した研究成果であり、当研究センターの紀要である。「鴨東白河の鑄物工房」は、先にものべたように梵鐘鑄造遺構について考察したものであり、「瓦の範と製作技術」は高麗寺系軒丸瓦を検討したものである。

昭和52年に、埋蔵文化財研究センターが設立されてから、すでに10年の歳月がすぎた。その間、調査の体制もしだいに整備され、吉田キャンパスを中心に敷地内の埋蔵文化財について、調査と研究をすすめ、保存と活用の方策をもとめてきた。この調査を通じて、学内の各学部、研究所、研究施設などの研究室をはじめ、学外の研究機関の積極的協力をえて、学際的研究をすすめ、当研究センターはその核の役割をはたし、大きい成果をあげることができた。この年報にも、その成果の一端が反映されている。

今回も学内、学外の多くの方々から御指導、御助言をいただき、調査の全般にわたって施設部、医学部、農学部の関係各位の御協力をいただいた。ここに厚くお礼申しあげるとともに、今後とも学内、学外の方々の御指導と御協力をおねがいするしだいである。

昭和62年12月

京都大学埋蔵文化財研究センター長

西川幸治

例 言

- 1 本年報は、京都大学構内で昭和60年4月1日から同61年3月31日までに発掘、整理作業を終了した埋蔵文化財調査と保存の報告、および京都大学埋蔵文化財研究センターにおける研究成果をまとめたものである。
- 2 国土座標にしたがって一辺50mの方形の地区割りをして、遺跡の位置を表示した。
- 3 層位と遺構の位置については、国土座標第6座標系 ($x = -108,000$ $y = -20,000$) が ($X = 2,000$ $Y = 2,000$) となる京都大学構内座標によって表示した。
- 4 遺構の略号は、奈良国立文化財研究所の方式にしたがって、井戸：SE，土坑：SKのように表示し、各調査ごとに通し番号を1から付した。
- 5 遺物には、遺跡の調査名を示すローマ数字と、調査ごとの通し番号を1から付した。この遺物番号は、本文、実測図、写真を通して表示を統一した。
I：京都大学医学部構内AN18区の発掘調査
II：京都大学北部構内BJ31区の発掘調査
(例 I I：京都大学医学部構内AN18区出土遺物 I 番)
- 6 原則として、遺物の実測図は縮尺1/4、遺物の写真は約1/2に統一した。他の縮尺のものは、それぞれに縮尺を明記した。
- 7 第I部の参考文献は、本文中に、〔著者名 発表年〕の形式で表わし、第I部の末に一括した。第II部については、各章末の注に一括して記載した。
- 8 遺構・遺物の実測と製図は、清水芳裕、五十川伸矢、浜崎一志、宮本一夫、三宅由美、菅井敏美、千葉豊、寺島千春、谷口由利子、西川恵美子がおこなった。遺物の撮影は清水芳裕、宮本一夫が担当した。
- 9 本文は、西川幸治、久馬一剛、五十川伸矢、宮本一夫、菱田哲郎、難波洋三が各章を分担執筆した。執筆者名は、各章の初めに記した。
- 10 編集は、五十川伸矢が担当し、清水芳裕、浜崎一志、宮本一夫、難波洋三、千葉豊、菅原令子、西川恵美子が協力した。

京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和60年度

目 次

第 I 部 昭和60年度京都大学構内遺跡発掘調査報告

第 1 章 昭和60年度京都大学構内遺跡調査の概要	1
1 調査の概要	1
2 調査の成果	1
第 2 章 京都大学医学部構内 A N18区の発掘調査	3
1 調査の経過	3
2 層 位	3
3 古代・中世の遺跡	5
4 梵鐘鋳造遺構	15
5 近世の遺跡	18
6 小 結	20
第 3 章 京都大学北部構内 B J 31区の発掘調査	21
1 調査の経過	21
2 層 位	21
3 遺 構	23
4 遺 物	26
5 小 結	29
参 考 文 献	32
京都大学構内遺跡調査要項	34

第Ⅱ部 京都大学埋蔵文化財研究センター紀要Ⅵ

鴨東白河の鋳物工房	43
——京都大学構内の鋳造に関する遺跡——	
1 はじめに	43
2 教養部構内A P 22区の鋳造遺構と出土遺物	44
3 医学部構内A N 18区の鋳造遺構と出土遺物	48
4 そのほかの鋳造に関する遺跡	52
5 鴨東白河の鋳造工房	53
瓦の範と製作技術	57
——高麗寺系軒丸瓦の検討——	
1 はじめに	57
2 高麗寺跡出土軒丸瓦	59
3 高麗寺系軒丸瓦の展開	64
4 寺院と瓦工人	69
図 版	巻末

図 版 目 次

巻首図版 京都大学医学部構内 A N 18 区

梵鐘铸造遺構 S X 13 (西から)

- 1 京都大学吉田キャンパスの地区割と調査地点
- 2 京都大学医学部構内 A N 18 区
 - 1 調査区全景 (北東から)
 - 2 調査区北半全景 (東から)
- 3 京都大学医学部構内 A N 18 区
 - 1 井戸 S E 5 (北から)
 - 2 井戸 S E 36 (西から)
 - 3 井戸 S E 8 (北西から)
 - 4 土坑 S K 6 (西から)
 - 5 道路 S F 1 断面, 溝 S D 3・S D 9・S D 11・S D 12 (西から)
- 4 京都大学医学部構内 A N 18 区
 - 1 道路 S F 1 (東から)
 - 2 溝 S D 19 (北西から)
- 5 京都大学医学部構内 A N 18 区
S E 36・S K 31・S R 1・S D 11 出土遺物
- 6 京都大学医学部構内 A N 18 区
S D 9・S K 24・S X 6 出土遺物
- 7 京都大学医学部構内 A N 18 区
S X 13 出土鋳型
- 8 京都大学北部構内 B J 31 区
 - 1 流路 S R 2 (東から)
 - 2 建物 S B 1 (東から)
- 9 京都大学北部構内 B J 31 区
 - 1 流路 S R 2・建物 S B 1 と中世の溝群 (東から)
 - 2 流路 S R 1 と近世の溝群 (西から)
- 10 京都大学北部構内 B J 31 区
S R 2・黄褐色砂質土・茶褐色土・茶褐色砂質土出土遺物
- 11 京都大学北部構内 B J 31 区
 - 1 S R 2・茶褐色砂質土・灰褐色土・S D 6 出土遺物
 - 2 S R 1・茶褐色土・灰褐色土出土遺物

挿 図 目 次

医学部構内AN18区の発掘調査		鴨東白河の鋳物工房	
図1	調査区東西畔の層位……………4	図19	溶 解 炉……………44
図2	古代・中世の遺構……………5	図20	梵鐘鋳造坑SK257 ……45
図3	井戸SE5・SE36・SE8, 土坑SK6 ……7	図21	梵鐘鋳造坑 SK257・SK245…………45
図4	SE36出土遺物……………8	図22	AP22区出土の鋳型, 煉瓦, 轆の羽口, 埴塼…………47
図5	13~14世紀の土師器皿・ 碗の変遷……………9	図23	鋳造工房の復原……………47
図6	SR1・SE36・SD11・ SK31出土遺物…………11	図24	梵鐘鋳造遺構SX13…………49
図7	SD9出土遺物……………12	図25	半鐘の鋳造例……………49
図8	SK24出土遺物……………13	図26	京都太秦広隆寺蔵の梵鐘…………51
図9	梵鐘鋳造遺構SX13…………15	図27	SX13出土鋳型から 復原した梵鐘…………51
図10	SX13・SX17出土梵鐘鋳型…17	図28	AJ19区出土の鋳型, 轆の羽口, 埴塼…………52
図11	近世の遺構……………18		
図12	道路SF1の断面……………19		
北部構内BJ31区の発掘調査		瓦の範と製作技術	
図13	調査区北壁の層位……………22	図29	範の復原……………58
図14	古代の遺構……………24	図30	軒丸瓦の部分名称……………59
図15	中世の遺構……………25	図31	高麗寺跡出土軒丸瓦…………60・61
図16	近世の遺構……………25	図32	高麗寺系軒丸瓦……………65
図17	SR2・黄褐色砂質土・ 茶褐色土・茶褐色砂質土出土遺物…27	図33	雪野寺跡出土軒丸瓦の接合法…67
図18	SR1・茶褐色土・ 茶褐色砂質土出土遺物…………28	図34	4重弧文軒平瓦……………68

表 目 次

表1	SE36出土遺物……………8	表3	高麗寺系軒丸瓦の要素……………64
表2	京都大学構内遺跡の おもな調査……………38		

正 誤 表

京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和60年度

頁	行	誤	正
16	3	蒲	浦
16	17, 18	草の間	池の間
20	9	みれ〔中村直41〕,	みえ〔中村直41〕,
21	13	燃き打ちされ,	焼き打ちされ,
43	15	構内東辺	構内西辺
47	図23	S K 265とS K 245と	を入れ替え
48	3, 21, 25	S K 13	S X 13

第 I 部 昭和60年度京都大学構内遺跡発掘調査報告

第 1 章 昭和60年度京都大学構内遺跡調査の概要

第 2 章 京都大学医学部構内 A N18区の発掘調査

第 3 章 京都大学 北 部 構 内 B J31区の発掘調査

第1章 昭和60年度京都大学構内遺跡調査の概要

西川幸治 久馬一剛 難波洋三

1 調査の概要

京都大学埋蔵文化財研究センターは、吉田キャンパスおよび附属施設の敷地内における建物新営やその他掘削工事の際には、当該部局の報告にもとづき、予定地の埋蔵文化財の調査を、既知の遺跡との関係や過去の調査結果より、試掘、発掘、立合にわけて実施している。昭和60年度には、以下の発掘調査3件、立合調査13件、資料整理1件を実施した。

発掘調査	農学部初期胚操作動物実験室新営予定地(北部構内B J 31区)	(第3章, 図版1-153)
	医学部附属病院内科系病棟新営予定地(病院構内A J 18区)	(発掘中, 図版1-154)
	医学部内科系臨床研究棟新営予定地(病院構内A J 19区)	(発掘中, 図版1-155)
立合調査	工学部高分子化学教室棟別館等電気設備改修工事(本部構内A Z 25区)	(図版1-156)
	工学部建築系学科校舎新営その他の工事(本部構内A Z 30区)	(図版1-157)
	農学部畜産学科西圃場ネットフェンス取設(北部構内B J 30区)	(図版1-158)
	農学部附属牧場大型気密サイロ基礎等取設(京都府丹波町)	(表2)
	工学部分子工学専攻実験研究棟新営(本部構内A Z 22区)	(図版1-159)
	理学部極低温高分解能電子顕微鏡室新営(北部構内B G 28区)	(図版1-160)
	結核胸部疾患研究所病院診療棟新営工事(病院構内A E 10区)	(図版1-161)
	宇治地区外国人研究者等宿泊施設(京都府宇治市)	(表2)
	附属病院旧放射線科研究室電気幹線改修工事(病院構内A E 19区)	(図版1-162)
	理学部プラズマ実験装置室周辺配管工事(北部構内B F 32区)	(図版1-163)
	北部構内変電所設備接地改修工事(北部構内B D 33区)	(図版1-164)
	医学部基礎校舎(第Ⅱ期)新営工事の土木関係工事(医学部構内A N 18区)	(図版1-165)
	農学部初期胚操作動物実験室新営空調和其他工事(北部構内B J 32区)	(図版1-166)
資料整理	医学部基礎校舎新営(医学部構内A N 18区)	(第2章, 図版1-143)

2 調査の成果

前節で記載した調査のうち、発掘調査を実施した医学部構内A N 18区(第2章参照)と、北部構内B J 31区(第3章参照)を中心に、昭和60年度に整理を終えた15件について、その成果を略述する。

弥生時代 北部構内B J 31区で、弥生時代前・中・後期の土器が出土した。北部構内では、B E 29区(図版1-54)[岡田・吉野79]で中期初頭の方形周溝墓4基と、それを区画する2本の溝が検出されている。また、追分地藏地点(図版1-6)[石田・中村72]、B D 30

昭和60年度京都大学構内遺跡調査の概要

区(図版1-109)[浜崎83], B G31区(図版1-56)[泉ほか85], B E33区(図版1-125)[泉・三宅86]などで, 前期を主体とする弥生時代の遺物が少量ではあるが出土しており, 付近の微高地上に集落が営まれた可能性が強い。B J31区出土遺物も, この集落にかかわるものであろう。周辺の調査がまたれる。

古墳時代 北部構内B J31区で, 古墳時代前半の土師器が出土した。いわゆる布留式のほか, 近江系の甕がかなり高い割合で含まれており, 近江との強い地域間交流が, 弥生時代以来引き続いて存在していたことを示している。

平安時代 医学部構内A N18区で, 11世紀に埋積した河川を検出した。この河川は旧白川の支流のひとつで, 北東から南西へ流れ, 高野川系の流路にそそいでいたと考えられる。病院構内A F14区(図版1-39)でもほぼ同時期の河川が検出されており[岡田81], これによって医学部から病院構内にかけての一带は, このころまで時として河川流路となる不安定な土地であったことがわかった。

鎌倉時代 医学部構内A N18区で, 13世紀前葉の梵鐘鑄造遺構を検出した。小型の鉄製梵鐘を鑄造したもので, 出土した鑄型から, 梵鐘の概形を復原することができた。梵鐘鑄造遺構は, 教養部構内A P22区(図版1-111)[五十川・飛野84]でもみつかっており, 古代から中世にかけて, 近辺に鑄造にたずさわる工人がいたと考えられる。また, 同調査区で検出した12世紀後葉から14世紀前葉にわたる井戸, 溝, 土坑などは, 北接するA O18区(図版1-41)[泉・吉野79]で検出した遺構とともに, 藤原北家勸修寺流の人々の邸宅やその菩提寺の浄蓮華院にかかわるものであろう。また, これらの遺構から出土した資料によって, 従来の土師器編年を検討することができた。

室町時代 医学部構内A N18区で, 黄灰色シルトを採取した土取り穴を検出した。同様の土取り穴を, 医学部構内A P19区(図版1-74)[清水・吉野81], A N20区(図版1-134)[五十川86]などでも検出しており, 同構内一帯の土地利用復原のための貴重な資料を得た。北部構内B J31区では, 15~16世紀初頭の流路を検出したが, これは中世の田中構に関係する遺構の可能性がある。今後の調査が期待される。

江戸時代 医学部構内A N18区で, 江戸時代後半の道路, 側溝, 野壺, 水田, 溝などを検出した。道路は白川道から分岐して, 吉田村へむかう東西方向のもので, 近世の絵図にはみられない。この道路は, 字窪と字堀の内の境界をなしていたと考えられる。同調査区で検出した水田は, 棚田をなしており, 水路と柵と思われる多数の柱穴をともなっている。北部構内B J31区でも水田とこれにともなる溝を検出した。

第2章 京都大学医学部構内AN18区の発掘調査

五十川伸矢 宮本一夫

1 調査の経過

本調査区は、吉田山の西麓、京都大学医学部構内の西部に位置する(図版1-143)。ここに医学部基礎校舎の新営が計画されたため、隣接するAO18区の調査成果[泉・吉野79]を勘案して、新営予定地全域の発掘調査を実施することになった。発掘調査は、昭和59年9月1日に開始し、昭和60年3月末に終了した。調査面積は1920.4㎡。調査の結果、旧建物の基礎などによって、著しく遺跡が破壊されていることが判明したが、それにもかかわらず、古代の河川、中世の溝・土坑・井戸・梵鐘鑄造遺構や近世の道路・溝・水田などが検出され、吉田山西麓に位置する当地の歴史的景観の変遷を解明する資料を得ることができた。調査区一帯は中世に藤原北家勸修寺流の人々の邸宅や菩提寺が存在したことが推定されており、今回の調査成果は、これを検討する材料となるだろう。また、梵鐘鑄造遺構は教養部構内AP22区の検出例[五十川・飛野84]と同様に、全国的にみても類例の少ないものである。

2 層位

本調査区の基本層序は、上から順に表土(第1層)、灰褐色粘質土(第2層)、灰褐色砂質土(第3層)、茶褐色土(第4層)、黄褐色砂質土(第5層)、地山の灰褐色砂礫(第6層)である(図1)。灰褐色粘質土と灰褐色砂質土は近世後半の水田の耕土と床土を形成するものである。灰褐色砂質土は、地山の段差がある地点とともに落ち込み、棚田が形成されていたと考えられる。現在の西に向かって緩傾斜をなす地形は、その後の造成によって形成されたと推定できる。

茶褐色土は調査区全面にみられるが、東半部の地山の高い地点では薄い堆積層をなしている。茶褐色土は地山の段差のある部分で同様に落ち込んでおり、地山の段差を境に高い地点の茶褐色土が低い地点の茶褐色土の上に堆積している。また、調査区北壁東半部付近にみられる茶褐色土には、多量の焼壁片が含まれており、この地点周辺に、なんらかの建物遺構の存在が予想される。この茶褐色土は、13~14世紀ごろの遺物を包含している。なお、茶褐色土は調査区西北部の西端に位置する梵鐘鑄造遺構SX13付近では、上層と下層

京都大学医学部構内AN18区の発掘調査

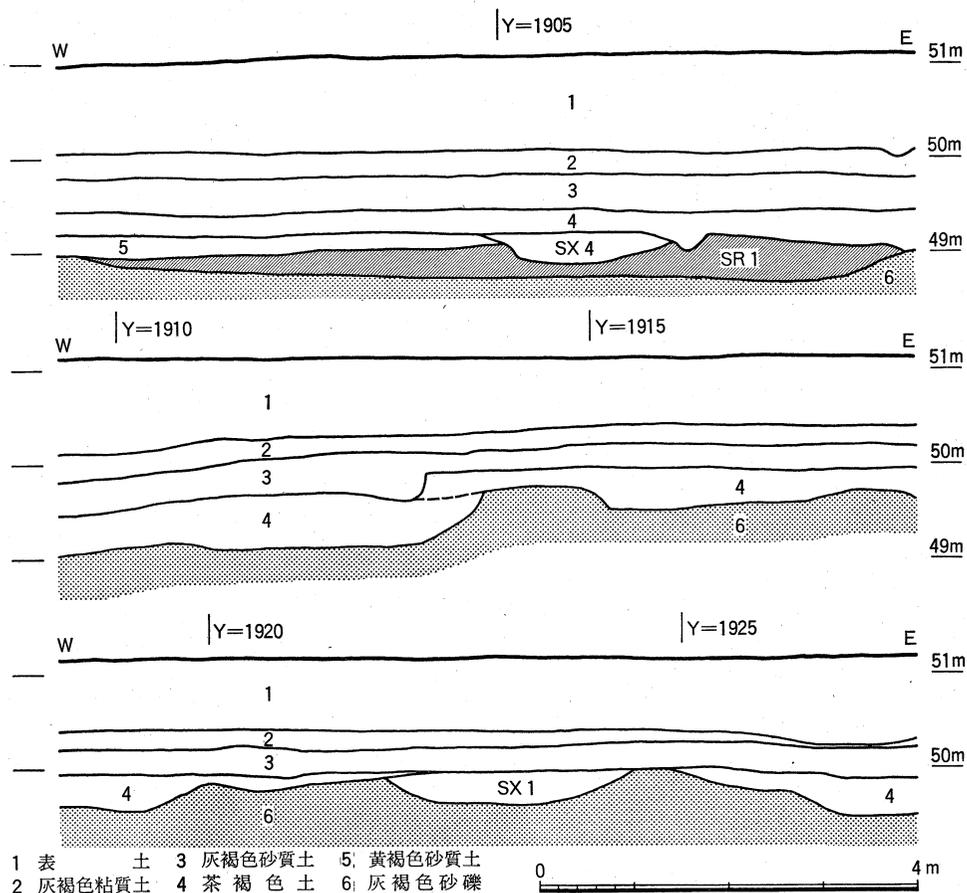


図1 調査区東西畔の層位 縮尺1/80

で包含する遺物に多少時期差が認められる。この鑄造遺構は下層の13世紀前葉ごろのものと推定される。

地山には灰褐色砂礫のほか、黄色砂、黄灰色シルトもあり、このうち灰褐色砂礫は、高野川系流路によってもたらされた可能性がある。この灰褐色砂礫の上に堆積した黄色砂、黄灰色シルトは、調査区東半部に多くみられる。中世には、この黄灰色シルトを採取するために、東南部に土取り穴が掘削された。また、調査区中央部で、西側へ地山が急激に落ち込み、南北につづく段差を形成している。この地山の落ち込み部に北東から南西方向に河川SR 1が流れ込んでいる。このSR 1は、11世紀のものと推定できる。調査区西北部では、SR 1の埋積後、SR 1から調査区北西端にかけて黄褐色砂質土が堆積している。この層は、本調査区ではこの地点のみにみられる。

3 古代・中世の遺跡

(1) 古代の遺構 (図2)

調査区西北部には、北東から南西にむかって流れる河川SR1が存在する。埋土には、須恵器壺、緑釉陶器碗などが少量包含されている。これらの遺物は11世紀の特徴を示しており、SR1はそのところに埋積したものと推定される。この南西方向に流れる河川SR1は、調査区西端近くを南流していたと推定される高野川系流路にそそぐ一支流と考えることができ、調査区の地形が安定するのは、このSR1の埋積後、すなわち11世紀以後のことになる。

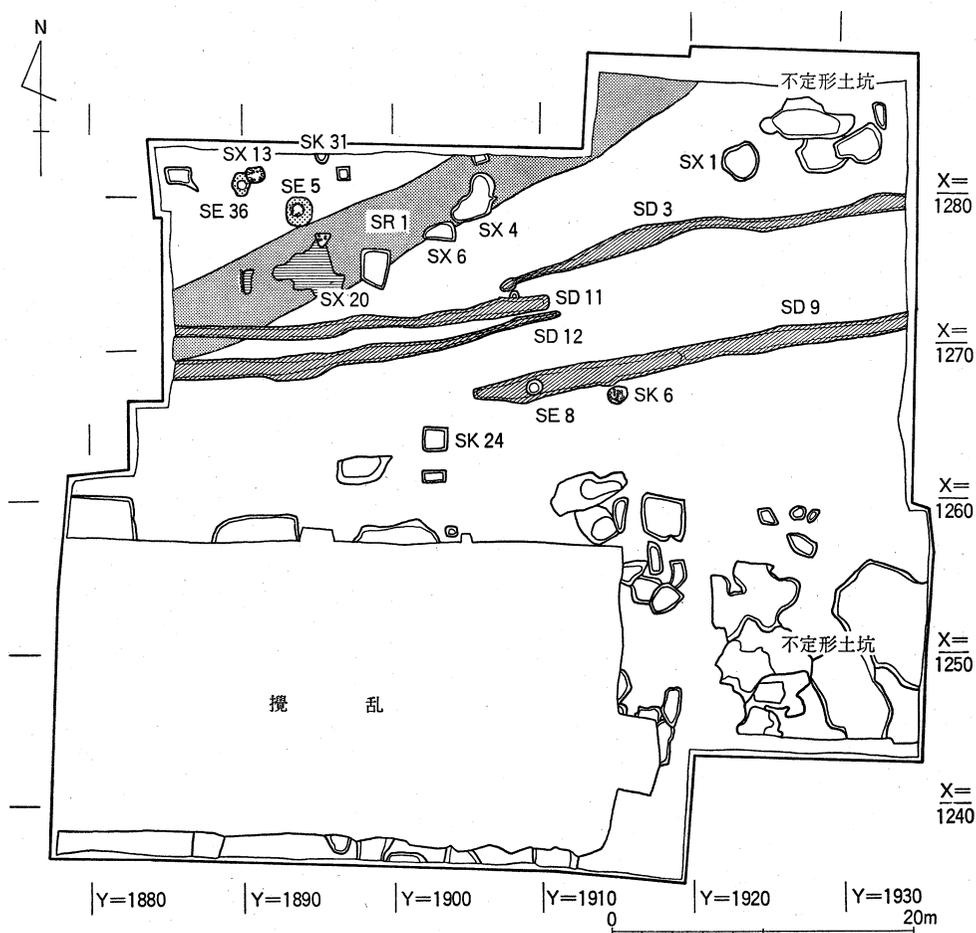


図2 古代・中世の遺構 縮尺1/500

(2) 中世の遺構 (図版2・3, 図2・3)

調査区西北部には、井戸や柱穴などの生活に関連する遺構や梵鐘鑄造遺構がある。また中央部には南西方向に溝がはしり、東半部から南半部には土取りによる不定形土坑が存在する。このように、性格の異なる遺構は地域を異にして分布する。

井戸 SE5とSE36は石組すり鉢形の井戸で、SE5は12世紀後葉～13世紀前葉、SE36は13世紀前葉の遺物が出土した。SE8は桶積み上げ井戸で、14世紀前葉の遺物が出土した。

溝 近世の道路SF1とほぼ同様の位置で、しかも同じ方向に、SD12, SD11, SD9, SD3の4本の溝が存在する。SD12は12世紀後葉～13世紀前葉、SD11は13世紀中葉、SD9は13世紀後葉、SD3は14世紀前葉の年代を示し、あいついで掘削されたことがわかる。これらの溝は、それぞれが地山の段差部で終結しており、段差を利用して土地境界として機能していたと考えられる。

土坑 SK6は粗雑な石組をもった土坑である。出土遺物が少なく年代を特定しがたいが、調査区北半の遺構の時期におさまるものと考えられる。SK24は一辺約1mの方形の土坑で、14世紀中葉ごろの遺物が出土した。また、SK31は調査区北壁中央部でその南半分を検出し、13世紀中葉ごろの遺物が出土した。

柱穴 調査区の北東部一帯には多数の柱穴があり、またその付近から焼壁片が出土しており、建物の存在が想定できるが、その平面位置を確定することはできなかった。

不定形土坑 調査区の北東部から南半には、不定形土坑がひろく分布している。これらは地山の黄灰色シルトを掘削した跡である。その形や大きさは一定せず、年代も14世紀にはじまり14世紀中・後葉に増加し15世紀前葉ごろにまでおよぶ。

土間状遺構 調査区の西端中央部に土間状遺構SX20がある。これは地山の灰褐色砂礫層の上面に黄灰色シルトを固くたたきしめたもので、西側に石列がならぶ。入口の敷石となるものであろうか。柱穴をいくつか検出したが、明確な建物を検出することはできなかった。

梵鐘鑄造遺構 調査区の北西隅で梵鐘鑄造遺構SX13とSX17を検出した。SX13は、井戸SE36の上に構築されており、小型の鉄製の梵鐘を鑄造したものである。13世紀前葉ごろのものと推定できる。SX17は梵鐘の鑄型を捨てた場所でSX13の鑄型とは異なっており、その年代も明確でない。これらの梵鐘鑄造遺構に関しては、第4節でその遺構の構造や出土鑄型について詳述する。

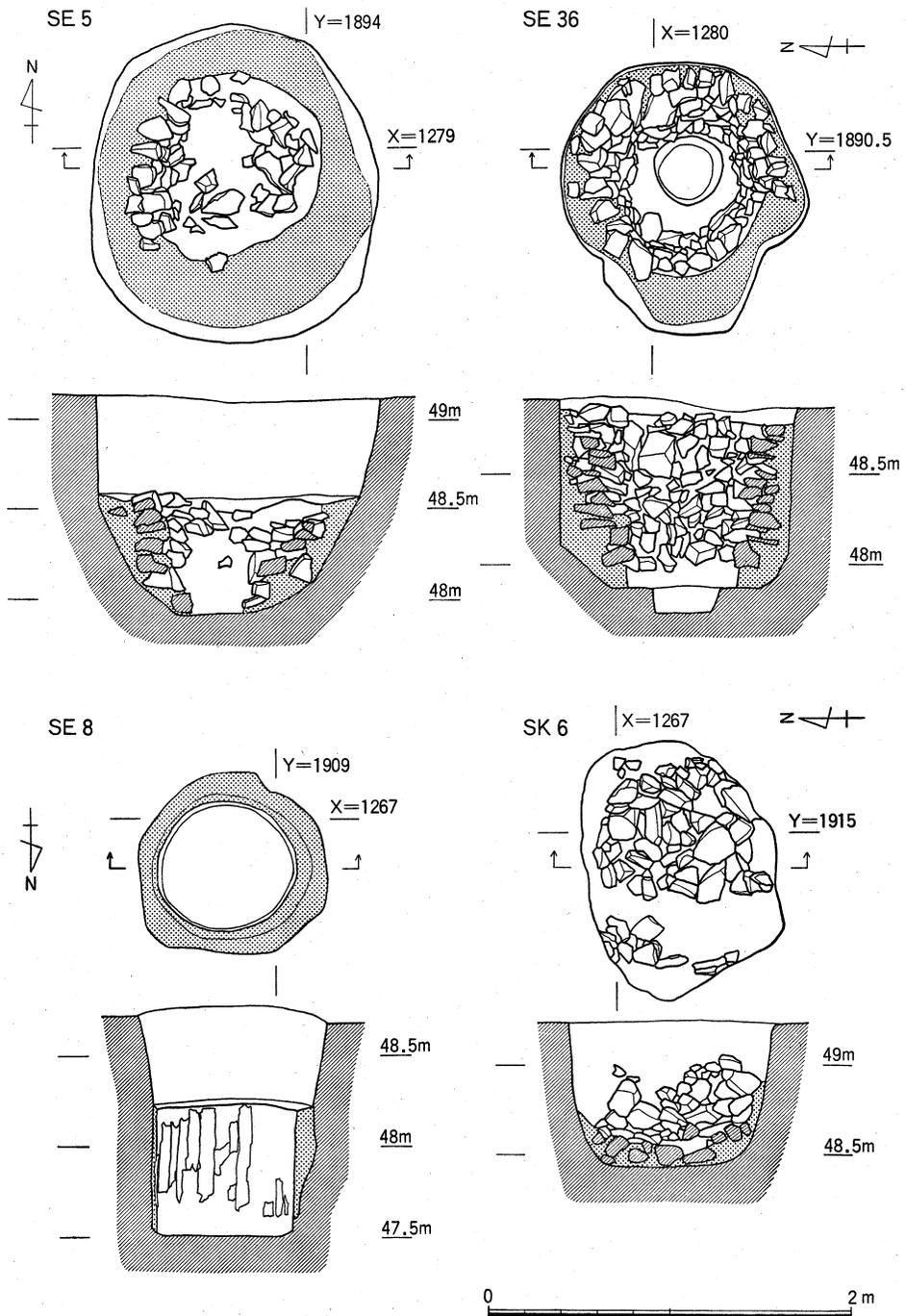


図3 井戸SE 5・SE 36・SE 8, 土坑SK 6 縮尺1/40

(3) 古代・中世の遺物 (図版5・6, 図4~8, 表1)

古代の遺物はSR1から出土した。I32は須恵器壺である。瓦質で底径が大きく胴部が半球形状を呈する。11世紀中頃の特徴を示す[宇野84]。I33の緑釉陶器の椀は近江産である。高台断面が三角形状を呈しており、退化傾向を示す。11世紀代のもと考えられる。

中世の包含層は13~14世紀の遺物を主体としている。12世紀後葉~13世紀前葉の土師器皿をとまなうSE5, SD12を除いて、主体を占める13~14世紀代の良好な一括資料をもつ井戸、溝、土坑が存在する。これらはSE36, SK31, SD9, SK24, SX6であり、この時期における土師器編年の再検討の基準とすることができる。

SE36は、本調査区内で、最も豊富な土師器が出土した井戸である。口縁部計測法によって総個体数を総計し、その法量を表1に示した。また土師器の分類に関しては、宇野隆夫の分類[宇野81]をもとにしている。ただし、宇野のいうD類のうちD₂類とD₃類に関し

表1 SE36出土遺物

規格別口縁部形態の比率		
個体数	皿A I	皿A II
C ₃ 類	5.3%	
C ₄ 類	17.9%	5.9%
C ₆ 類	6.4%	
D ₃ 類	30.4%	57.8%
D ₅ 類	40.0%	36.3%
合計	100.0%	100.0%
種類別の比率		
総個体数	49.5個体	
皿A I	22.3%	
皿A II	77.5%	
受皿	0.2%	
合計	100.0%	

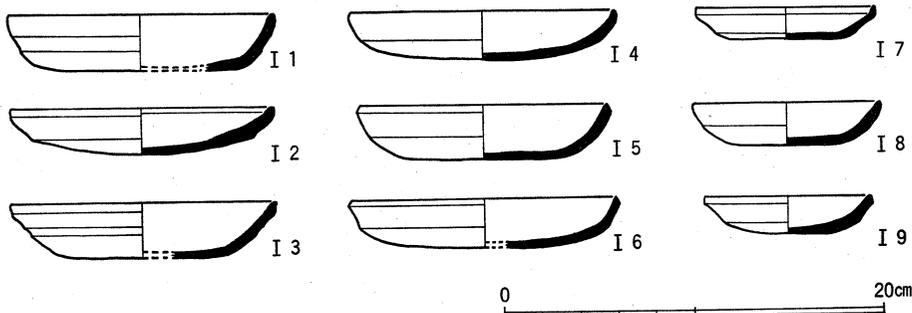
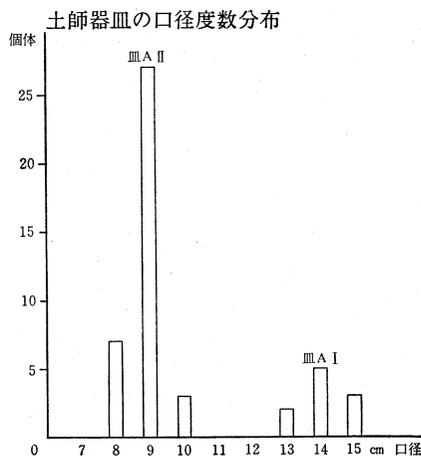
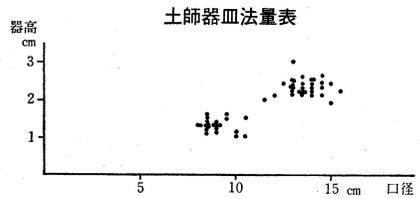
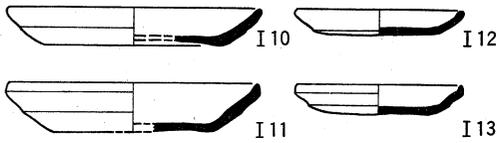


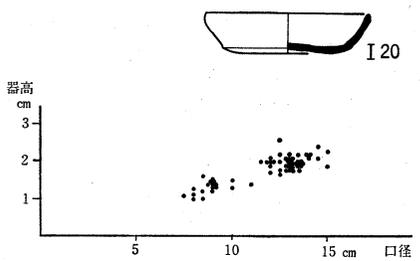
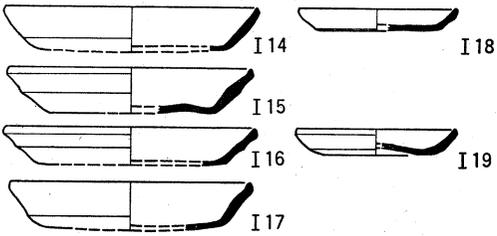
図4 SE36出土遺物 (I1~I9土師器)

ては、明瞭に区別し得ない場合が多い。1段撫で手法で、口縁が直線的ないし、弱く内湾し、端部が丸いものは、D₃類として一括した。一方、1段撫で面取り手法はD₄～D₆類に細分されている。このうち、D₅類は底部から口縁にかけて屈曲が鋭いものをいい、D₄類とは区別できるが、これは漸移的な変化のため明瞭に分離し難い。ここでは一応D₅類にD₄類を含めて考えておきたい。また、D₆類に関しては、D₅類と同じ製作技法をもつも

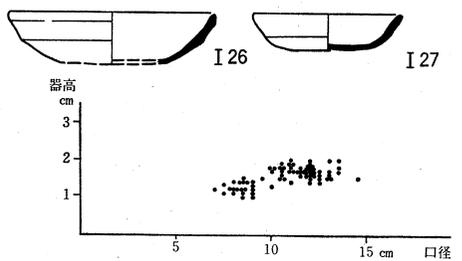
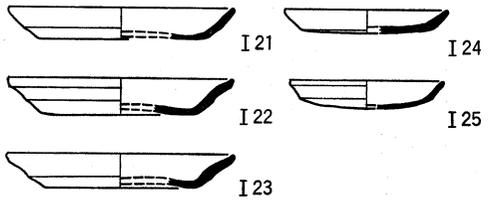
SK 31



SD 9



SK 24



SX 6

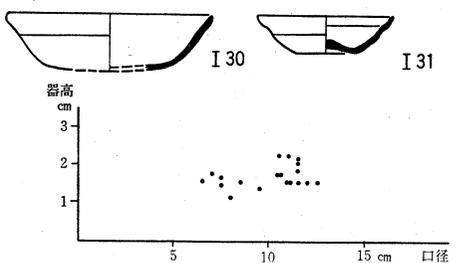
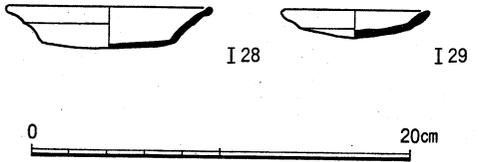


図5 13～14世紀の土師器皿・碗の変遷

ののうち、法量の小さいものをさし、D₆類をD₅類に含めて考えたい。このような分類基準にしたがって、SE36を眺めると以下ようになる。I 1～I 6は大型の皿(皿A I)、I 7～I 9は小型の皿(皿A II)である。I 1は2段撫で手法C₃類、I 2・I 7は2段撫でつまみ上げ手法のC₄類、I 3は2段撫で面取り手法のC₅類、I 4・I 8は1段撫で手法D₃類、I 5・I 6・I 9は1段撫で面取り手法D₅類である。皿A Iは総数11個体と少ないが、D₅・D₃類が主体を占め、C₄類がこれにつき、少量のC₃・C₅類が存在する。皿A IIは総数38.3個体で、D₃・D₅類を主体とし、C₄類が少量みられる。法量では、皿A Iが口径14cm、皿A IIが口径9cmにピークがみられる。法量において、これらを他の基準資料と比較すれば、白河北殿北辺の調査SD13(平安京Ⅳ期新段階)[宇野81]や教養部構内AO21区SE6(中世京都Ⅰ期古段階)[泉83]に対比ができる。平安京Ⅳ期新段階から中世京都Ⅰ期古段階への変化は型式学的には、D₄類からD₅類への変化によって説明されている[宇野81]が、現実的には上述したように、D₄類とD₅類は明確に区別できない。平安京Ⅳ期新段階と中世京都Ⅰ期古段階を、土師器皿のみから区別することは、難しいといえよう。後述する土師器以外の共伴遺物の検討から、SE36を中世京都Ⅰ期古段階のものとしておきたい。

ついで、SK31、SD9、SK24、SX6の土器変化過程について詳述したい。これらの土師器は口縁部計測法による個体数復原にたえ得るような資料数をもたないところから、残存部1/12以上のものを1点として法量表を作成している。定量的なあり方を知ることとはできないが、法量の変化過程の目安になるものと思われる。

I 10～I 19・I 21～I 25・I 28・I 29は土師器皿で、そのほかは灰白色の土師器碗である。皿のうち、法量表においても皿A Iと皿A IIに大別できる。大型である皿A Iは法量表で示すようにSK31からSX6にかけて次第に口径を減じており、各遺構ごとに14, 13, 12, 11cmを平均値とする。小型である皿A IIも、明瞭ではないが口径の縮小化の傾向にある。次に土師器の製作上の手法に注目すると、皿A Iと皿A IIとでは1段撫でを施すもので面取りするものとししないものにわかれる。それぞれを仮にa手法、b手法と呼んで皿A Iを眺めてみよう。SK31ではa手法のI 11とb手法のI 10がある。SD9では同様にa手法のI 15とb手法のI 14があるが、他に1段撫でをより外反気味に施し器壁の薄いI 16・I 17が出現する。それぞれa手法のI 16、b手法のI 17に細別できる。SK24では従来b手法のI 21が残存するものの、縮小化して口縁を外反させて1段撫でを施すa手法のI 22、b手法のI 23が主体を占める。SX6では器壁が薄くより口縁を外反させたb手法

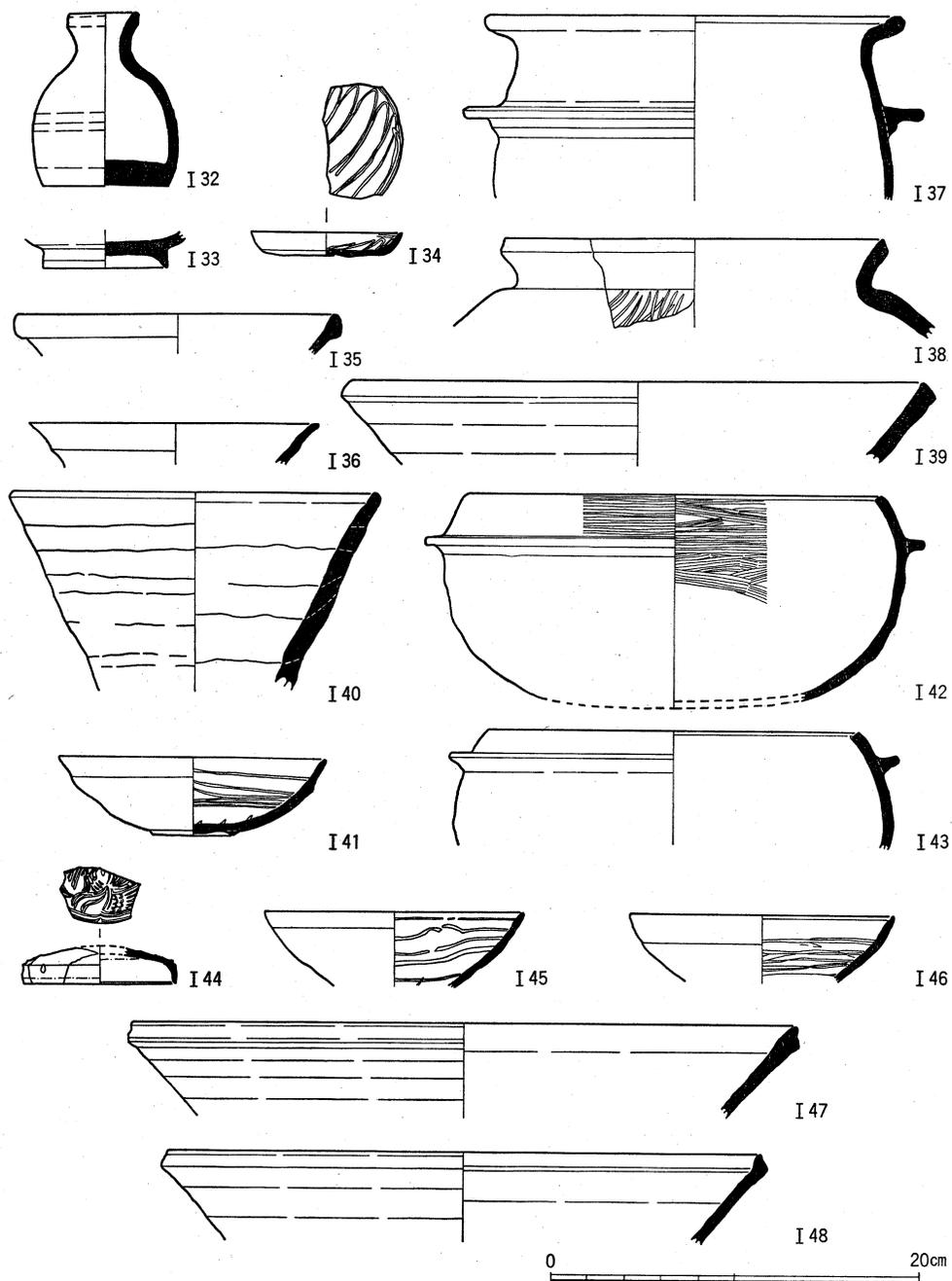


図6 SR1出土遺物（I 32須恵器，I 33緑釉陶器），SE36出土遺物（I 34瓦器，I 35白磁，I 36灰釉系陶器，I 37土師器，I 38・I 39須恵器），SD11出土遺物（I 40土師器，I 41～I 43瓦器），SK31出土遺物（I 44白磁，I 45・I 46瓦器，I 47・I 48須恵器）

の I 28 がみられる。この段階ではほぼ b 手法のみに移行する。同様に皿 A II についても a 手法, b 手法が各段階に併存してみられるが, SX 6 で b 手法のみの退化形態である I 29 に変化している。以上のように, 皿の場合, SK 31 から SX 6 にかけて明瞭に型式学的変化過程が追えるとともに, 各段階での法量規格の推移がよみとれる。一方, 灰白色の椀は SD 9 以降にみられる。大型の椀 A I と小型の椀 A II に分けられるが, 椀 A II の I 20 が SD 9 で初出し, 椀 A I の I 26 は SK 24 で初出する。椀 A I は, SK 24 では口縁端部を面取り風に内湾させた I 26 であるが, SX 6 では面取りをせず口縁が外反気味な I 30 になっている。また, 椀 A II は SD 9 から SX 6 にかけて I 20, I 27, I 31 と底径を次第に減じ口縁を次第に外反させながら外面の撫で幅を狭めている。そして SX 6 の段階に至って, 凹み底小椀の I 31 へと変化する。

以上, 次第に外反気味な撫でを施すという椀と皿に共通した型式学的変化過程を理解しえた。従来の分類でいえば, 皿 A I の場合 I 10・I 14・I 21 が D₃ 類, I 11・I 15 が D₅ 類, I 17・I 23 が E₁ 類, I 16・I 22 が E₂ 類, I 28 が E₃ 類に該当しよう。同時に, 各段階の

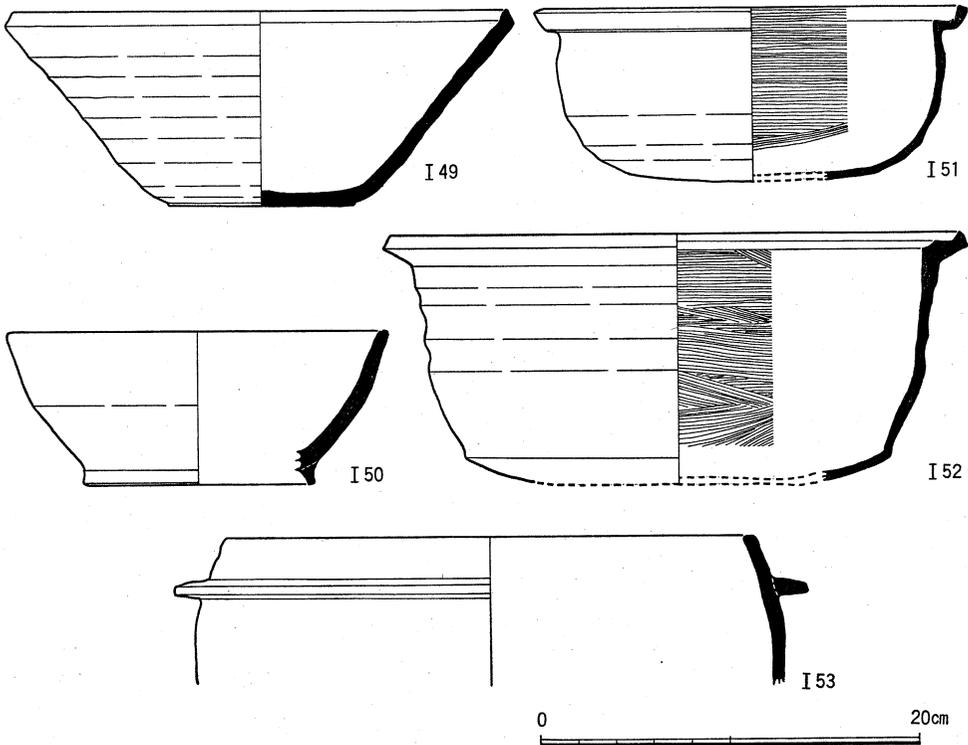


図7 SD 9 出土遺物 (I 49 須恵器, I 50 灰釉系陶器, I 51・I 52 瓦器, I 53 土師器)

皿の分量規格が漸次縮小していく変化過程を知ることができたといえよう。従来の土師器編年とてらし合せれば、S K31が中世京都Ⅰ期中段階(13世紀中葉)、S D9が中世京都Ⅰ期新段階(13世紀後葉)、S K24が中世京都Ⅱ期古段階(14世紀前葉)、S X6が中世京都Ⅱ期中段階(14世紀中葉)にあたると考えている。ここで、これら土師器皿・碗に伴出するその他の輸入陶磁器・中世陶器から、この編年観の妥当性を述べてみたい。

I 34～I 39はS E36出土遺物である。I 34は瓦器小皿。口径8cmとやや小ぶりであるが、見込みには省略された暗文を施すところから、橋本久和編年Ⅲ—Ⅰ期にあたるものであろう〔橋本80〕。I 35は玉縁口縁の白磁碗，I 36は灰釉系陶器碗。I 37の土師器羽釜は頸

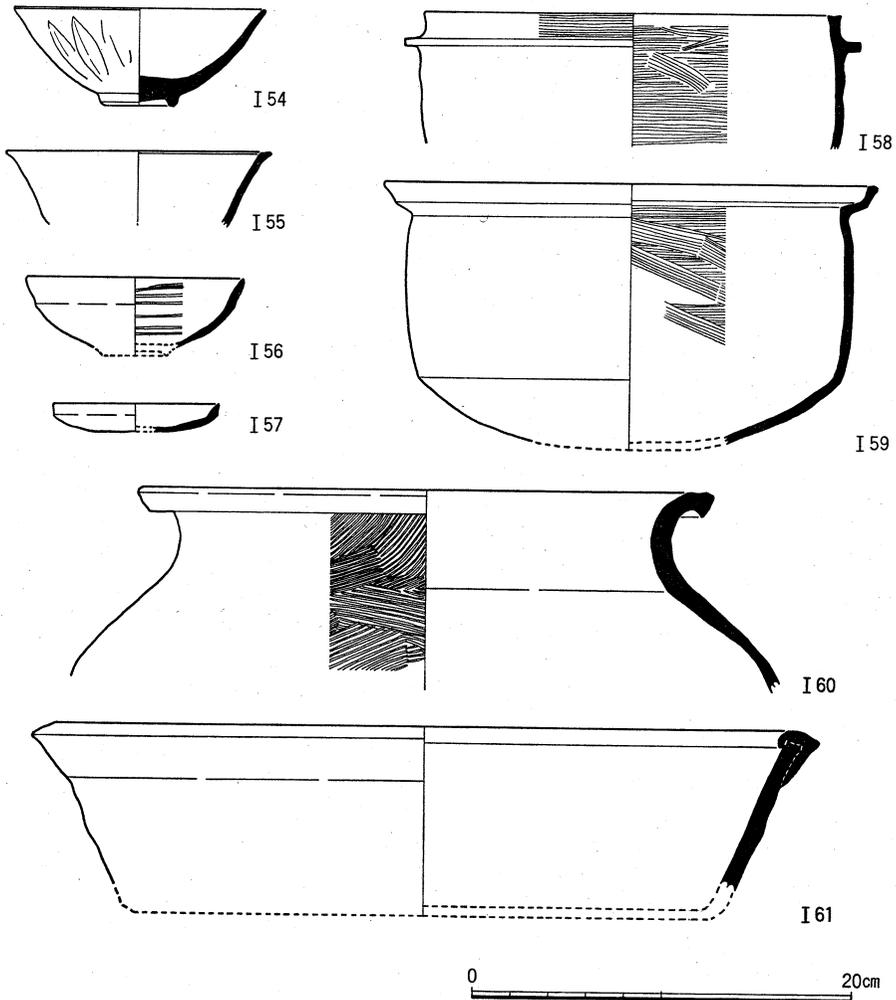


図8 S K24出土遺物 (I 54青磁, I 55白磁, I 56～I 59・I 61瓦器, I 60須恵器)

部が内傾気味に立上がり、口縁端部を外反させて丸くおさめている。菅原正明のいう河内B₂型〔菅原83〕にあたり、13世紀前半代に位置づけられる。I 38は須恵器甕、I 39は須恵器すり鉢である。瓦器小皿や土師器羽釜の年代、あるいは須恵器甕・すり鉢の年代観〔宇野84〕から、S E36は中世京都I期古段階(13世紀前葉)に比定しておきたい。

I 40～I 43はS D11出土遺物である。I 40は土師器壺。一般に塩壺と呼ばれるもので、内外面に粘土紐の継ぎ目を残し口縁が外方に開く。類例は本部構内A X28区の中世京都I期中段階のS K51出土資料〔五十川83〕に認められる。I 41は瓦器碗。口径約14cmで内面には螺旋状の暗文を施し、見込みには同心円の暗文を施す。橋本編年のⅢ—2期にあたる。瓦器羽釜には三足がつかない。これは中世京都I期古段階に出現する。浜崎一志の編年〔浜崎84〕によれば、I 42は中世京都I期古段階、I 43はI 42にくらべ口縁が内傾し鑿部が上方につくところから、中世京都I期中段階に相当しよう。したがって、瓦器碗や羽釜の編年観から、S D11は中世京都I期中段階(13世紀中葉)のものである。

I 44～I 48はS K31の出土遺物である。I 44は白磁の印花花鳥文合子蓋。I 45・I 46は瓦器碗。口径約14cmで、内面に螺旋状の暗文を施しており、I 41同様、橋本編年のⅢ—2期にあたるものであろう。I 47・I 48は須恵器すり鉢。宇野編年によれば、13世紀中ごろとされる。S K31は瓦器碗や須恵器すり鉢から、先の土師器皿の位置づけ同様、中世京都I期中段階(13世紀中葉)に比定されよう。

I 49～I 53はS D9出土遺物である。I 49は須恵器すり鉢、I 50は灰釉系陶器すり鉢。I 51・I 52は瓦器鍋である。I 51は口縁部が2段に屈曲するが、蓋受けの部分が水平で、屈曲が鋭いものである。浜崎編年によれば、中世京都I期新段階といえる。I 52は口縁部の2段の屈曲部があまく、屈曲部内面を面取るものであり、類例は認め難い。I 53は土師器羽釜である。

I 54～I 61は中世京都II期古段階のS K24出土遺物である。I 54は龍泉窯系蓮弁文青磁碗、I 55は白磁碗である。I 56は瓦器碗、I 57は瓦器小皿である。瓦器碗は11.5cmと小ぶりで、内面には粗雑な螺旋暗文が施される。瓦器小皿は暗文がみられない。両者ともに、橋本編年のⅣ—1期にあたろう。I 58は瓦器羽釜。口縁部が短く直立する2類に分類される。I 59は瓦器鍋。I 51にくらべ口縁屈曲部があまく、型式学的な退化傾向を示す。I 58・I 59ともに胴部下端で鋭角的に折れ曲がるようであり、この時期の特徴的遺物であらう。I 60は須恵器甕。胴部外面に細かく綾杉状に平行叩きを施しており、14世紀代のものであろう。I 61は瓦器盤。以上、総じて、中世京都II期古段階の特徴を示している。

梵鐘 鑄造 遺構

4 梵鐘鑄造遺構

注目すべき遺構として、中世の梵鐘鑄造遺構SX13を調査区北西隅で検出し、梵鐘鑄造のための内型や外型を発見した。この遺構はすべて調査後取上げて保存した。

(1) 遺構の構造 (巻首図版, 図9)

調査区北西隅の茶褐色土は、梵鐘の鑄型を包含しており、黄褐色砂質土の上面で、梵鐘鑄造時の現位置をたもつと考えられる内型と、その周辺に散乱する外型を発見した。内型は東半分を破壊されていたが、外径30cmで、残存高は約15cmである。その表面は堅く焼成され、赤褐色を呈する。内部は真土で形成され、鑄型の小片を含んでいる。中央部に空洞はないが、底部中央がややもちあがり、あるいは掛木が存在した可能性を示す。なお、内型と外型を設置する定盤を識別できなかった。

この内型の周囲を精査したが、鑄造坑は検出できず、鑄造時には内型は当時の地表面上に設置されていたと推測できる。また、内型の表面には鉄の小塊が付着しており、鑄造梵鐘が鉄製であったことを明瞭に示す。SX13は井戸SE36が埋積した直上に構築されており、13世紀前葉ごろの年代をあてることができる。

このほか、SX13の南側で銅を含んだ炉壁が出土した。また、梵鐘の外型の破片が若干集中して出土した。これらの外型はSX17としてとりあげたが、鑄型を廃棄したものであ

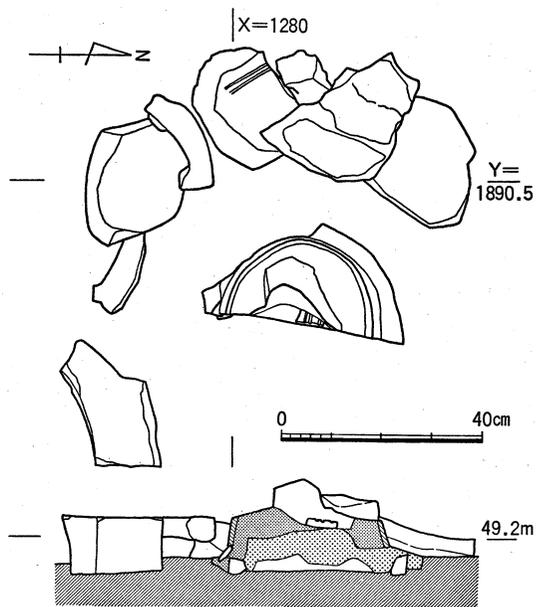


図9 梵鐘鑄造遺構SX13 縮尺1/15

り、その出土鑄型もSX13出土の鑄型とは形態の異なる別個体のものである。

こうした中世の梵鐘鑄造遺構は、奈良県桜井市山田寺〔奈文研80pp.30-40〕、福井県坂井郡丸岡町豊原寺跡〔丸岡町教委81pp.18-19〕、福岡県太宰府市銚ノ蒲遺跡〔山本・狭川84〕、大阪府南河内郡美原町真福寺遺跡〔大阪府教委86 pp.25-30〕、長野県上伊那郡飯島町寺平遺跡〔友野79〕、岐阜県恵那郡坂下町金屋遺跡〔坂下町教委75 pp.1-19〕などで発見されている。これらの遺跡では、いずれも一辺が2 m内外の隅丸方形の土坑内に、定盤と内型、外型を設置し、梵鐘を鑄造するものである。しかし、本調査区例は土坑をとまわず、当時の地表面上に内型と外型を設置したと考えられる。これは、これまでの発見例とまったく異なっている。

(2) 出土鑄型 (図版7, 図10)

SX13の内型の周囲から出土した外型の内径は30cm余で、この内型と組み合わせて梵鐘を鑄造するためのものであることがわかる。外型は粘質土の外壁の内側に、細かい真土を塗りつけて文様を付し、全体を赤褐色に焼成している。表面にはクロミ(煤)を付着させている。

梵鐘の各部分の特徴づける外型の実測図を図10に示す。I62～I72はSX13出土鑄型、I73はSX17出土鑄型である。

I62・I63は笠形と上帯、I64～I66は草の間、I67・I68は中帯の部分の鑄型である。笠形には凸線がなく、上帯にも文様はない。草の間の下方にある上下の外型の合わせ目には、段をつくっていることが特徴である。I69は撞座の部分の鑄型。撞座は直径約7 cm。八花形の中房には1+8顆の蓮子をふくみ、その外側には雄蕊帯をめぐらす。その周囲には、2個の子葉をふくむ複弁華文が配されている。この撞座の部分は別造りではなく型押しによるものであろう。I70～I72は下帯と駒の爪の部分である。上帯と同様、下帯にも文様はなく、駒の爪は、あまい稜をもち、やや外側に張り出す形態を示す。SX17出土の鑄型(I73)は、下帯の幅や駒の爪の形状がSX13出土鑄型と異なっており、別個体であるが、下帯に文様がないことや復原径などは類似する。

このほか、SX13から文字あるいは装飾と考えられる彫り込みをもつ鑄型の小片が若干出土したが、小片のためこれらを判読することができない。

なお、この梵鐘鑄造遺構SX13については、その鑄造技術や鑄造された梵鐘に関して、五十川が第Ⅱ部で検討し、吉田山西麓一帯に存在した白河の鑄物工房に言及した。あわせて参照していただければ幸いである。

梵鐘鑄造遺構

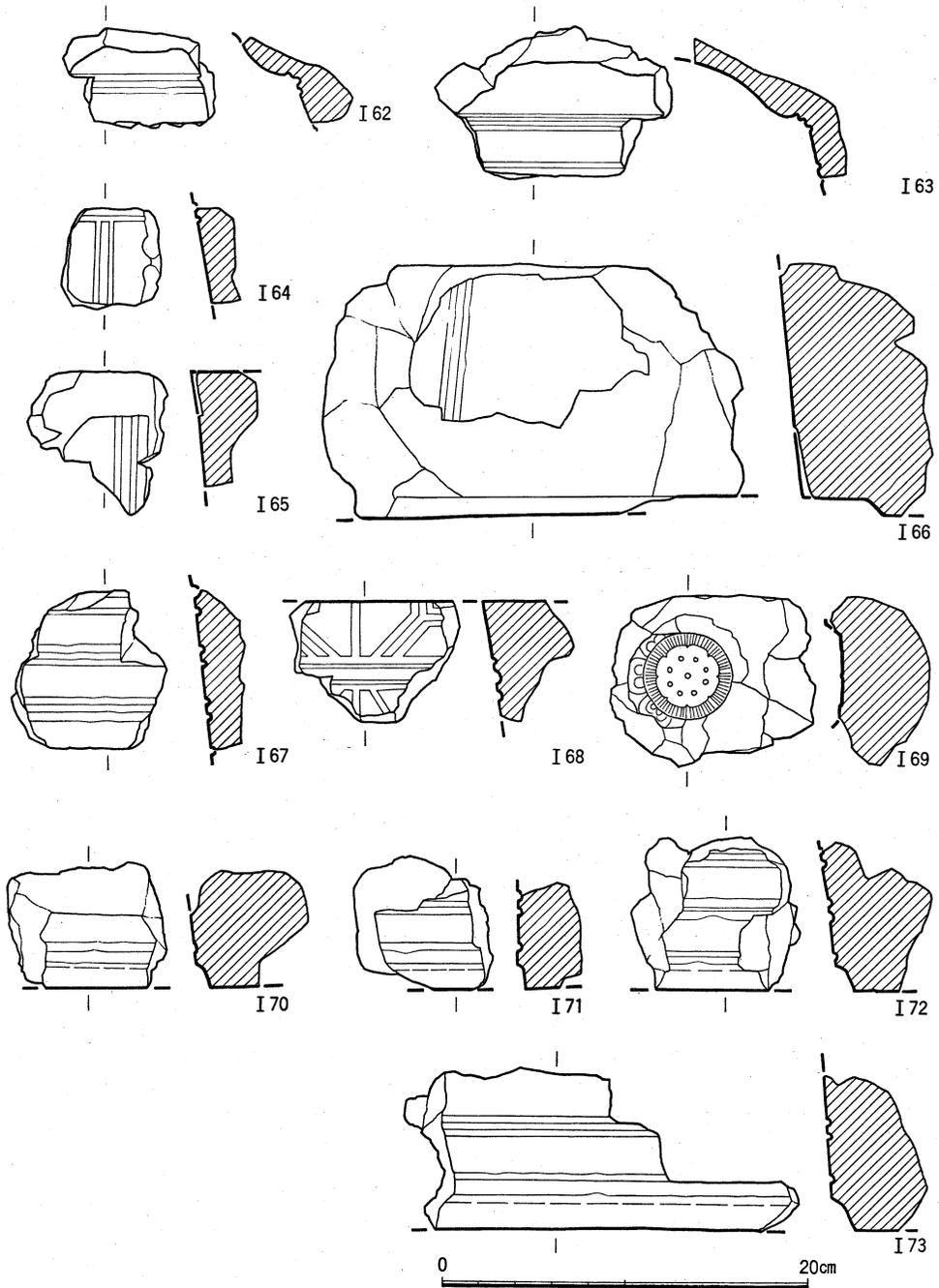


図10 S X13出土梵鐘鑄型(I 62・I 63笠形と上帯, I 64~I 66池の間, I 67・I 68中帯, I 69撞座, I 70~I 72下帯と駒の爪), S X17出土梵鐘鑄型(I 73下帯と駒の爪) 縮尺1/4

5 近世の遺跡

(1) 近世の遺跡

近世の遺構には、道路とその側溝、水田、溝、柱穴などがある(図版4, 図11)。

道路 調査区北半で東北東から西南西にのびる道路SF1を検出した(図12)。幅は約4mで、断面を観察すると、大きく上層と下層にわかれ、2枚の路面が存在したことがわかる。また、それぞれの路面にともなう側溝SD1・SD5・SD15も検出した。いずれの路面も、小礫を一面に敷きつめて一種の舗装をおこなっており轍は存在しない。また、調査区東半では、やや南側へ路面を拡張している。側溝SD1とSD5の出土遺物か

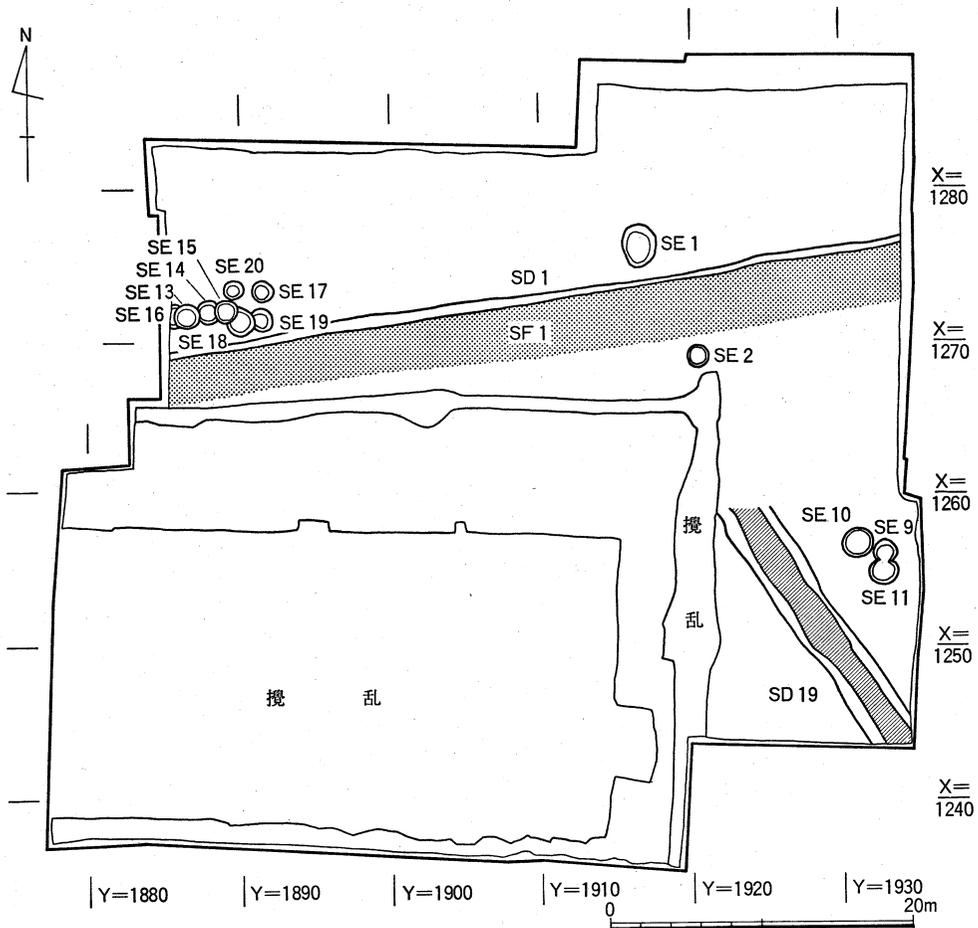


図11 近世の遺構 縮尺1/500

近世の遺跡

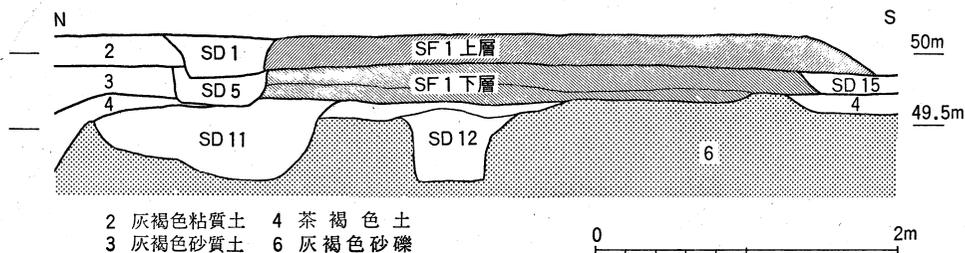


図12 道路SF1の断面 縮尺1/50

ら、近世後半のものと推定できる。

野壺 SE1, SE2, SE9~SE11, SE13~SE20があり、SE1・SE2・SE13~SE16は漆喰製の枠をもつ。いずれも近世末のものと考えられる。

溝 SD19は調査区東南部に存在し、幅約2m、深さ約0.2mの浅い溝である。等高線にそって北西から南東へ流れる。SD19の両肩には、低い堤が存在し、一帯の水田への灌漑をおこなう人工的な水路と考えられる。

調査区一帯に堆積する灰褐色粘質土と灰褐色砂質土は、近世の水田耕土や床土と考えられ、棚田の存在も指摘できる。また、幅0.2m程度の南北方向の浅い溝や、柵をなすと考えられる多数の柱穴も検出した。これらは、ともに耕作にともなうものであろう。

(2) 近世の景観復原

京都大学の吉田キャンパス内では、これまでに発掘調査によって多くの近世の道路遺構が発見されている。とりわけ、本部構内で検出した近世白川道の遺構には多くの轍が存在し、旧白川村を経て山中を越え近江へ通じる街道としての旧白川道の歴史的変遷が解明されており〔岡田・吉野80, 五十川81・83〕, 昭和61年度に調査した本部構内AX30区の調査では、中世にさかのぼる白川道の路面を検出した〔京大遺跡調査会86〕。今回の調査で検出した道路SF1は、轍が存在しない。また、近世の『京大繪圖』にも、確実にこれに該当するものは描かれてはおらず、道路SF1は、吉田山西麓の一小径といってよいものかもしれない。このSF1は、京都大学がこの地に設立される以前の字境界となっていた。また、中世においても、この位置に境界が存在し、伝統的な地割りが近世にまで影響を与えたことは、特筆に値する。このSF1の両脇には野壺が存在し、水田がひろがっていたことが推定され、当地には近世の後半において、のどかな農村の景観が存在したと考えてよい。吉田山を東にのぞむ、こうした農村の景観は、明治30年、当地に第三高等学校そして京都大学が設立されるまで存続したのである。

6 小 結

最後に、本調査区の遺構の変遷を整理し、古代・中世の歴史的環境を復原してみよう。

調査区内で最も古い歴史時代の遺構はSR1である。SR1は旧白川の一支流と考えられ、11世紀ごろに一带がしばしば河川の氾濫する不安定な土地であったと推定できる。

井戸や土器溜などの生活に関連する遺構は、12世紀後葉から14世紀前葉の間に営まれている。同様の時期の遺構は北側に隣接するAO18区〔泉・吉野79〕でも検出している。この期間は、藤原北家勸修寺流の人々が吉田に居をかまえ、やがて吉田定房が南朝に従い吉野に走るまでの二百余年の間にあたる。勸修寺家の財産譲状には、吉田南亭、吉田園領などがみれ〔中村直41〕、これら一連の遺構から、かれらの邸宅、園地や菩提寺の浄蓮華院を調査区一帯に想定できる。

14世紀前葉からは土取り穴と推定される不定形土坑が出現し、14世紀中葉には地山の高い調査区東半部一帯に広がっている。土取り穴は、15世紀にはほとんどなくなっていると考えてよい。土取り穴が増加する14世紀中葉ごろには、生活に関連する遺構や地境の溝がなくなり、この一帯の土地所有や権利関係に大きな変化が生じたようである。本調査区をはじめAP19区〔清水・吉野81〕、AN20区〔五十川86〕でも不定形土坑がみとめられるが、これは、14世紀前葉に吉田氏退転の中で権利関係の上で空白となった結果、黄灰色シルトの採取がはじまるのを示すものであろう。また、梵鐘鑄造遺構については、教養部構内AP22区で平安中期の梵鐘鑄造坑や溶解炉の残片が出土しており〔五十川・飛野84〕、古代・中世の鑄造工房を調査区一帯に想定できる。

梵鐘鑄造遺構については、教養部構内AP22区でこれを検出した際と同様、多くの方々から有益な御教示を得た。特に、坪井清足、葉賀七三男、木村捷三郎、石野亨、渡辺弘二、上田一男、友野良一、神崎勝、石尾政信の諸氏には、多くの御助言をいただいた。また、本学工学部の神野博先生には出土鑄型や炉壁に付着した金属物質を分析していただき、鑄造原料を確認することができた。末尾に記して謝意を表します。

第3章 京都大学北部構内B J31区の発掘調査

宮本一夫

1 調査の経過

本調査区は、京都大学北部構内北端、御蔭通りに隣接した地点に位置する(図版1-153)。京都大学北部構内一帯は、縄文前期～晩期の北白川追分町遺跡にあたっており、この遺跡の北限がどの地点にまで達するかが、従来問題とされてきた。本調査区に近接した理学部合同建物予定地の試掘調査では、縄文土器が出土しており、旧白川の分流による後背湿地を形成していたと推定されている〔泉78〕。したがって、本調査区もこれに連続した地形をなすと予想され、北白川追分町遺跡の北限である可能性も想像された。

ところが、昭和58年度の試掘調査の結果では、中世包含層のみが検出された。近接する田中神社付近には、中世において、田中の郷民が自衛のために^{かまき}構を設けたとされる。自衛村落である田中構は、文献では、『親長卿記』文明6年(1474)8月1日の条に初出している。その後、天文法華の乱(1536年)の際、法華衆徒によって燃き打ちされ、事実上崩壊したものと推定されている。すなわち、15世紀後半から16世紀前半にかけて存続していたものと考えられる。こうして、文献にみえる田中構と試掘調査で検出した中世包含層との関連が注目されることとなった。

このような状況のなかで、ここに農学部初期胚操作動物実験棟の新営が計画されたため、発掘調査を実施した。北白川追分町遺跡の広がり、田中構との関連を追求することを調査目的としたのである。

2 層位

本調査区の層位は、東から西に向かって緩傾斜を呈し、Y=2580付近を中心に、調査区の西半部と東半部で異なった様相を示している(図13)。西半部では、基本的層序は、表土(第1層)、灰褐色土(第2層)、茶褐色土(第4層)、黄褐色砂質土(第6層)、暗褐色粘質土(第7層)、東半部では表土下で茶褐色砂質土(第3層)、黄白色砂質土(第5層)、黄褐色砂質土、暗褐色粘質土の順である。近世の遺物包含層である灰褐色土は、東半部で茶褐色砂質土を切っている。大正11年の地籍図「京都帝國大學北方敷地」(京都大学経理部蔵)によると、調査区一帯が水田であったことから、本調査区には近世から近代にかけて棚田が形成

されていたことが想定される。しかし、西半部にくらべて高い東半部は、その後の土地利用の過程で削平されたため、近世の遺物包含層が検出されなかったものと考えられる。

中世の遺物包含層は、調査区中央部を南北に流れる流路SR1を境にして、東西で明確に層位が異なっている。西半部では、この流路に切られる形で、厚い中世の遺物包含層を形成する茶褐色土が検出された。出土する土師器の年代からみて、この堆積層の上半と下半との間には大きな年代差は認められず、15世紀～16世紀初頭のものである。茶褐色土下面に位置するSX1も、同時期のものである。また、東半部ではSR1との切り合い関係は不明なものの、表土下に茶褐色砂質土が広がっている。出土遺物は中世を主体とし、そのほかに古墳時代のものが相当量存在する。茶褐色砂質土は、出土する土師器から中世の遺物包含層とすることができるが、茶褐色土のものにくらべ、年代的に古い傾向を示している。

茶褐色砂質土下の黄白色砂質土の上面では、流路SR2や建物跡SB1が検出された。SR2の年代は下限が7世紀初頭である。茶褐色砂質土下に位置する黄白色砂質土は、遺物をほとんど含んでいない。黄褐色砂質土は、調査区全体に認められ、古墳時代から弥生時代までの遺物を少量含んでいる。

黄褐色砂質土より下は地山であるが、調査区南壁に添って遺跡の基盤となる堆積層の観察をおこなった。その結果、暗褐色粘質土、灰白色粘質土、高野川系砂礫の順に堆積層が確認された。このうち、高野川系砂礫は調査区西側に向かって山なりに高くなって堆積している。したがって、高野川系砂礫が自然堤防の役目をはたし、そこに暗褐色粘質土、灰白色粘質土が堆積したものと想定される。

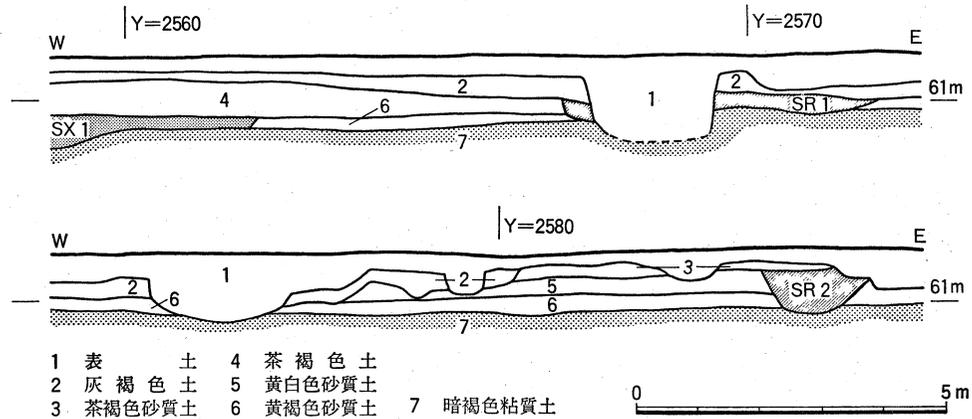


図13 調査区北壁の層位 縮尺1/120

3 遺 構

本調査で確認された遺構は、古代、中世、近世にわたっており、各時代の溝、流路、井戸、建物跡などが検出された。

(1) 古代の遺構 (図版8・9-1, 図14)

流路SR2, 建物SB1がある。SR2は、埋積土に、青灰色の水成層をもたず、黄褐色砂質土だけからなっている。北東から南西方向へむかってほぼ傾斜にそって流れており、安定した流路というよりは、一時的な流路、すなわち河川の氾濫などにともない、短期間に形成された流路と考えられる。埋土中に含まれる遺物は、古墳時代前半の布留式段階の土師器が主体を占めるが、6世紀末～7世紀初頭の須恵器杯身を含む点からみて、7世紀初頭以降の流路と考えられる。

また、このSR2に切られた黄白色砂質土上面には、SB1の柱穴が検出されている。柱間2間×2間の正方形の掘立柱建物跡であるが、その性格は不明である。SB1は、中世の茶褐色砂質土より下位に、そして古墳時代の黄褐色砂質土より上位に位置することから、その年代を古代にあたるものと考えておく。

(2) 中世の遺構 (図版9, 図15)

流路SR1, 井戸SE1, 溝があげられる。SR1は調査区中央部を南北に流れている。埋積土の状況からすれば、恒常的に流れていたものとすることはできず、空堀であった可能性もある。またSR1を境に、中世の遺物包含層がその東西で明瞭に異なる点は興味深い。とくに、この流路の形成時期には、これをはさんで調査区の東半部と西半部では土地利用の差があったと考えることができる。SR1に切られた茶褐色土は、調査区西半部に位置し、厚い中世の遺物包含層を形成している。しかし、SR1の埋土、茶褐色土ともに、出土遺物に大きな時期差が認められず、15世紀～16世紀初頭のものと考えられる。

図15に示した西半部の溝群は茶褐色土下面に、また東半部に示した溝群は茶褐色砂質土下面に位置し、両者ともに水田にともなう溝であると思われる。これらの溝群は、一部には溝の方向や間隔の揃うものも見られるが、溝にともなう出土遺物が少ない点や、上面に位置する茶褐色砂質土と茶褐色土との切り合い関係が不明な点から、それらが同時に存在したものかどうかは判断しかねる。また、茶褐色土と茶褐色砂質土の中世の遺物には多少時期差が認められる点も、その判断を難しくしている。ともかく、SR1下面においても、茶褐色土下面に連続する溝群が検出されるところから、SR1形成時には、これら溝群が

存在していた可能性は少ない。調査区西半部に堆積する茶褐色土は厚く、それ以前の地形は調査区中央付近で東に高く西に低い段差をもっていたものといえる。茶褐色土の堆積後SR1が設けられ、それが土地区画として重要な意味をもっていたことが指摘できよう。

また、調査区中央北端では、SE1が検出されている。SE1は上部が削平されており、横板井籠組が一段認められたが、水溜部である可能性もある。出土遺物は少なく、年代の特定はできない。したがって、SE1とSR1や水田にともなう溝群との関係は不明である。なお、調査区北西隅において、不定形土坑SX1を検出した。SR1や茶褐色土と同時期の遺物を若干含んでおり、中世後期のものと考えられる。

(3) 近世の遺構 (図版9-2, 図16)

近世の遺物包含層である灰褐色土は、調査区中央部で南西方向に見られる段差に対して、高さの低い調査区西半部にのみ存在している。この灰褐色土下面には、井桁状に走る溝が検出されている。Y=2580の付近で南西方向に認められる段差とともに、水田にともなう遺構群であると推定される。この段を境として高い東半部では、近世の遺物包含層を確認することはできなかった。その後の削平によって失われたものと考えられ、段差をはさんで棚田が形成されていたものと想定している。

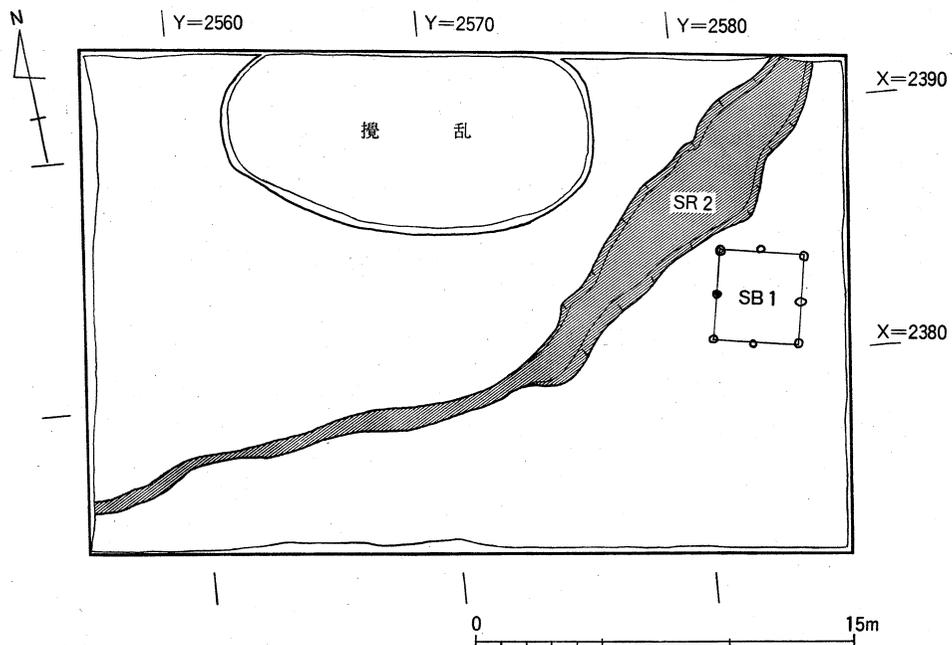


図14 古代の遺構 縮尺1/300

遺 構

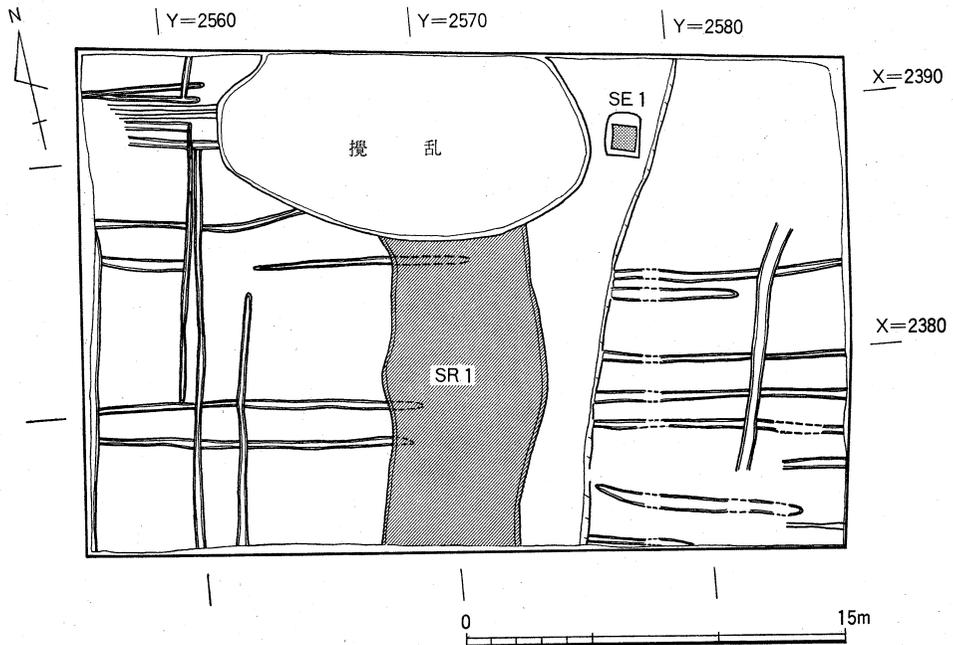


図15 中世の遺構 縮尺1/300

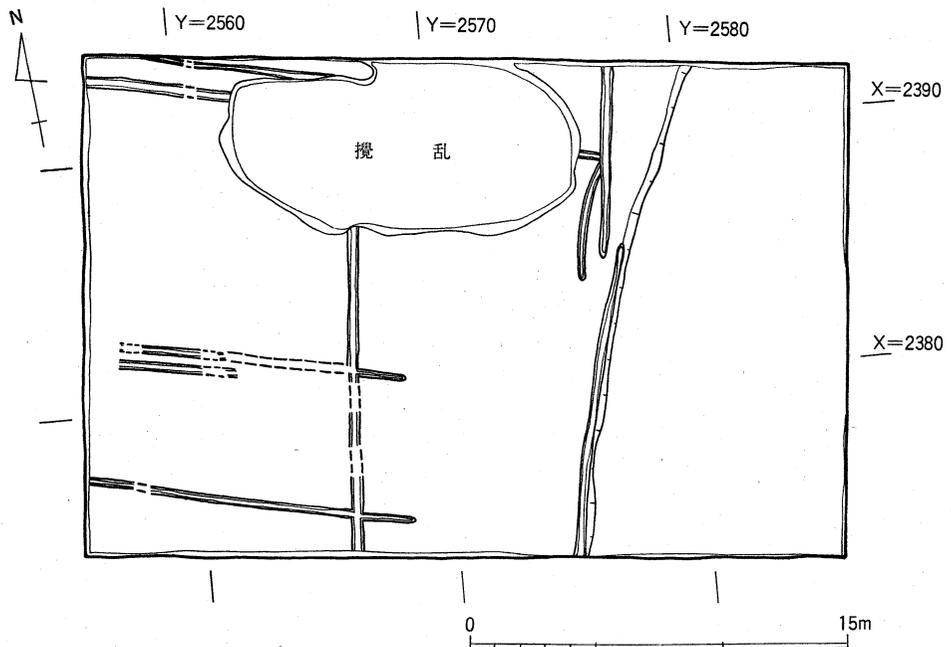


図16 近世の遺構 縮尺1/300

4 遺物

出土遺物は縄文時代から近世にわたっている。このうち、縄文時代から古代にかけてのものと、中世のものについて詳述したい(図版10・11, 図17・18)。

縄文～古代のものは、黄褐色砂質土, SR 2, 茶褐色砂質土などから出土している。

Ⅱ 5～Ⅱ 8は黄褐色砂質土出土遺物である。Ⅱ 8は篋描直線文を特徴とする畿内第Ⅰ様式の壺, Ⅱ 5・Ⅱ 6は櫛描直線文を特徴とする畿内第Ⅱ様式の壺, Ⅱ 7は弥生中期の近江系の壺である。黄褐色砂質土は, このような弥生時代の遺物を含むとともに, 古墳時代前半期の遺物を包含している。なお, Ⅱ 9は中世の遺物包含層の茶褐色土に混入していたものであるが, 畿内第Ⅴ様式の甕である。

Ⅱ 1～Ⅱ 4・Ⅱ 10～Ⅱ 27はSR 2出土遺物である。Ⅱ 1・Ⅱ 2は縄文前期末の大歳山式。Ⅱ 3・Ⅱ 4は畿内第Ⅱ様式の壺で, 櫛描直線文の下端を櫛状工具によって刺突するものである。Ⅱ 10～Ⅱ 14は受口状口縁をもつ近江系の古式土師器である。Ⅱ 13は口縁端部に面取りをもち, 「く」の字状口縁の屈曲部が鋭い。Ⅱ 10～Ⅱ 12・Ⅱ 14は口縁端部に面取りをもたず, 屈曲部はⅡ 13にくらべてあまい。胎土もⅡ 13にくらべてあらく, 色調は橙褐色を呈しており, 焼きもあまい。Ⅱ 15は口縁端部が内面に肥厚する布留式甕である。Ⅱ 10～Ⅱ 12・Ⅱ 14は琵琶湖湖西の北部にみられる布留式併行期のものに類似している〔中西85〕。Ⅱ 13は, 布留式併行期ないしそれに先行する近江系甕である。このように, Ⅱ 10～Ⅱ 14の近江系甕と布留式甕は, 布留式併行期の山城盆地東北部のセット関係を示す可能性がある。したがって, 従来想像された以上に, 近江系甕の流入は著しいものであった可能性がある。また, 近江系甕のうちでも, 琵琶湖湖西の北部との関係が緊密であったといえよう。

Ⅱ 19～Ⅱ 27は須恵器である。Ⅱ 24は3方に透しをもつ高杯, Ⅱ 25は壺, Ⅱ 26は杯蓋, Ⅱ 27は器台である。これらⅡ 24～Ⅱ 27は, 陶邑古窯址出土須恵器のTK23型式・TK47型式に相当するものであり, ほぼ5世紀末から6世紀初頭の年代が与えられている〔田辺66〕。またⅡ 19～Ⅱ 23の杯身は口径10cm前後であり, 隼上りⅠ・Ⅱ段階に相当しよう〔菱田86〕。すなわち6世紀末～7世紀第1四半期に属する。Ⅱ 16～Ⅱ 18は土師器甕である。Ⅱ 18は外面底部を削る近江系の甕である。これらⅡ 16～Ⅱ 18は, 出土須恵器にともなう段階の土師器甕と考えられる。すなわち, 5世紀末～7世紀初頭に属するものである。以上のように, SR 2は, 縄文土器や4～5世紀の遺物を含むものの, 埋積した時期は6世紀末～7世紀第1四半期以降とすることができよう。

遺 物

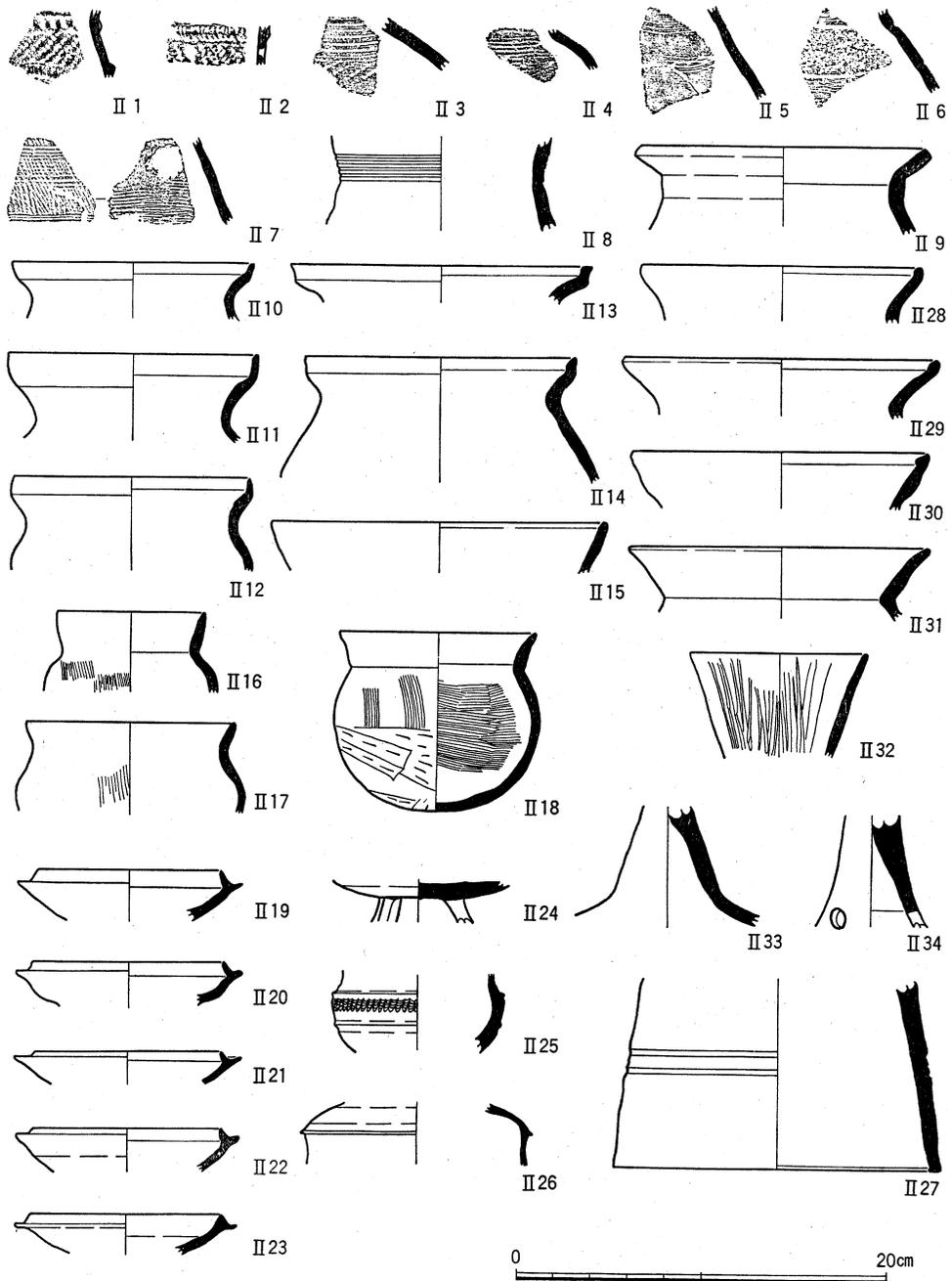


图17 SR 2 出土遺物 (II 1・II 2 繩文土器, II 3・II 4 弥生土器, II 10~II 18 土師器, II 19~II 27 須恵器), 黄褐色砂質土出土遺物 (II 5~II 8 弥生土器), 茶褐色土出土遺物 (II 9 弥生土器), 茶褐色砂質土出土遺物 (II 28~II 34 土師器)

Ⅱ28～Ⅱ34は茶褐色砂質土出土遺物である。Ⅱ28～Ⅱ30は口縁端部内面が肥厚する布留式甕である。Ⅱ31は、型式学的にはⅡ28～Ⅱ30の布留式甕に後出するものである。Ⅱ32は内外面に縦方向の篋磨きをもつ小型丸底壺。Ⅱ33・Ⅱ34は土師器高杯の脚部。ともにしぼった脚部を杯部底面にソケット状に挿入するものである。またⅡ34は円形の透しをもつ。これらの茶褐色砂質土の出土遺物は、布留式を中心とする時期のものが主体で、若干時期の降るものも含んでいる。後述するように、茶褐色砂質土は中世の遺物も含んでおり、これら古墳時代の遺物は、北白川扇状地に存在する古墳時代集落にともなうものであろう。

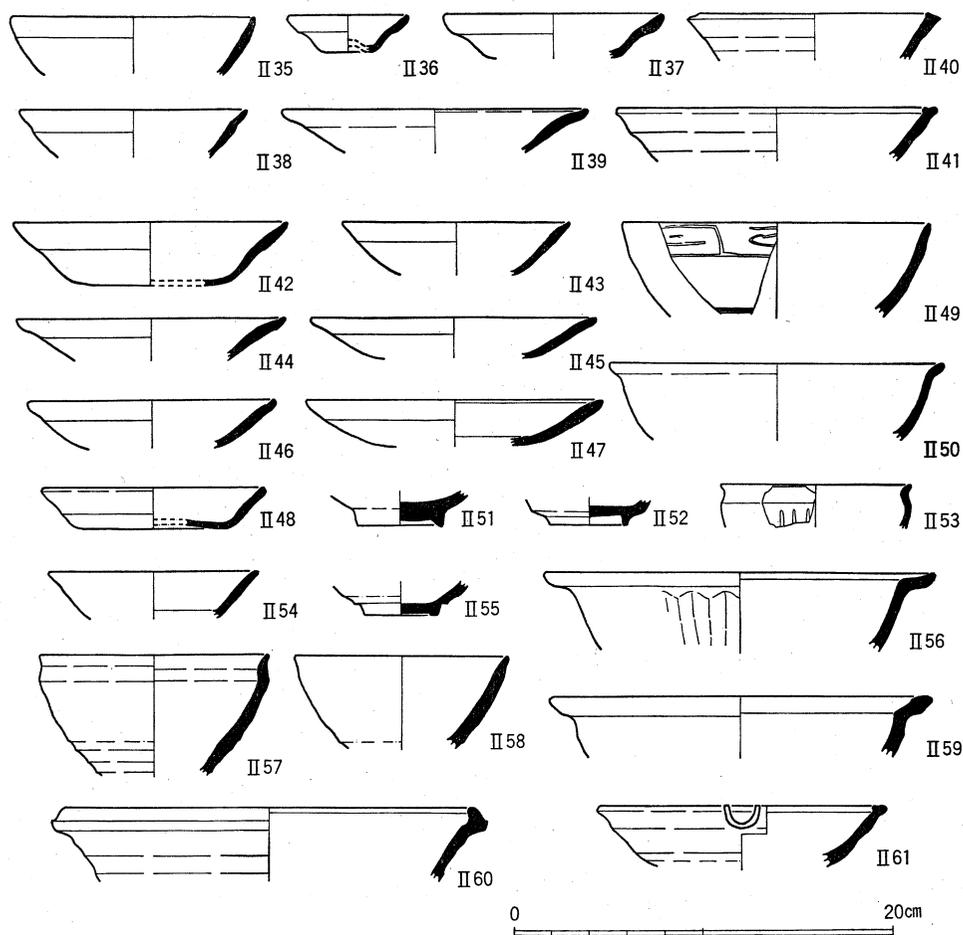


図18 S R 1 出土遺物 (Ⅱ35～Ⅱ39土師器, Ⅱ40・Ⅱ41灰釉系陶器), 茶褐色土出土遺物 (Ⅱ42～Ⅱ47土師器, Ⅱ49～Ⅱ54・Ⅱ56青磁, Ⅱ55青白磁, Ⅱ57・Ⅱ58天目碗, Ⅱ59・Ⅱ61灰釉系陶器, Ⅱ60須恵器), 茶褐色砂質土出土遺物 (Ⅱ48土師器)

小 結

中世の遺物は、SR1、茶褐色土、茶褐色砂質土から出土している。

SR1出土物には、土師器碗(Ⅱ35・Ⅱ36)、土師器皿(Ⅱ37～Ⅱ39)、灰釉系陶器(Ⅱ40・Ⅱ41)などがある。Ⅱ35は灰白色の碗、Ⅱ36は灰白色の凹み底小碗。Ⅱ37は口縁下端部が肥厚するE₄類土師器皿、Ⅱ38・Ⅱ39は口縁が直線的で撫での部分が外反するF₂類土師器皿。Ⅱ40・Ⅱ41は灰釉系陶器おろし皿である。これらはⅡ35を除けば、中世京都Ⅲ期に属するものである。すなわち15世紀代のものである。

Ⅱ42～Ⅱ47・Ⅱ49～Ⅱ62は、茶褐色土出土遺物である。Ⅱ42～Ⅱ46はF₂類土師器皿、Ⅱ47は口縁が直線的に開き、底部見込みにかすかな圏線をもつF₃類の土師器皿である。Ⅱ49は龍泉窯系篋描雷文帯青磁碗、Ⅱ50は青磁碗、Ⅱ53は線描蓮弁文青磁小鉢、Ⅱ51・Ⅱ52は青白磁碗底部、Ⅱ54・Ⅱ62は青磁皿、Ⅱ56は蓮弁文青磁洗、Ⅱ55は青白磁碗、Ⅱ57・Ⅱ58は美濃・瀬戸の天目碗、Ⅱ59は灰釉系陶器鉢、Ⅱ61は灰釉系陶器おろし皿。Ⅱ60は須恵器すり鉢である。主体を占めるF₂類土師器皿は、中世京都Ⅲ期に属し、型式学的にF₂類より新しいF₃類土師器皿は中世京都Ⅳ期古段階に属する。したがって、茶褐色土は、SR1同様、中世京都Ⅲ期を中心として、中世京都Ⅳ期古段階まで存続するものと考えられる。すなわち15世紀～16世紀前葉のものである。龍泉窯系青磁碗・小鉢や美濃・瀬戸の天目碗もその時期に属するものであろう。

茶褐色砂質土出土のⅡ48は、E₁類土師器皿で、14世紀前葉ごろのものである。茶褐色砂質土は中世の遺物が少なく、年代の特定が難しいが、15世紀～16世紀前葉の茶褐色土やSR1より古い段階の可能性が認められる。

5 小 結

本調査区は北白川扇状地末端の微傾斜地に位置している。調査開始前には、縄文集落が営まれた北白川扇状地末端の状況や旧白川系流路について、なんらかの手掛りが得られるのではないかと期待されていた。ところが、調査の結果、これまで京都大学構内では類例の少ない、古墳時代前半期や6世紀末～7世紀初頭、あるいは中世後半の15世紀～16世紀初頭の資料がまとまって出土した。これにより、北白川扇状地末端の土地利用の変遷を考える上で、新たな解釈が必要となった。

SR2には、縄文前期末の大歳山式など若干の縄文土器を含むが、これは扇状地上部からの流れ込みであり、縄文時代の北白川追分町遺跡の中心部は本調査区までには達していないことが判明した。また、現在の御蔭通りを旧白川系流路の一部とする考え方もあるが

〔藤岡78〕、これにともなう地形ないし旧河道は、本調査区では検出されていない。なお、黄褐色砂質土下で部分的に深掘りをして調査した結果、高野川系砂礫が検出されている。高野川系砂礫の埋積時期は不明であるが、高野川が西に向けて流路を変更して行く過程でできた自然堤防が、後背湿地を作り上げたものと考えられる。後背湿地形成後に堆積した黄褐色砂質土は、弥生～古墳時代の遺物を含むところから、従来考えられてきた旧白川系の黄色砂ではなく、古墳時代に新たに扇状地上部から再堆積したものと考えられる。こうして、黄褐色砂質土の堆積後、安定した段階にSR2、SB1が形成されたものと推測できる。

6世紀末～7世紀初頭以降に埋積したと考えられるSR2は、布留式段階、5世紀末～6世紀初頭、6世紀末～7世紀初頭の3段階の遺物を含んでいる。主体を占めている布留式期の遺物は、京都大学構内では初出例であり、東山一帯では岡崎遺跡〔京都市編83〕で同時期の資料が出土しているのみである。岡崎南御所採集遺物〔飛野83〕と同様、本調査区では、布留式併行期の近江系甕が認められ、比叡山を境として琵琶湖湖岸との関係が、緊密であったことがわかる。また、この時期、琵琶湖湖西の南部には、畿内型甕の出土比率の高い地域があり、畿内中心部との緊密な関係をもつ集団の存在が想定されている〔中西85〕。本調査区では、定量的なあり方ではないが、比較的近江系甕が多く見られる。今後、山城北部における畿内型甕と近江系甕の比率には、注意を向ける必要がある。同時に、これらは流れ込みであり、本調査区北東の扇状地には、古墳時代前半期の集落が形成されていたことが予想される。またSR2に包含された5世紀末～6世紀初頭の須恵器は、教養部構内AP22区検出の古墳群〔五十川・飛野84〕に対応する時期のものである。さらにSR2から出土した6世紀末～7世紀初頭の遺物は、北白川小学校内遺跡〔京都市編83〕のものに対応している。ここでは7世紀前半の建物跡が検出されている。またこの集落跡は、北白川扇状地一帯に大規模に存在した可能性が指摘されており、掘立柱建物の配置にも計画性がうかがえるとされる。SB1もこのような掘立柱建物群の延長に属するものであるかもしれない。すくなくともこれらの遺物は、扇状地上部に存在した遺跡群にともなう遺物と関係するものであることは間違いないであろう。

一方、中世の遺物は中心が15世紀～16世紀初頭に限られる。この年代は、土豪を中心とした中世後期の自衛村落である田中構に対応するものである。田中構は文献史料においても15～16世紀代にかけて3回の焼き打ちを受けた事実が知られる程度で、正確な範囲やその実態も不明なままである。その範囲を田中野上町・里ノ前町に比定する考え方〔山下86〕

小 結

もあり、本調査区とはかなり離れている。しかし、この時期の厚い遺物包含層である茶褐色土は、調査区中央部を南北に流れるSR1により画され、調査区西半部のみが存在している事実は興味深い。SR1は幅6mにおよび、厚く堆積する茶褐色土を画するための濠であるとするならば、SR1は田中構一帯の中世村落の地境を設定したものと解釈できる。田中構そのものは、かなり地域的に限定されようが、それに附属する水田などは、田中構の周辺に広がっていたものと想像される。その意味で、SR1は広義の田中構一帯の中世村落の範囲を限定するものであるかもしれない。ともあれ、本調査で認められた土地利用形態は、中世後期の自衛村落に対する一資料を呈示したことになると考えられる。

以上、本調査区の成果により、北白川扇状地末端の形成過程が明らかになった。また、本調査区東方の北白川扇状地では古墳時代から古代初頭の集落、西方では田中構にともなう中世遺構の存在が予想されることとなった。今後、周辺の調査により、これらの実態がより明確になるであろう。

参 考 文 献

- 石田志朗・中村徹也 1972年 『京都大学理学部構内遺跡発掘調査の概要』
- 泉 拓良 1977年 「京都大学植物園遺跡」『佛教藝術』115号
1978年 「京都大学北部構内の地形復原——縄文時代から弥生時代——」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』
1983年 「京都大学教養部構内A O21区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和56年度』
- 泉 拓良・吉野治雄 1979年 「京都大学医学部構内A O18区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和53年度』
- 泉 拓良・三宅由美 1986年 「京都大学北部構内B E33区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和58年度』
- 泉 拓良・家根祥多・森本 晋・玉田芳英 1985年 「遺物」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ——北白川追分町縄文遺跡の調査——』
- 五十川伸矢 1981年 「京都大学本部構内A T27区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和55年度』
1983年 「京都大学本部構内A X28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和56年度』
1986年 「京都大学医学部構内A N20区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和58年度』
- 五十川伸矢・飛野博文 1984年 「京都大学教養部構内A P22区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和57年度』
- 宇野隆夫 1981年 「遺物の考察」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ——白川北殿北辺の調査——』
1984年 「後半期の須恵器」『史林』第67巻第6号
- 梅原末治 1923年 「京都帝國大學農學部敷地ノ石器時代遺跡」『京都府史蹟勝地調査會報告』第5冊
1935年 「京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第16冊
1936年 『摂津阿武山古墓調査報告』（『大阪府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第7輯）
- 岡田保良 1981年 「層位と遺構」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ——白川北殿北辺の調査——』
- 岡田保良・吉野治雄 1979年 「京大理学部遺跡B E29区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和53年度』
1980年 「京都大学本部構内A W28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和54年度』
- 大阪府教育委員会 1986年 『真福寺遺跡』
- 小野山節・都出比呂志 1973年 『高槻市安満遺跡の条里遺構』
- 京大遺跡調査会(京都大学構内遺跡調査会)
1986年 『京都大学本部構内の遺跡——A X30区発掘調査現地説明会資料——』
- 京大調査会(京都大学農学部構内遺跡調査会・京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所構内遺跡調査会)
1977年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和51年度』
- 京大埋文研(京都大学埋蔵文化財研究センター)
1978年a 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』
1978年b 『京都大学埋蔵文化財調査報告 第1冊——京大農学部遺跡B G36区——』
1979年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和53年度』
1980年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和54年度』

参 考 文 献

- 1981年a 『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ——白川北殿北辺の調査——』
 1981年b 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和55年度』
 1983年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和56年度』
 1984年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和57年度』
 1985年 『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ——北白川追分町縄文遺跡の調査——』
 1986年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和58年度』
 1987年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和59年度』
- 京都市編 1983年 『史料 京都の歴史』第2巻 考古
 坂下町教育委員会 1975年 『金屋・星の宮遺跡』
 島田貞彦 1924年 「京都市北白川追分町発見の石器時代遺跡」『考古学雑誌』第14巻第5号
 島田貞彦・水野清一・小川五郎・三宅宗悦 1929年 「摂津国高槻「摂津農場」石器時代遺跡調査報告」
 『人類学雑誌』第44巻第7号
 清水芳裕・吉野治雄 1981年 「京都大学医学部構内A P 19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和55年度』
 菅原正明 1983年 「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』（『奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集』）
 田辺昭三 1966年 『陶邑古窯址群』Ⅰ（『平安学園考古学クラブ研究論集』第10冊）
 飛野博文 1983年 「山城の弥生後期の土器——京都市左京区岡崎南御所採集の土器について——」
 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和56年度』
 友野良一 1979年 「寺平遺跡の梵鐘製造跡」『月刊文化財』194号
 中西常雄 1985年 「近江における甕形土器の動向——庄内期を中心として——」『考古学研究』第32巻第1号
 中村徹也 1973年 『京都大学農学部総合館周辺埋蔵文化財発掘調査の概要』
 1974年a 『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅰ』
 1974年b 『京都大学理学部ノートバイオトロン実験装置室新営工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要』
 1975年 『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅱ』
 中村直勝 1941年 「勤修寺家領に就いて」『紀元二千六百年記念史學論文集』
 奈文研(奈良国立文化財研究所) 1980年 「山田寺第3次(講堂・北面回廊)の調査」『飛鳥藤原宮発掘調査概報10』
 橋本久和 1980年 「中世土器研究予察」『上牧遺跡発掘調査報告書』（『高槻市文化財調査報告書』第13冊）
 浜崎一志 1983年 「京都大学北部構内B D 30区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和56年度』
 1984年 「京都大学病院西構内A F 15区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和57年度』
 菱田哲郎 1986年 「畿内の初期瓦生産と工人の動向」『史林』第69巻第3号
 藤岡謙二郎 1973年 「北白川扇状地と教養部構内発見の遺物包含層並びにその先史地理学的意義」
 『人文』第19集
 1978年 「北白川扇状地と京都大学構内遺跡」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』
- 丸岡町教育委員会 1981年 『豊原寺遺跡』Ⅱ
 山本信夫・狭川真一 1984年 「銚ノ浦遺跡梵鐘製造遺構発掘調査速報」『古代研究』27
 横山浩一・佐原 眞 1960年 『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第1部 日本先史時代

京都大学構内遺跡調査要項

京都大学埋蔵文化財研究センター要項

- 第1条 京都大学に埋蔵文化財研究センター(以下「センター」という。)を置く。
- 第2条 センターは、京都大学敷地内の埋蔵文化財についての調査研究及びその保存のため必要な業務を行う。
- 第3条 センターにセンター長を置く。
- 2 センター長は、京都大学の専任の教授をもって充てる。
- 3 センター長の任期は、2年とし、再任を妨げない。
- 4 センター長は、センターの所務を掌理する。
- 第4条 センターに、必要に応じて、助教授、助手その他の職員を置く。
- 第5条 センターに、調査研究及び保存に関する業務を処理するため、研究部を置く。
- 2 研究部に主任を置き、前条の教官をもって充てる。
- 3 主任は、研究部の業務をつかさどる。
- 第6条 センターにセンターの事業に関する基本的計画、人事その他管理運営に関する重要事項を審議するため、運営協議会を置く。
- 2 運営協議会は、次の各号に掲げる委員で組織する。
- (1) センター長
- (2) センターの研究部の主任
- (3) 前2号以外の学識経験者のうちから総長の委嘱した者 若干名
- (4) 事務局長及び施設部長
- 3 センター長は、運営協議会を招集し、議長となる。
- 4 前各項に規定するもののほか、運営協議会の運営に関し必要な事項は、運営協議会が定める。
- 第7条 この要項に定めるもののほか、センターの組織及び運営に関し必要な事項はセンター長が定める。

センター長	西川 幸治(工学部教授)	運営協議会委員	足利 健亮(教養部助教授)
運営協議会委員	小野山 節(文学部教授)	〃	久保庭信一(事務局長)
〃	川又 良也(法学部教授)	〃	石黒 弘(施設部長)
〃	池田 次郎(理学部教授)	研究部主任	清水 芳裕(文学部助手)
〃	久馬 一剛(農学部教授)	研究部研究員	五十川伸矢(文学部助手)
〃	上田 正昭(教養部教授)	〃	浜崎 一志(工学部助手)
〃	島地 謙(木材研究所教授)	〃	宮本 一夫(文学部助手)
〃	東村 武信(原子炉実験所教授)	〃	菱田 哲郎(文学部助手)
〃	應地 利明(文学部助教授)	〃	三宅 由美(施設部教務補佐員)
〃	鎌田 元一(文学部助教授)	事務室	和田 俊司(施設部事務官)
〃	山中 一郎(文学部助教授)	〃	中村 美代(施設部事務補佐員)
〃	石田 志朗(理学部助教授)	〃	菅原 令子(施設部事務補佐員)

京都大学構内遺跡調査要項

京都大学構内遺跡調査会規約

- 第1条 この会は、京都大学構内遺跡調査会(以下「調査会」という。)と称し、京都大学の委託により同大学構内における建築物新営工事等に伴い必要な敷地内の遺跡調査を行うことを目的とする。
- 第2条 調査会は、事務所を京都市左京区北白川西町財団法人阪本奨学会内に置く。
- 第3条 調査会は、第1条の目的を達成するために次の事業を行う。
- (1) 京都大学の委託により行う当該敷地内の埋蔵文化財についての発掘調査
 - (2) 前号の調査により出土した埋蔵文化財の保存、管理に関する事項の審議
 - (3) 埋蔵文化財の調査に関する発掘調査概要報告書の作成
 - (4) その他必要とする事項
- 第4条 調査会に次の役員を置く。
- (1) 会長 1名
 - (2) 委員
- イ 京都大学の学識経験者 若干名
- ロ 新営工事等の敷地の属する京都大学の部局の長または部局附属施設の長
- ハ 新営工事等の敷地の所在する地域の文化財保護行政当局の推薦する者 若干名
- (3) 監事 若干名
- 2 会長は、前項2号イの委員の推薦する者とする。
 - 3 会長の任期は2年とし、再任を妨げない。
 - 4 委員及び監事は、会長が委嘱する。
 - 5 第1項第2号ロ及びハの委員は、当該敷地内の遺跡調査に関する委員としての任務が終わったときは、退任する。
- 第5条 会長は、調査会を代表し、業務を総括する。
- 2 委員は、委員会を構成し、委員会の議決に基づく業務を執行する。
 - 3 監事は、調査会の会計を監査する。
- 第6条 委員会は、会長及び委員をもって組織する。
- 2 委員会は、会長が招集し、議長となる。
 - 3 委員会は、新営工事等の敷地が京都市以外の地域にある場合で、必要と認めるときは、部会を置くことができる。
- 第7条 第3条の発掘調査の実施に当たるため、調査会に調査班を置く。
- 2 調査班は、調査班長、調査員及び調査補助員をもって組織する。
 - 3 調査班長は、委員会の議に基づき会長が委嘱する。
 - 4 調査員及び調査補助員は、調査班長の推薦により会長が委嘱する。
- 第8条 調査会の事務を処理するため、調査会に事務局を置く。
- 2 事務局に職員若干名を置く。
 - 3 職員は、会長が任免する。
- 第9条 調査会の経費は、京都大学から支出される調査委託費をもって充てる。
- 第10条 調査会は、4月1日に始まる年度ごとに、事業報告書及び収支決算書を作成し、監事の監査を経て、年度終了後3ヶ月以内に委員会の承認を受けるものとする。
- 第11条 この規約に定めるもののほか、調査会の運営に関し必要な事項は、会長が定める。

京都大学構内遺跡調査要項

調査委員会

会長 池田 次郎(理学部教授)
 委員 川上 貢(工学部教授) 石田 志朗(理学部助教授)
 亀井 節夫(理学部教授) 西村 進(理学部助教授)
 西川 幸治(工学部教授) 足利 健亮(教養部助教授)
 小野山 節(文学部教授) 清水 芳裕(文学部助手)
 大山 喬平(文学部教授) 建本 信雄(事務局庶務部長)

規約第4条1項(2)ロ

伊藤 洋平(医学部長) 半田 肇(医学部附属病院長)
 川島 良治(農学部長)

規約第4条1項(2)ハ

浪貝 毅(京都市埋蔵文化財調査センター所長)
 泉 拓良(奈良大学助教授)
 監事 金 光男(施設部企画課長) 西村 幸雄(農学部事務長)
 馬場 傳次(医学部事務長) 有原 満雄(医学部附属病院管理課長)

事務局

事務局員 和田 俊司(施設部事務官) 松本 一代(調査会事務員)

調査班

調査班長・主任 清水 芳裕, 五十川伸矢, 浜崎 一志, 宮本 一夫, 菱田 哲郎, 三宅 由美
 調査員 岩松 準, 徐 朝龍, 竹村 恵二, 田島 公, 玉田 芳英, 寺島 千春,
 三浦 英樹, 宮川 禎一, 森本 晋
 調査補助員 出原 哲生, 上野 京子, 内田 良子, 加茂 友基, 川島はる代, 川杉 知恵,
 河野 一隆, 喜始 通, 岸本 直文, 岸本 伸子, 近藤 寿夫, 佐立 治人,
 鈴木 克彦, 頭師 リエ, 高橋 克壽, 高橋 照彦, 谷口由利子, 中村 直弘,
 西川恵美子, 畠山佳代子, 早瀬 美子, 樋口 恵子, 廣川 守, 福勢千鶴子,
 前田美也子, 森下 章司, 山崎加奈恵
 作業員 五十棲彰雄, 上田 助清, 右川 清, 浮田 博文, 大野 雄一, 加藤 釧治,
 川上ヨシエ, 木村 謙次, 河野 佳子, 古前 健次, 齊藤 利男, 鈴木 功,
 田中 昭男, 田中 義博, 谷口藤之亮, 西川 一雄, 丹羽 金枝, 橋本 庄次,
 橋本 俊夫, 長谷川智造, 林 眞光, 平木宇三郎, 福田 文治, 前田 正明,
 射場 実信, 三谷 正三, 安田 秀男, 矢田 一夫, 山田 勇, 吉村 利男

京都大学構内遺跡調査要項

医学部構内 A N 18区整理調査班

所在地 京都市左京区吉田近衛町

工事名 医学部基礎校舎新営

調査期間 昭和60年4月1日～同9月30日

面積 1920.4m²

班長・主任 五十川伸矢, 宮本一夫

調査員 2名

調査補助員 7名

病院構内 A J 18区発掘調査班

所在地 京都市左京区吉田橋町

工事名 医学部附属病院内科系病棟新営

調査期間 昭和60年7月27日～
昭和61年3月31日

面積 4294.5m²

班長・主任 清水芳裕, 浜崎一志, 菱田哲郎

調査員 2名

調査補助員 12名

作業員 21名

北部構内 B J 31区発掘・整理調査班

所在地 京都市左京区北白川追分町

工事名 農学部初期胚操作動物実験室新営

調査期間 昭和60年5月24日～同11月30日

面積 624m²

班長・主任 清水芳裕, 宮本一夫

調査員 3名

調査補助員 3名

作業員 12名

病院構内 A J 19区発掘調査班

所在地 京都市左京区吉田橋町

工事名 医学部内科系臨床研究棟新営

調査期間 昭和60年9月27日～
昭和61年3月31日

面積 3000m²

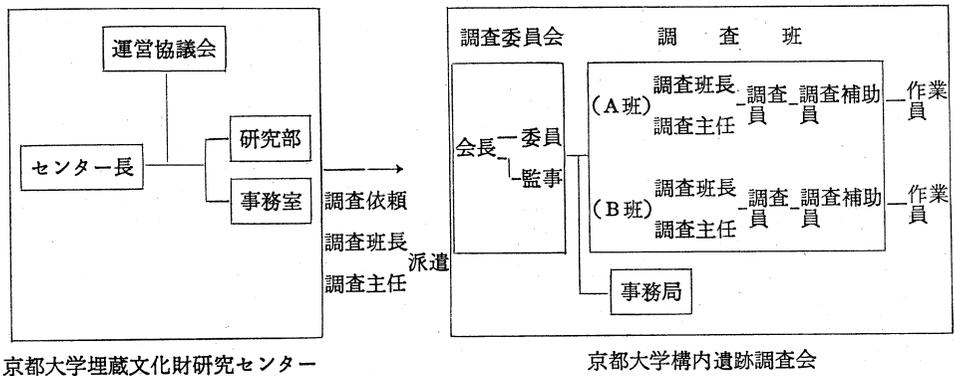
班長・主任 五十川伸矢, 宮本一夫

調査員 4名

調査補助員 11名

作業員 16名

京都大学構内遺跡の調査体制



京都大学構内遺跡調査要項

表2 京都大学構内遺跡のおもな調査

(地点は図版1を参照, 文献中「埋」は京大埋文研, 「調」は京大調査会をさす。)

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
大正12年	農学部	1・2	濱田耕作	表採・試掘			縄文土器, 石器	梅原23, 島田24	
13年	農学部	不明	藤本理三郎				石棒	横山・佐原60	
昭和4年	大阪府満		島田貞彦, 水野清一ほか	発掘			弥生土器	島田・水野ほか29	
9年	大阪府阿武山古墳		梅原末治	発掘			乾漆棺, 玉飾枕	梅原36	
10年	北白川小倉町		梅原末治				縄文土器, 石器	梅原35	
31年	農学部	3	羽館易	採集			縄文土器		
46年	農学部	4	石田志朗	採集			弥生土器	埋79	
47年	農学部	5		採集			石棒		
	大阪府満		小野山節都出比呂志	事前発掘	1500	条里の溝	弥生土器, 石器	小野山・都出73	建物をずらし条里の溝を保存
	追分地藏	6	石田志朗, 中村徹也	事前発掘	600		弥生土器, 石器	石田・中村72	
	教養部	7	藤岡謙二郎	工事中採集・実測			縄文土器	藤岡73	
48年	農学部	8	中村徹也	事前発掘	13	瓦溜	縄文土器, 瓦(平安)	埋78b	瓦溜埋戻し
	農学部	9	中村徹也	事前発掘	600		縄文土器, 土師器	中村73	
	農学部	10	中村徹也	事前発掘	40		縄文土器		
	植物園	11	中村徹也	事前発掘	400	縄文後期甕棺・配石遺構	縄文土器	中村74b, 泉77	甕棺・配石遺構の移築を決定
49年	農学部	12	中村徹也	事前発掘	800		縄文土器	中村74a	
	農学部	13	中村徹也	事前発掘	800		縄文土器	中村75	
50年	教養部	14	小野山節都, 中村徹也	事前発掘	750		土師器, 瓦, 陶磁器	小野山・中村76	
51年	農学部 B E 33区	16	泉拓良	事前発掘	900	縄文晩期土壙墓	縄文土器, 土師器, 瓦	調77	
	病院 A E 15区	19	岡田保良	事前発掘	2200	古代・中世池, 溝, 土器溜	土師器, 瓦, 陶磁器	調77, 埋81a	
	植物園 B D 35区	29	吉野治雄	保存				調77	甕棺・配石の移築復原

京都大学構内遺跡調査要項

年 度	遺 跡 名 称	地 点	担 当 者	調 査 の 種 類	面 積 (㎡)	遺 構	遺 物	文 献	備 考
昭和51年	病 院 A H17区	34	泉 拓良	事前発掘	200	近世溝、 井戸、集 石	土師器、瓦	埋78 a	
	和歌山県 瀬 戸		丹羽 佑一	事前発掘	300	縄文時代 土墳墓	縄文土器、 人骨	埋78 a	
52年	病 院 A F14区	39	岡田 保良 宇野 隆夫	事前発掘	800	古代護岸、 中世溝、 井戸	土師器、瓦、 陶磁器	埋78 a、 埋81 a	
	医 学 部 A O18区	41	泉 拓良 吉野 治雄	事前発掘	1200	中世溝、 土器溜、 井戸	土師器、瓦、 陶磁器	埋79	
53年	理 学 部 B E29区	54	岡田 保良 宇野 治雄 吉野	事前発掘	500	弥生中期 方形周溝 墓、中世 火葬塚	弥生土器、 土師器、瓦	埋79	火葬塚と方 形周溝墓を 現地保存
	農 学 部 B G32区	55	泉 拓良 宇野 隆夫	事前発掘	100	古代土坑、 溝	縄文土器、 土師器	埋79	
	北 部 B G31区	56	泉 拓良 宇野 隆夫	事前発掘	650	縄文晩期 埋没林	縄文土器	埋80 埋85	
	本 部 A W28区	57	岡田 保良 吉野 治雄	事前発掘	500	近世白川 道	陶磁器、土 師器、銭貨	埋80	
54年	医 学 部 A P19区	74	清水 芳裕 五十川 治雄 吉野	事前発掘	2776	中世井戸、 溝、土器 溜	土師器、瓦、 陶磁器、旧 石器	埋81 b	
	本 部 A T27区	75	五十川伸矢	事前発掘	400	奈良後期 竪穴住居、 中世土墳 墓、近世 道路	土師器、須 恵器、白磁	埋81 b	竪穴住居跡 を現地保存
55年	本 部 A T27区	89	泉 拓良	事前発掘	115	近世道路、 堀	土師器、近 世陶磁器	埋81 b	
	本 部 A X28区	90	泉 拓良 五十川伸矢 浜崎 一志	事前発掘	1120	近世白川 道、中世 土器溜、 井戸、建 物	土師器、瓦、 陶磁器、銅 鏃(弥生)、 磨製石鏃	埋83	
	京 都 府 月		泉 拓良 清水 芳裕 五十川伸矢 浜崎 治雄 吉野	事前発掘	1468	弥生中・ 後期水路、 土坑、中 世土器溜	弥生土器、 打製石斧、 瓦器、陶磁 器	埋83	立合調査中 に遺跡発 見、工事を 中断し発掘 調査
	教 養 部 A O21区	91	吉野 治雄	事前発掘	112	中世井戸、 土墳墓	土師器、瓦 器、陶磁器	埋83	
	本 実 験 排 水	98	清水 芳裕	立 合		流路、中 世土器溜	土師器、丸 瓦	埋83	遺構実測

京都大学構内遺跡調査要項

年 度	遺 跡 名 称	地 点	担 当 者	調 査 の 種 類	面 積 (㎡)	遺 構	遺 物	文 献	備 考
昭和56年	理 学 部 B D 30区	109	泉 拓良 浜崎 一志	事前発掘	272	古代建物, 近世瓦溜	土師器, 瓦, 陶磁器	埋83	
	和歌山県 瀬 戸		泉 拓良 清水 芳裕 五十川 伸矢 浜崎 一志	事前発掘	1500	弥生土坑, 弥生配石, 古墳時代 土坑	縄文土器, 硬玉管玉, 弥生土器, 製塩土器	埋84	
	本 部 A X 28区	110	浜崎 一志	事前発掘	34	中世土器 溜	土師器, 瓦, 陶磁器, 硯	埋83	
	教 養 部 A P 22区	111	五十川 伸矢 飛野 博文	事前発掘	1716	古墳, 古 代梵鐘鑄 造遺構, 中世門, 溝, 墓	縄文土器, 弥生土器, 須恵器, 土 師器, 鋳型, 溶解炉	埋84	梵鐘鑄造遺 構を現地保 存
	京 都 市 本 山			分布調査			縄文土器, 緑釉陶器, 灰釉陶器	埋83	
57年	京 都 府 中 海 道		泉 拓良	試 掘	20	中世土器 溜	縄文土器, 土師器	埋84	
	病 院 A F 15区	122	清水 芳裕 浜崎 一志	事前発掘	1028	中世井戸, 溝, 土坑	土師器, 瓦 器, 白磁	埋84	
	農 学 部 B F 33区	123	清水 芳裕 浜崎 一志	事前発掘	787	縄文住居 跡, 中世 土坑	縄文土器, 土師器	埋84	縄文住居跡 を現地保存
	和歌山県 瀬 戸		泉 拓良	事前発掘	297	古代製塩 炉	縄文土器, 弥生土器, 製塩土器	埋84	古代製塩炉 を移築保存
	本 部 A T 29区	124	泉 拓良 飛野 博文	事前発掘	890	中世濠, 建物	土師器, 瓦 器, 陶磁器	埋86	
	農 学 部 B E 33区	125	泉 拓良 飛野 博文	事前発掘	803	中世・近世 水田, 溝	土師器, 瓦, 陶磁器	埋86	
58年	医 学 部 A N 20区	134	泉 拓良 五十川 伸矢	事前発掘	863	中世井戸, 土取り穴	須恵器, 瓦 器, 土師器	埋86	
	北 部 B F 31区	135	清水 芳裕 五十川 伸矢	事前発掘	737	縄文埋没 林, 古代 ・中世溝	縄文土器, 土師器, 緑 釉陶器	埋87	
59年	病 院 A F 19区	141	浜崎 一志 宮本 一夫	事前発掘	863	近世池, 井戸, 野壺	縄文土器, 蓮月焼	埋87	
	病 院 A J 19区	142	清水 芳裕 浜崎 一志	事前発掘	260	中世土坑, 近世土取 り穴	土師器, 近世陶磁器	埋87	
	医 学 部 A N 18区	143	五十川 伸矢 宮本 一夫	事前発掘	1920	中世井戸, 土取り穴, 中世梵鐘 鑄造遺構	土師器, 瓦器, 鋳型	第 2 章	

京都大学構内遺跡調査要項

年 度	遺 跡 名 称	地 点	担 当 者	調 査 の 種 類	面 積 (m ²)	遺 構	遺 物	文 献	備 考
昭和60年	北 部 B J 31区	153	清水 芳裕 宮本 一夫	事前発掘	624	古代溝, 建 物跡, 土 坑, 近世溝	弥生土器, 土師器, 須 恵器	第3章	
	病 院 A J 18区	154	清水 芳裕 浜崎 一志 菱田 哲郎	事前発掘	4295	中世井戸, 近世土取 り穴	土師器, 近 世陶磁器		発掘中
	病 院 A J 19区	155	五十川伸矢 宮本 一夫	事前発掘	3000	中世井戸, 近世土取 り穴	土師器, 近 世陶磁器, 鋳型		発掘中
	本 部 A Z 25区	156	清水 芳裕	立 合					遺跡なし
	本 部 A Z 30区	157	浜崎 一志	立 合					遺跡なし
	北 部 B J 30区	158	清水 芳裕 宮本 一夫	立 合			土師器		中世包含層
	京 都 府 美 月		清水 芳裕	立 合			土師器		中世包含層
	本 部 A Z 22区	159	浜崎 一志	立 合					遺跡なし
	北 部 B G 28区	160	清水 芳裕	立 合			土師器, 陶磁器		中世包含層
	病 院 A E 10区	161	浜崎 一志	立 合					遺跡なし
	京 都 府 宇 治		清水 芳裕 五十川伸矢	立 合					遺跡なし
	病 院 A E 19区	162	浜崎 一志	立 合					近世包含層
	北 部 B F 32区	163	清水 芳裕	立 合			土師器		中世包含層
	北 部 B D 33区	164	清水 芳裕	立 合					遺跡なし
	医 学 部 A N 18区	165	清水 芳裕 五十川伸矢	立 合			土師器, 陶磁器		中世近世包 含層
	北 部 B J 32区	166	清水 芳裕 宮本 一夫	立 合			土師器, 中世陶器		中世近世包 含層

第Ⅱ部 京都大学埋蔵文化財研究センター紀要 Ⅵ

鴨東白河の鋳物工房
—京都大学構内の鋳造に関する遺跡—

瓦の範と製作技術
—高麗寺系軒丸瓦の検討—

鴨東白河の鋳物工房

—京都大学構内の鋳造に関する遺跡—

五十川伸矢

1 はじめに

京都大学構内の遺跡調査が、組織的かつ集約的におこなわれるようになってからほぼ10年余となる。この間、京都大学吉田キャンパスでは、既に知られていた縄文時代の遺跡はもとより、弥生時代、古墳時代、古代の遺跡をはじめ、これまで大きな注意をひかれることのなかった中世や近世の遺跡にも光が投げかけられることになった。

鴨東おうとうのこの地は、古代には、貴族の別業や寺院、墓所の散在する未開墾の状態にあったが、11世紀末に始まる六勝寺の造営によって市街地化し、保元の乱の舞台となった白河北殿が造営され、12世紀中葉には鳥羽上皇の皇后高陽院泰子によって、福勝院が建立され、12世紀後葉には藤原北家勸修寺流の人々が、この吉田界隈に移り住んだことが文献からわかる。そして、発掘調査の結果、白河北殿が病院構内南方一帯の地域に、福勝院が教養部構内の南部一帯の地域に、そして、藤原北家勸修寺流の人々の邸宅が医学部構内から教養部構内東辺にかけての地域に、それぞれ比定できることが判明しつつある。⁽¹⁾

これらの貴族の居宅や寺院の遺跡のほかに、様々な生産活動の跡を示す遺跡も数多く存在し、中世の水田跡や土砂を採掘した跡などが、各所で検出されている。また、注目すべきものとして、古代・中世の特殊な手工業生産のひとつである鋳造に関する遺跡が、最近次々と発見されている。この鋳造に関する遺跡は、文献にはあられわれず、地表にほとんど痕跡を残さないため、まったく偶然に発見されるのが特徴である。そして、これらは、鋳造技術の歴史的発展を解明するためにも、また、この地域の歴史的な景観の変遷を考えるうえでも、きわめて重要な資料とみなしうるものである。

本稿では、教養部構内A P22区の9世紀末～10世紀初頭(平安時代中期)の梵鐘鋳造遺構や第I部第2章第4節で説明した医学部構内A N18区の13世紀前葉(鎌倉時代前期)の梵鐘鋳造遺構をはじめとする、京都大学の吉田キャンパスで発見された鋳造に関する遺跡の調査成果を検討し、他の地域で発見された梵鐘鋳造遺構との比較、出土鋳型からの鋳造梵鐘の復原などを通じて、鴨東のこの地において鋳造にかかわった人々の活動を確認することにした。

2 教養部構内A P 22区の鋳造遺構と出土遺物

昭和56年度の教養部構内A P 22区の発掘調査で、平安時代中期(9世紀末~10世紀初頭)の鋳造遺構を発見し、梵鐘鋳造坑SK257・SK245、鞆坑SK265を検出した。⁽²⁾

(1) 梵鐘鋳造坑 (図20・21)

SK257 ほぼ一辺2.5mの平面隅丸方形で、深さが約1mの土坑である。底面には内型と外型を設置する平面円形の定盤^{じょうばん}がある。定盤は黄色の粘土を用いて成形し、全体を焼成している。この定盤には数回の作りなおしがあり、鋳造が何度かおこなわれたことがわかる。また、定盤の内部には、井桁状に丸太材を組み、鉄釘で結合していた。これは、鋳型を締めつけて固定するための掛木^{かけぎ}(縮木^{しめぎ})と考えられる。底面の西側には、南北方向にならぶ4個の柱穴が存在する。これは鋳造の完了した梵鐘をつりあげる構架材の柱の跡であろう。埋土の下層からは、定盤や内型を焼成した木炭のほか、梵鐘の鋳型が出土した。

SK245 SK257と同様の規模をもつ。定盤は破壊されており、底面には中央部東西方向に幅0.2mの2本の溝があって、四隅には柱穴がある。この溝は掛木の痕跡で、四隅の柱穴は構架材の柱の跡であろう。埋土から破壊された定盤や溶解炉の残片が出土した。

(2) 溶解炉 (図19)

SK245とSK265から出土した溶解炉の残片から炉を復原した。炉壁は、ササをまじえた粘土で形成され、内壁の熔融状態から上下を知ることができる。最上部は黄褐色を呈し、端部は外方に開く。胴部は灰褐色を呈し、ヒビ割れがある。その下部には、表面がガラス状に熔融し羽口がとりつく。胴部はやや径が大きく、胴ふくらみの炉形を復原しうるが、最下の湯だめの部分は検出していない。あるいは、この部分が鉄製であったからではなかろうか。

この復原案は、鳥取県倉吉市や中国における溶解炉⁽³⁾の民俗例をはじめ、近世の絵図に描かれた溶解炉⁽⁴⁾とくらべると、おおよそ形態的には類似している。

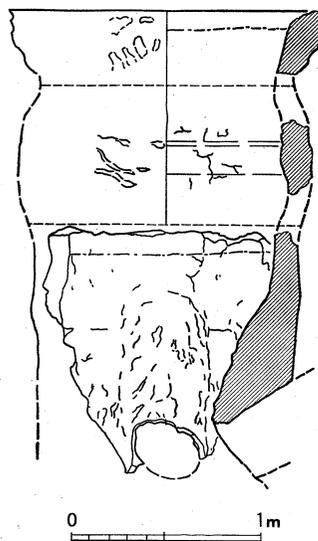


図19 溶解炉 縮尺1/40
近世に甗炉とよばれたものと基本的に異ならない構造である。



図20 梵鐘鑄造坑S K 257 (北から)

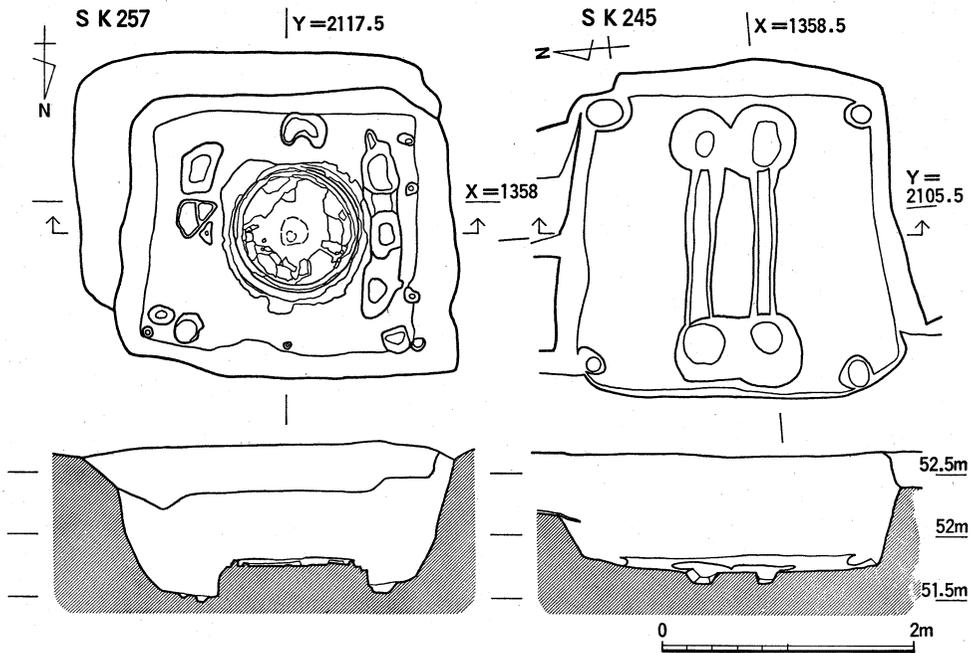


図21 梵鐘鑄造坑S K 257・S K 245 縮尺1/60

(3) 鞆坑 S K 265

S K 257と S K 245の中間に位置する S K 265は南北 2.5 m, 東西 1.8 mの長方形の掘形をもち、深さは最深部で 0.6 m である。土坑内には密度の高い暗灰色粘質土がぎっしりつまり、溶解炉の残片や鑄型などが出土した。踏鞆⁽⁵⁾では踏板によって効率よく送風をおこなうように、踏板下の底部の形を工夫したことが近世の文献にみえる⁽⁶⁾。また、そのためには、適宜その形を変化させうる粘土をもちいたことが、昭和20年ごろまで操業していた鳥取県倉吉市の斎江家⁽⁷⁾の踏鞆跡の発掘調査で確認されている。S K 265の内部につまっていた暗灰色粘土質も、まさにこれにあたるものであり、また梵鐘鑄造坑との位置関係からも、この土坑 S K 265は踏鞆をとりつけた鞆坑というべき遺構と考える⁽⁸⁾。

(4) 出土鑄型・鑄造道具 (図22)

出土鑄型には龍頭(1)や唐草文を彫りこんだ上帯もしくは下帯(2・3)の部分などがある。この唐草文は流麗で、奈良県吉野郡吉野町廃世尊寺鐘や兵庫県神戸市徳照寺鐘の下帯にみられるものにも類似する。このほか、仿唐鏡(4)やその他(5)の梵鐘以外の鑄型も出土している。6は赤褐色を呈する焼煉瓦であり、鑄型を焼成する時に、木炭を積むために使用する煉瓦と考えられる⁽⁹⁾。7は鞆の羽口の一部。溶解炉にとりついているものより、ずっと小型である。8～10は埴塙である。

(5) 鑄造工房の復原 (図23)

以上のような調査結果から、梵鐘鑄造をおこなった鑄造工房を復原する。梵鐘鑄造坑は2個あり、その中央に踏鞆が1基設置されていた。鞆坑 S K 265や梵鐘鑄造坑 S K 245からは数個体分の溶解炉が出土しており、梵鐘鑄造坑において鑄造をおこなう場合には、踏鞆と梵鐘鑄造坑の中間に溶解炉を設置したと考えるのが妥当である。こう考えて、図23に鞆と溶解炉と鑄型の配置を復原想定した。もちろん、鞆の構造上、同時に左右2方向に送風できないとおもわれるから、〈鑄型—溶解炉—踏鞆〉と〈踏鞆—溶解炉—鑄型〉のふたつの組み合わせが、時を異にして存在したとみるべきであろう。鞆の中央からまっすぐに想定した湯道が、梵鐘の鑄型の中心からずれるのは偶然ではなく、湯口が鑄型の中心からはずれたところにあるためであろう。

また、この遺跡からは、鏡の鑄型や埴塙が出土し、梵鐘以外の各種の青銅製品の鑄造をもおこなっていたことがわかる。とくに、仿唐鏡の鑄型が明確な工房から出土した唯一の遺跡でもある。これによって、平安時代の鏡の生産地が、王朝文化の中心たる平安京の東辺に確実に存在したことが判明したことも重要な発見である⁽¹⁰⁾。

教養部構内A P22区の鋳造遺構と出土遺物

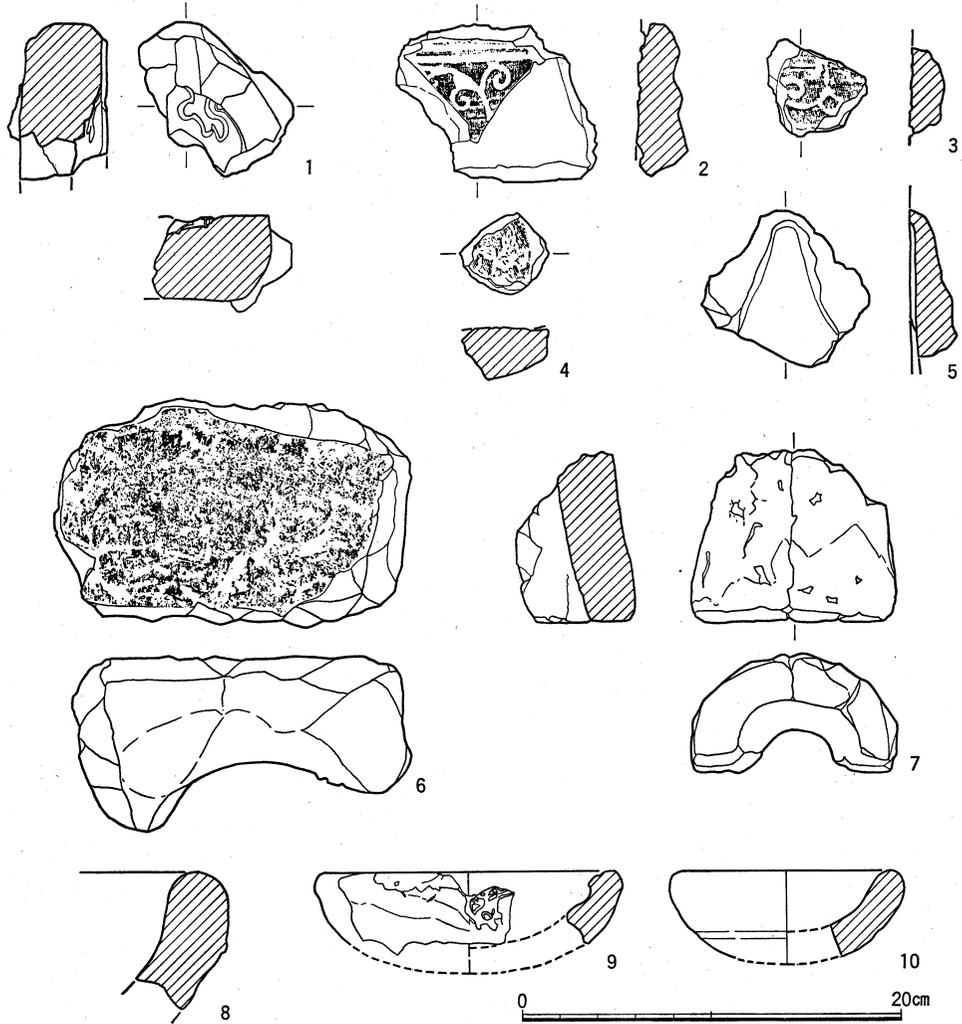


図22 A P22区出土の鋳型，煉瓦，鑪の羽口，坩堝 縮尺1/4

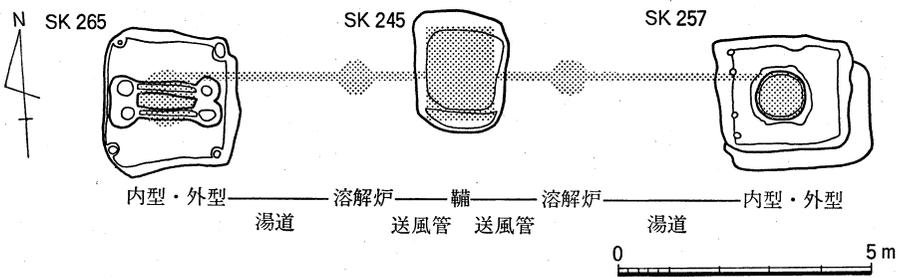


図23 鋳造工房の復原 縮尺1/150

3 医学部構内A N18区の鋳造遺構と出土遺物

(1) S X13の梵鐘鋳造技術 (図24・25)

梵鐘鋳造遺構S K13の検出状態と内型・外型などについては、第I部第2章第4節に詳述したので、これをもとに本例の梵鐘鋳造技術を検討してみよう。

中世の梵鐘鋳造遺構は、奈良県桜井市山田寺⁽¹¹⁾、福井県坂井郡丸岡町豊原寺跡⁽¹²⁾、福岡県大宰府市銚ノ浦遺跡⁽¹³⁾、大阪府南河内郡美原町真福寺遺跡⁽¹⁴⁾、長野県上伊那郡飯島町寺平遺跡⁽¹⁵⁾、岐阜県恵那郡坂下町金屋遺跡⁽¹⁶⁾などで発見されている。

これらの遺跡では、いずれも一辺が2 m内外の隅丸方形の土坑内に、定盤と内型、外型を設置し、梵鐘を鋳造するものである。しかし、本例では土坑をとまわず、当時の地表面上に内型と外型を設置しており、その他の発見例とは異なっている。これは、鋳造梵鐘が小型であったことによるものであろう。すなわち、図25に示したように、現在でも半鐘の鋳造の際には、地上に定盤と内型、外型を設置して掛金で締めあげて、坩堝から溶金を流しこんでおり、中世においても小型の梵鐘の場合には、同様の方法がとられたものと考えたい。また、定盤と内型を一体のものとして形成しているのも、小型の梵鐘であったためであろう。

外型の継目は、中帯の直上、草の間の下部にあり、その合わせ目には段がもうけられている。これは鋳型がずれないように正確に重ねるための仕かけと考えられる。そして、こうした段は、この鋳型をかぶせることによって、内部がみえなくなる場合には必要不可欠な仕かけである。輪状の外型を積んで湯入れをおこなう場合の有効なくふうのひとつと考えられる。

このS K13の梵鐘鋳造においては、鞴や炉の形態や配置などは、教養部構内A P22区の梵鐘鋳造遺構のようにわからない。鋳造梵鐘が小型で鉄製であったという特殊な条件もあり、これを推定するのがむずかしいが、鎌倉時代後期に製作された『歓喜天靈驗記絵巻』に鋳造をおこなっている情景があり、左下に描かれている物体が小型の梵鐘の鋳型とするならば、このS K13における梵鐘鋳造の作業状況を彷彿とさせるものであろう。そこには箱鞴がみえ、これを操作するものと親方らしいものとのふたりの鋳物師が登場する。細部は不明であるが、坩堝によって鋳型に溶金を注ぎこんだと想定できる。施主とおぼしき僧侶と稚児がみまもるなか、菱烏帽子に小袖袴姿の鋳物師が作業にあたっている情景は、当時の鋳造のおこなわれた現場を活写したものといえよう。



図24 梵鐘鋳造遺構 S X13 (東から)



図25 半鐘の鋳造例
(昭和57年5月京都太秦
岩澤の梵鐘株式会社)
本例は湯入れをすませ
た後で掛金(締金)をは
ずしてある。

(2) 梵鐘の復原 (図26・27)

SX13出土鋳型は、ひとつの梵鐘を鋳造するための外型と内型の一括品と考えられるので、これらをもとに鋳造された梵鐘を復原し、京都太秦広隆寺蔵の梵鐘と比較してみた⁽¹⁸⁾。

まず、京都太秦広隆寺蔵の梵鐘について説明する。この梵鐘は鉄製で、口径31.5cm、高さ46cm。龍頭はひどくいたんでいるが、龍の面がおぼろげながらみえる。龍頭の長軸方向と撞座の中心を結ぶ直線の方向は同一で、坪井良平氏のいう新式である⁽¹⁹⁾。笠形はゆるやかに傾斜し、圏線はない。上帯と下帯には文様はない。乳の間には円錐台状の乳が縦3列、横4列にならぶ。草の間には「奉施入薬師仏 建保五年七月日 秦末時」の銘を陽鋳する。草の間の上部には甲張が顕著にみえ、鋳型の継ぎ目を確認することができる。縦帯は中央・左・右それぞれ1本で構成されている。撞座は平板な8葉の花弁のなかに雄蕊帯をめぐらせ、円形の中房に1+8の蓮子を配している。駒の爪は小さくあまり外へ踏ん張らない。

次に、SX13出土鋳型から復原した梵鐘について説明する。鋳造梵鐘は現存しないが、これも鉄製で口径32cm。龍頭は不明、笠形はややふくらみ気味で、圏線はない。上帯・下帯に文様はなく、縦帯は中央1本、左・右2本からなる。乳の間の詳細は不明。草の間の下部に鋳型の継ぎ目がある。中帯は幅広く、撞座は複葉8弁のなかに雄蕊帯をめぐらせ、八花形の中房に1+8の蓮子を配している。駒の爪はやや屈曲して外に踏ん張る。文字様の彫り込みのある鋳型の小片があり、陽鋳の銘があったようであるが、判読不能。

このふたつの梵鐘は坪井良平氏の示す梵鐘の形式変遷によれば、鎌倉時代のものであり⁽²⁰⁾、しかも、梵鐘鋳造遺構SX13は、出土遺物からみて13世紀前葉ごろ、広隆寺鐘は銘から建保5年(1217)と、きわめて近い年代のものとみてよい。また、撞座の意匠などはほぼ類似している。ただ、広隆寺鐘のほうが、装飾にやや平板で省略的な部分が多くみられる。また、広隆寺鐘にくらべSX13出土鋳型から復原した梵鐘は上部がややすぼまり気味で、鋳型の継ぎ目の位置が異なっている。こうした細部におけるちがいはあるものの、このふたつの梵鐘は、13世紀の前葉に製作され、大きさもほぼひとしい。また、おなじく鉄製であって、現存する古代・中世の鉄製の梵鐘は2例しかないことから考えても、製作にあたった工人が、近縁の人々であった可能性がきわめて高い。

こうした特殊な梵鐘を製作した中世京都の鋳物師は、当時きわめて優勢であった河内国に本貫地をもつ鋳物師にくらべて、小規模な生産をおこなっていたのではなからうか。それは平安時代から中世前半にかけては、梵鐘そのほかの鋳造品の銘に、中世京都の鋳物師はあまり姿をあらわさないからである。

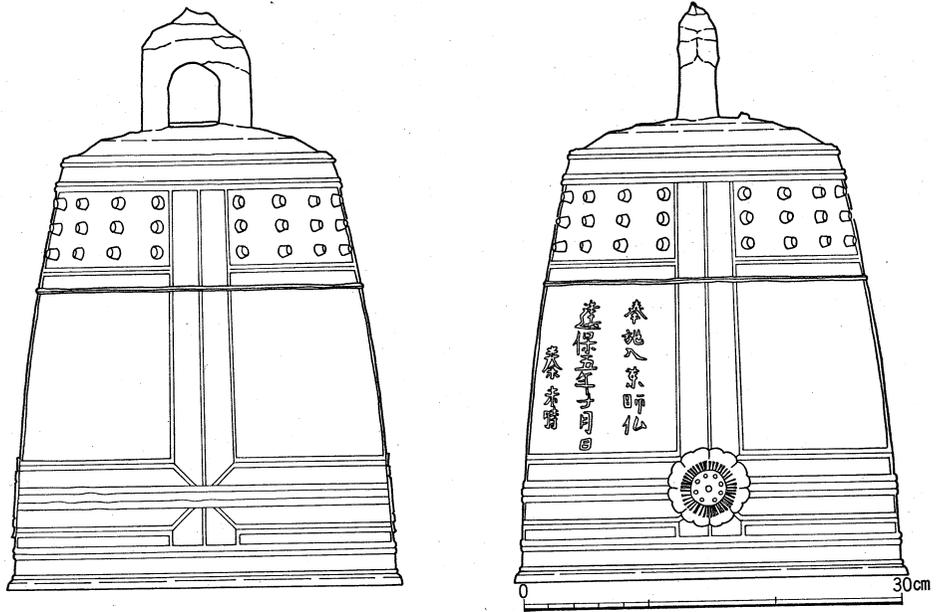


図26 京都太秦広隆寺蔵の梵鐘 縮尺1/6

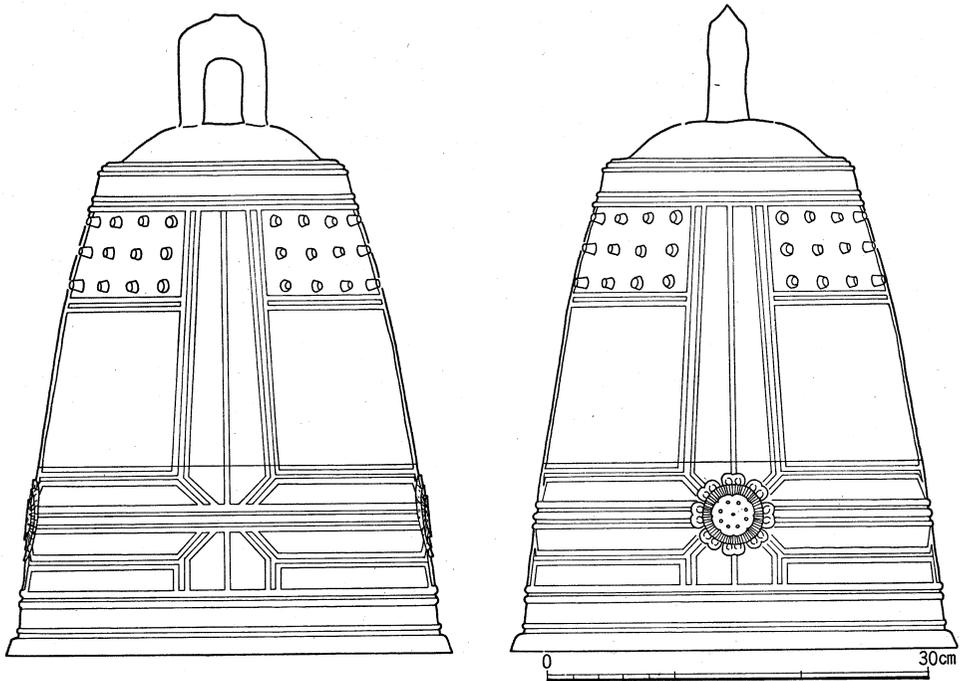


図27 S X13出土鑄型から復原した梵鐘 縮尺1/6

4 そのほかの鋳造に関する遺跡

前節で述べた教養部構内A P 22区と医学部構内A N 18区の鋳造遺構のほかに、その周辺の医学部構内や医学部附属病院構内でも鋳造に関する遺跡が発見されている。

梵鐘鋳造遺構S X 13を検出したA N 18区の東方約200mに位置し、昭和60年度に調査をおこなった医学部附属病院構内A J 19区では、大規模な近世の土取り穴のなかから、中世の多量の土師器、瓦器、陶磁器とともに鋳型や鞆の羽口、坩堝が出土した⁽²¹⁾(図28)。1～3は鞆の羽口、4は坩堝、5～7は鋳型の断片である。鋳型はいずれも小片で実体が不明であるが、仏器や鏡の鋳型であろう。これらの遺物の正確な年代を決定することがむずかしいが、この周辺で中世に鋳造をおこなったことが想定されるのである。

このほか、A N 18区の南東約150mに位置し、昭和61年度に調査をおこなった医学部構内A L 20区でも、鋳型や溶解炉などがまとまって出土した⁽²²⁾。これらの遺物も、年代を正確に特定できないが、中世のものである可能性が高い。この医学部構内においては、かなりの密度で鋳造に関する遺物が包含されていることが考えられ、中世においてこの付近に鋳造工房が存在したことが確実となってきた。

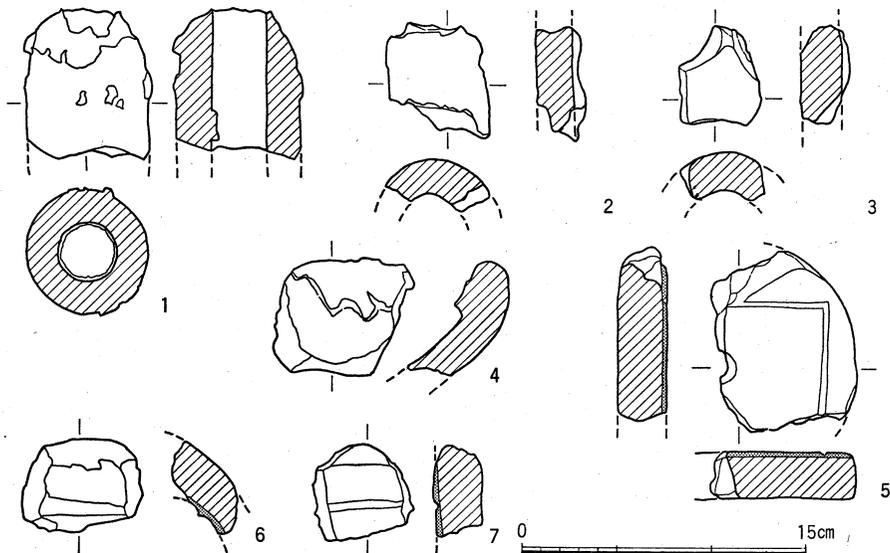


図28 A J 19区出土の鋳型、鞆の羽口、坩堝 縮尺1/4

5 鴨東白河の鑄造工房

(1) 出吹きか、工房か

さて、梵鐘は、その重量や大きさのため、運搬に適したものとはいえ、梵鐘を必要とする寺院の近辺もしくは境内へ、工人が出張して出吹きをおこなうことがある。とくに、中世には河内の鑄物師がさかんに出吹きをおこなったことが推定されている。現在はほとんどみられなくなったようであるが、かつて出吹きには「見せ物」の要素もあった。坪井良平氏は、中世の後半に湯入れの場が、ある種の「見せ物」として一般庶民までまきこんだお祭騒ぎとなった話を紹介されている。⁽²³⁾

さて、AP22区の鑄造遺構では、仿唐鏡などの鑄型も出土し、定盤の作りなおしがあるため、継続的に操業をおこなった古代の鑄造工房と考えられる。また、このAP22区の南西200mという至近距離にいとなまれたAN18区の梵鐘鑄造遺構の北側の医学部構内北辺には、中世において勸修寺家の菩提寺浄蓮華院が存在したと推定でき、SX13は浄蓮華院の梵鐘を出吹きによって製作した遺構の可能性もある。しかし、この梵鐘は、きわめて小型であり、大きさの点だけからみるならば、出吹きであったと考えにくい。また、SX13の南側には工房の存在をうかがわせる土間状遺構SX20があり、SX17からはSX13出土のものとは別個体の梵鐘の鑄型も出土している。そのほか、AJ19区やAL20区など、AN18区の周辺の地域で鑄造関係の遺物が出土しており、中世にも場所をすこしずつ移動しながらも、継続的に操業をおこなった工房が存在したと考えられる。

このように、AP22区とAN18区の梵鐘鑄造遺構は、ともに出吹きではなく継続的な工房の存在を想定できるため、京都大学教養部・医学部が位置する吉田山西麓の一帯が、古代・中世の鑄造にかかわる工人集団の一本拠の可能性がたかまってきた。かれらは、平安京のすぐ外郭の地域に存在したことからも、おもにこの都市に製品を供給した工人集団のひとつであった可能性が高く、中世にいたっても、その命脈をたもちつづけていたと考えたい。

(2) 工房の立地

こうした鑄造工房がいとなまれた地には、鑄造に適したなんらかの条件を想定できないだろうか。鑄型を作成し、溶金を流しこむ作業に必要なものは、地金のほかに鑄型の原料となる細砂と粘土、鑄型を焼成し地金を溶解する薪と炭である。特に鑄型の表面にほどこす真土用の細砂やその外側を覆う粘土は重要であり、けっこう重量もかさむ原料資材であ

る。京都大学の吉田キャンパスの存在する吉田山西麓一帯には、花崗岩が風化堆積して形成された細砂層や粘土層が各所に広く分布しており、この材料を得るのはきわめて容易であったと考えてよい。

鳥取県倉吉市では、鋳物に適した砂や粘土の存在する川筋の付近に鋳造工房が立地していた。⁽²⁴⁾また、河内鋳物師の故地の一角に位置する大阪府南河内郡狭山町の周辺では、大正初期まで良質の型土が採取されていた。⁽²⁵⁾もちろん、鋳物砂が付近で産出することのみによって工房の立地を説明できるわけではないが、平安京や中世京都のような都市においては地金や薪・炭は他の手工業や一般生活にも必要で、ひろく商品化されていたはずである。⁽²⁶⁾しかし、鋳物砂や粘土は特殊な原料資材であり、鋳造にあたってこれ入手することが、どこでも容易であったとは考えにくく、工房立地の最も重要な条件になったと判断できる。

(3) 銅鉄兼業

梵鐘鋳造遺構S X13で製作した梵鐘は鉄製である。中世の鉄製梵鐘で現存するものは、京都太秦広隆寺蔵のもののみであり、本来梵鐘は青銅製品であるから、これらはきわめて特殊な製品であるが、おなじ調査区で銅を含んだ炉壁が出土しており、銅鉄兼業がおこなわれたことが確実である。中世の鋳物師が銅と鉄をともにとりあつかったことは、河内の鋳物師が、梵鐘などの青銅製品を鋳造する一方で「河内鍋」としてはやされた鉄製の煮炊用具を生産したことからわかる。そして、最近、大阪府美原町真福寺遺跡で梵鐘や鏡の鋳型のほかに鍋の鋳型が出土しており、⁽²⁷⁾中世においては、確実に銅鉄兼業の生産体制をうかがうことができる。

(4) 白河の鋳物師

さて、正応3年(1291)在銘の奈良海龍王寺金銅舍利塔には、「小工 白河守員」と「大工 白河行円」なる工人名が記されており、中世の鴨東白河の地にあって鋳造にたずさわった工人を金石文から確認することができる。⁽²⁸⁾中世の梵鐘鋳造遺構で、出吹きではなく確実に継続的な工房跡とみられるものには、真福寺遺跡や銚ノ浦遺跡があり、前者は多くの鋳物師が自らの祖とする河内鋳物師の、後者は九州の鋳物生産の中核となったと推定できる大宰府鋳物師の、それぞれ本拠地である。中世京都においては、鎌倉末期には三条釜座の名がみえ、⁽²⁹⁾この三条釜座は中世後半に至って興隆する。⁽³⁰⁾吉田山西麓一帯で鋳物生産にあたったこの「白河」の工人集団は、中世の梵鐘や鰐口の銘にはその姿をみせず、上に述べた有力な鋳物師とくらべると傍系であったとみられる。また、構内の鋳造に関する遺跡には、

確実に近世のものは確認されていない。そして、京都の鑄工については、香取秀眞氏が近世の京都案内として名所名物を克明に記した『京羽二重』をはじめとする地誌や梵鐘、鉄釜などの鑄造品の銘から、網羅的に集成しているが、そのなかに白河の鑄物師は⁽³¹⁾いっこうにみあたらない。おそらく、かれらは、近世にはその活動を終息させていたのだろう。以上のように、京都大学構内に存在する鑄造に関する遺跡は、古代・中世の鑄造技術やこの地域においてこれを担った工人集団の実体を解明する貴重な資料を提供するものといえよう。今後の調査によって、鑄造に関連する遺跡の実体がさらに明確になり、この方面の研究が進展することに期待したい。

本稿をまとめるにあたり、鑄物の科学技術史研究会の石野亨、鹿取一男の両先生、河内鑄物師研究会の直木孝次郎、網野善彦、三浦圭一、脇田晴子、笹本正治、庖丁道明の諸先生、日本鋳業会の葉賀七三男先生、京都東山高橋鑄工場の上田一男氏、倉吉市立博物館の藪中洋志氏、当京都大学埋蔵文化財研究センターの浜崎一志氏には、多くの御教示をいただいた。また、京都太秦広隆寺管長清瀧智弘氏には寺宝の鉄鐘の実測をお許しいただき、岩澤の梵鐘株式会社の岩澤宗徹氏には半鐘鑄造時の写真の掲載を許可いただいた。末尾に記して謝意を表します。

〔注〕

- 1 浜崎一志「浄蓮華院と吉田の構——応仁の乱後の吉田の復元的考察——」京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和56年度』1983年
- 2 五十川伸矢・飛野博文「京都大学教養部構内A P 22区の発掘調査」京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和57年度』1984年 pp.16-22, 29-30, 五十川伸矢「梵鐘の鑄造遺構について」『河内惣官鑄物師枚方田中家と鑄物の歴史』枚方市教育委員会 1984年
- 3 倉吉市教育委員会『倉吉の鑄物師』1986年 p.191, Rudolf P. Hommel *China at Work* M.I.T. Press 1969 fig. 39, 41
- 4 源保重『大筒鑄之圖』弘化4年(1848)
- 5 古代・中世の鞆の構造の細部は不明な点が多い。近世以降の踏鞆の構造については、以下の文献を参照した。葉賀七三男「統尾鋳録」⑭・⑮・⑯『日本鋳業会誌』1045・1047・1052 1975年、今井泰夫「鞆(ふいご)」『講座・日本技術の社会史』第五巻採鋳と冶金 日本評論社 1983年。また、中世・近世の絵図にえがかれたものとしては、『東北院職人歌合絵巻』(高松宮家本)室町時代、『日本山海名物圖会』寶暦4年(1754)、源保重『大筒鑄之圖』弘化4年(1848)などがある。
- 6 水野太郎左衛門家古文書による。石野亨、鹿取一男両先生が、「たたら」の送風機構解明委員会『日本古来の送風装置「たたら」の送風機構解明に関する研究』1987年で、これを紹介し、踏鞆の送風シミュレーション実験をおこなっておられる。
- 7 倉吉市教育委員会『倉吉の鑄物師』1986年 pp.252-5
- 8 S K 265が鞆を設置した跡であろうと最初に指摘されたのは、京都東山高橋鑄工場の上田一男氏である。
- 9 京都東山の髙橋鑄工場では「ヤカモト」あるいは「マクラ」とよばれている。使用法の詳細は以下の文献を参照されたい。石野亨『鑄造 技術の源流と歴史』産業技術センター 1977年 pp.218,

鴨東白河の鋳物工房

- 223, 石野亨・小沢良吉・稲川弘明『図説日本の文化をさぐる』〔4〕鐘をつくる 小峰書店 1984年 pp. 29, 35, 36
- 10 前田洋子「羽黒鏡と羽黒山頂遺跡」『考古学雑誌』第70巻第1号 1984年 pp. 84-5
- 11 奈良国立文化財研究所「山田寺第3次（講堂・北面回廊）の調査」『飛鳥藤原宮発掘調査概報』10 1980年 pp. 30-40
- 12 丸岡町教育委員会『豊原寺遺跡』Ⅱ 1981年 pp. 18-19
- 13 山本信夫・狭川真一「銚ノ浦遺跡梵鐘鋳造遺構発掘調査速報」『古代研究』27 1984年
- 14 大阪府教育委員会『真福寺遺跡』1986年 pp. 25-30
- 15 友野良一「寺平遺跡の梵鐘鋳造跡」『月刊文化財』194号 1979年
- 16 坂下町教育委員会『金屋・星の宮遺跡』1975年 pp. 1-19
- 17 『歓喜天靈験記絵巻』に描かれた鋳造の情景は、『図説日本庶民生活史』2 平安——鎌倉 河出書房新社 1961年 p. 29, 遠藤元男『日本職人史の研究(論集編)』雄山閣 昭和36年 口絵11頁, 『技術の社会史』第1巻 古代・中世の技術と社会 有斐閣 1982年 p. 282 に紹介されている。『技術の社会史』に紹介されたものには、鋳上った梵鐘を施主たちが見に来たところという説明書きがあるが、左下に描かれた物体を完成した梵鐘とみるには、頂部に龍頭とおぼしきものがなく、形態が裾広がりであることなどの難点がある。むしろ、ふたりの工人が火を掻いているところから、湯入れを始める前の情景で、この物体こそ鋳造のために設置された梵鐘の鋳型と考える。広がった裾は、定盤とみればよい。むしろ、湯入れの際に、施主をはじめとする関係者が立合うのが常である。仮小屋で作業をおこなっているようなので、これは出吹きとみてよい。
- 18 復原にあたっては、龍頭の方向と撞座配置の関係、乳の形状と数と配置などは、京都太秦広隆寺蔵の鉄製梵鐘にしたがった。
- 19 坪井良平『日本の梵鐘』角川書店 1970年 pp. 19-20
- 20 前掲『日本の梵鐘』pp. 98-124
- 21 京都大学構内遺跡調査会『京都大学医学部附属病院構内の遺跡——A J 18・19区発掘調査現地説明会資料——』1986年
- 22 京都大学構内遺跡調査会『京都大学医学部構内の遺跡——A L 20区発掘調査現地説明会資料——』1987年
- 23 坪井良平「梵鐘の鋳造址」『佛教藝術』148号 1977年 に北野社の鐘鑄などが紹介されている。また、『證如上人日記』天文15年(1546)6月9日条には、「鐘鑄」という狂言がみえ、梵鐘の鋳造が芸能の題材に採用されたようである。
- 24 倉吉市教育委員会『倉吉の鋳物師』1986年 pp. 215-6
- 25 末永雅雄「狭山の鋳物師」『狭山町史』第1巻 本文編 1967年 p. 132
- 26 教養部構内A P 22区の鋳造遺構から出土した炭化材には、比較的ブナが多い。ブナは京都周辺では、比良山の高度500~600m周辺に成育しており、遺跡地のごく近隣の里山にあったものとは考えられない(前掲「京都大学教養部構内A P 22区の発掘調査」p. 22)。このブナ材は商品として、この工房にもたらされたものであろう。また、応永2年(1395)、朽木口関を通して京都に入荷する品物に、くろかね(鉄)、あかかね(銅)、鍛冶炭がみえる(『山科家礼記』文明12年正月26日条)。
- 27 注14におなじ。
- 28 前掲『日本の梵鐘』p. 174
- 29 鎌倉時代末期の正応2年(1289)には、「三条まちかまのさの弥藤三」が、東寺におさめた釜の3年間の保証をしている(『東寺古文零聚』)。また南北朝時代の暦応4年(1341)には「三条の釜座」がみえる(『師守記』)。
- 30 前掲『日本の梵鐘』pp. 169-74
- 31 中世末以降近世末にいたる間、三条釜座を筆頭に、六条、七条寺内、室町、堀川、京極三条、大佛、松原猪熊、岩上、三条大橋東、西六条、六条醒ヶ井、西洞院、柳馬場竹屋町、寺町三条、若宮通に鋳工がいたことが、つきとめられている(香取秀眞『日本鋳工史 第一冊』郷土研究社 1934年)。

瓦の範と製作技術

——高麗寺系軒丸瓦の検討——

菱田哲郎

1 はじめに

崇峻天皇元年(588)に始まる飛鳥寺の造営以降、瓦葺の寺院が次々に建てられ、7世紀後半には地方における寺院造営の動きも活発になる。それらのなかには、「山田寺式」、
「川原寺式」、「法隆寺式」など、畿内中心部の寺院を標式名とする軒瓦の出土をみるところが多い。このような寺院の造営を瓦生産の面から捉え、地方寺院の成立にあたっての工人の動向を明らかにしていくことが、その成立の契機の解明にとり有効であると考えられる。ここでは、文様をもつことから系譜関係を明らかにしやすい軒丸瓦を取り上げ、とくに京都府高麗寺を中心とする川原寺式軒丸瓦の展開を軸にみていくことにする。

軒瓦の研究は、瓦当文様が主たる対象とされてきた。そのため、本来、製作技術の検討からなされるべきである工人の系譜の議論も文様から行われる場合が多い。しかし、軒瓦、とくに軒丸瓦は、そのほとんどが範によって作られるものであり、文様は、その範に刻まれたものである。範の製作については、木工技術を要し、蓮華文という仏教美術に特有の意匠を扱うことから、仏師や画工など、瓦生産者以外の工人による製作を想定する意見も有力である。⁽¹⁾したがって、文様は範の一要素として扱い、瓦工人の維持する製作技術とどのように対応するかという点に検討を加えたいうえで、生産者の系列の復原に進むという手続きを踏まねばならないであろう。

瓦の範に対する研究は、同一の範で作られたかどうか、すなわち同範関係に注意が向けられ、範の同定が試みられることから進展した。⁽²⁾そして、瓦当に残された範の痕跡から、
範そのものの形態を復元的に検討する視角も、木村捷三郎によって提示された。⁽³⁾この観点は近藤喬一に受け継がれ、
範の形態の時代による変遷が明らかにされている。⁽⁴⁾しかし、複雑な様相を呈する7世紀後半の軒瓦については、いまだ十分な整理が行われていないのが現状である。この時期にみられる多様な瓦当文様について、個々にその範を復元的に検討する作業が必要であろう。

川原寺式軒丸瓦のなかで、範の復原が可能な例として、図29に示した兵庫県加西市吸谷^{すいだに}麿寺の例が挙げられる。⁽⁵⁾接合する丸瓦の径が大きすぎたため、範よりも瓦当の径を大きく

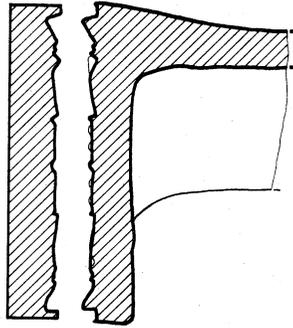
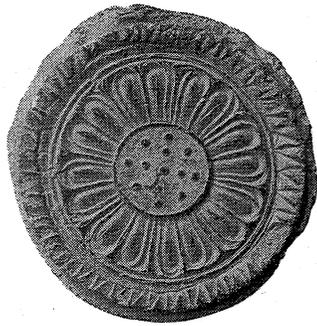


図29 範の復原
兵庫県吸谷廃寺
出土軒丸瓦
縮尺1/4

0 10 cm

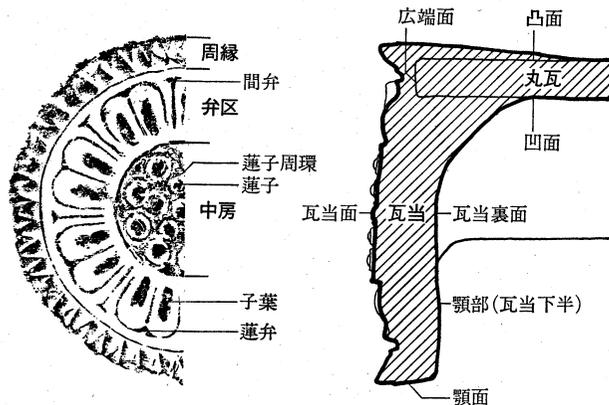
作っている。このため、範の端が明瞭に観察でき、周縁の外側にかぶさる円形の範が復原できる。この吸谷廃寺出土軒丸瓦は、瓦当文様では蓮子周環を失っているなどの退化がみられるが、周縁が三角縁状を呈する点、中房が突出する点など、断面形態は原型式である川原寺出土例に近い。川原寺式軒丸瓦のうち、瓦当面の断面形態が原型式に近いものは、周縁の外側に範の痕跡をとどめることが多い。それらの軒丸瓦の範として、吸谷廃寺の資料で復原した範を想定しても大過はないと考える。

軒瓦の製作技術については、一本作り軒丸瓦といった特殊な例を除いて、検討が十分に行われていないのが現状である。その背景には、平瓦などと比べて製作技術を示す要素が少なく、属性の組合せから工人集団を特定していくという方法が取りにくいことがある。しかし、瓦当の成形、丸瓦の接合、顎面や瓦当裏面の最終的な調整など、製作の工程で残される痕跡をチェックポイントとし、さらに範との対応関係をみていくことによって、生産者の問題に立ち入ることが可能になると考えられる。この点で注意されるのは、瓦当の成形時に杵状の型(枷型)が用いられている場合があることである。これは、瓦当の顎面に周縁に沿う突起がみられることから推定されたのであるが、この突起とT字状に交わる突起も観察されることから、少なくとも2個以上の部分からなり、範の上に重ねて用いられたものであることがわかっている⁽⁶⁾。瓦当裏面に、枷型に沿って施したと考えられる撫でや削りがみられることが多く、枷型は、正円を得るためばかりでなく、瓦当の成形を補助するために使用されたと考えられる。すなわち、枷型は、範の付属具ではあるけれども、軒丸瓦の製作技術の一要素として重視することができる。

以上、軒丸瓦について、文様を含む範の要素、製作時に残される製作技術の要素に分ける見方を提示した。この両者の対応関係をみていくことから、軒丸瓦の製作者の系列の復

高麗寺跡出土軒丸瓦

図30 軒丸瓦の部分名称



原が可能になるであろう。以下では、京都府南部の高麗寺を中心とする川原寺式軒丸瓦を材料に、上記の視点による分析を加えていくことにしよう。

2 高麗寺跡出土軒丸瓦

高麗寺跡は、京都府相楽郡山城町上狛に位置する寺院跡で、現在は南北2基の土壇をとどめているにすぎない。1935年に数回にわたって調査され、講堂の南側に、塔を東、金堂を西に配する法起寺式伽藍配置が明らかになった⁽⁸⁾。その後、1984年からは、山城町教育委員会により再調査が継続されており、遺跡についての精確な記録が蓄積されてきている⁽⁹⁾。

高麗寺跡からは、飛鳥時代から平安時代にわたる瓦が出土している。最古の例は、飛鳥寺創建時の瓦と同範の単弁10弁蓮華文軒丸瓦で、範の傷み具合から高麗寺の方が遅れることがわかる。これをいま仮に高麗寺Ⅰ型式としておこう。この瓦はごく少量しか出土しておらず、高麗寺の創建伽藍が整えられたのは、次の川原寺式軒丸瓦の段階である。これらは範の違いから7型式に分けることができるので、高麗寺Ⅱ型式～Ⅷ型式として述べていくことにしたい⁽¹¹⁾。

Ⅱ型式(図31-1～3)は、範の割付にあたって、中房半径と弁区長が等しいという径の割付比(以下、Aとする)をとり、周を8等分して複弁の蓮華文を配する。中房は突出し、周環をもつ蓮子15個を配する。周縁は三角縁状を呈し、鋸歯文の三角形の右側に段のある面違鋸歯文を巡らす。範は、周縁の外側にかぶさる形態のものであるが、範をはずしたのちに撫で調整を加えるため、痕跡が明瞭でない。接合に際して、刻みなどの工夫は施さなもののほかに、丸瓦凸面に刻み目を入れるものがある⁽¹²⁾。瓦当裏面の調整は、削りを施したのちに撫でを加えている。瓦当下端での厚さが、4 cm前後のもの(Ⅱ a 型式)と3 cm前後

瓦の範と製作技術

のもの(Ⅱ b 型式)に分かれる。⁽¹³⁾

Ⅱ b 型式には、顎面と瓦当裏面のなす稜を面取りするものがある。この高麗寺Ⅱ型式は川原寺A類と同範である。

Ⅲ型式(図31-4)は、範の径の割付比がAで、中房には周環をもつ大粒の蓮子8個を配する。周縁の面違鋸歯文は、左側に段がある。顎面には、範をはずしたのちに、撫で調整を施している。瓦当裏面は、削り調整のあとに撫で調整を加える。瓦当下端厚は約3cmで一定である。

Ⅳ型式(図31-5)は、範の径の割付比がB(中房半径と間弁の基部から頂部までの長さが等しい)になり、中房の蓮子が7個で、周縁の鋸歯文の段が右側にある。顎面に範型の痕跡をとどめる例がある。瓦当裏面は、全面に撫で調整を施しているが、面に凹凸があり、削りを行っていないと考えられる。瓦当下端厚は3cm弱である。

V型式(図31-6)は、径の割付比がC(中房直径と弁区長+周縁幅が等しい)で、Ⅵ型式からⅧ型式と共通する。中房には、周環をもつ蓮子7個を配する

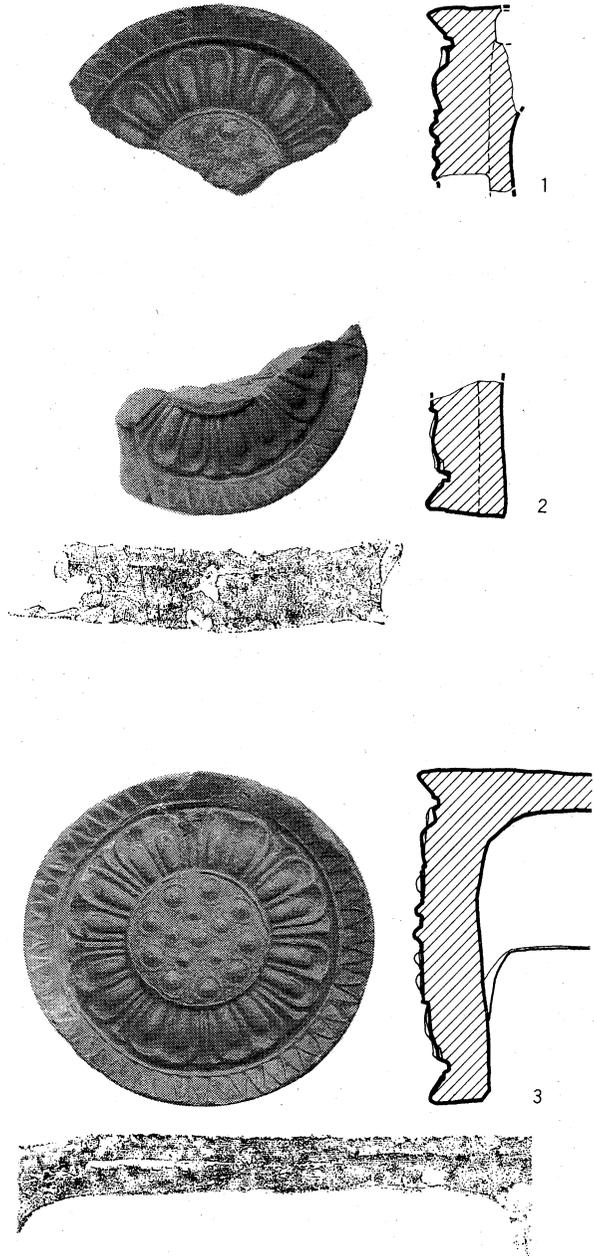
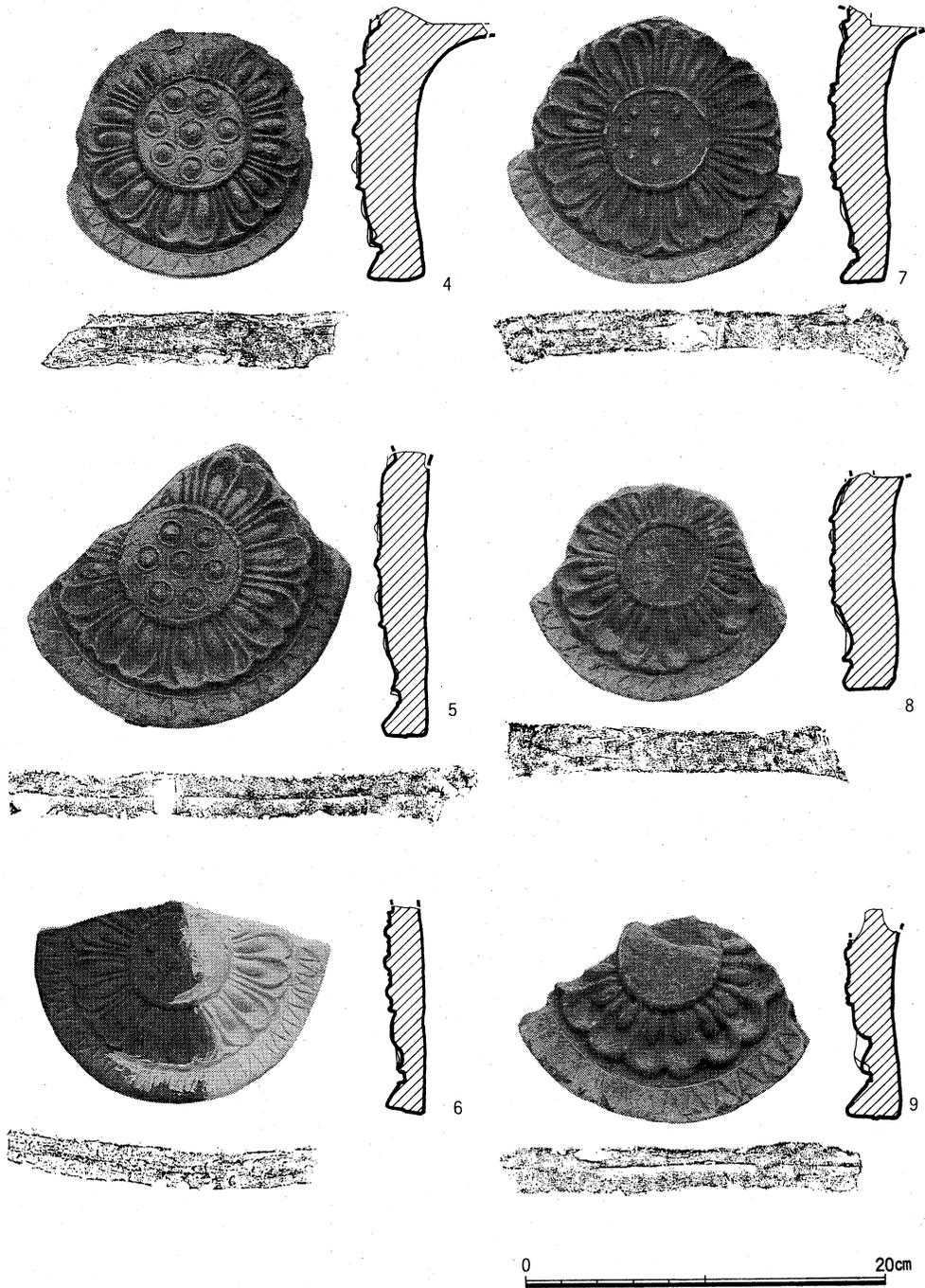


図31 高麗寺跡出土軒丸瓦

高麗寺跡出土軒丸瓦



(1・2 II a 型式, 3 II b 型式, 4 III 型式, 5 IV 型式, 6 V 型式, 7 VI 型式, 8 VII 型式, 9 VIII 型式) 縮尺1/4

瓦の範と製作技術

が、Ⅳ型式よりも小粒である。周縁には右側段の比較的細かい面違鋸歯文を巡らす。顎面の撫では粗く、範が周縁の外側にかぶさることや、枷型の使用がよくわかる。瓦当裏面の調整は、部分的に撫でを施すにとどまる。瓦当下端厚は2cm余りである。

Ⅴ型式(図31-7)は、中房に周環をもつ蓮子9個と周環をもたない蓮子8個を配する。面違鋸歯文の段は、右側である。顎面の撫でが粗く、範痕、枷型痕が観察できる。裏面には、ゆるい撫でを部分的に施している。顎面と瓦当裏面のなす稜を面取りするものが多い。瓦当下端厚は2.5cm前後である。

Ⅵ型式(図31-8)は、瓦当径が他の型式と比べて小さい。弁区に複弁の蓮弁8弁を巡らせるが、間弁は中房に達しない。中房は、太い突線に囲まれ、周環をもつ9個の蓮子を配する。面違鋸歯文の段は、左側である。顎面には撫で調整がみられ、裏面には、指による粘土押し込み痕が残る。瓦当下端厚は約3cmである。

Ⅶ型式(図31-9)は、間弁を消失したため、単弁16弁に化している。中房には、周環をもつ蓮子13個を配する。周縁の面違鋸歯文は、右側に段がある。顎面にはゆるい撫でを施すが、範痕、枷型痕が観察できる。瓦当裏面には、指による粗い撫でが施されている。瓦当下端厚は約3cmである。

焼成についてみると、Ⅱ・Ⅲ型式に硬質で青灰色を呈するものが多いのに対し、Ⅶ・Ⅷ型式には軟質のものしかみられず、全体として次第に焼成が悪くなる傾向がある。

高麗寺Ⅱ型式からⅧ型式までを通観すると、径の割付比については、中房の小型化にしたがい、A→B→Cと変化する方向が、文様については、間弁がY形から∩形に変化し、最後に失われて、複弁8弁から単弁16弁になるという退化の方向が明らかである。Ⅲ型式からⅣ型式へは間弁の変化で、Ⅳ型式からⅤ型式へは割付比の変化で順序が決定できる。Ⅴ型式とⅥ型式は似た様相を示すが、Ⅴ型式とⅣ型式の蓮子の配列が共通することからみて、Ⅴ型式の方がⅥ型式の先にくると推測される。Ⅵ型式からⅦ型式、Ⅶ型式からⅧ型式へは、間弁の退化により順序が明らかである。ところで、以上で組み立ててきた型式の順序から、Ⅲ型式は、Ⅱ型式の次にくることが推測できる。しかし、文様構成はよく似ているけれども、蓮子が大粒になってその数が減り、間弁の形状も変化しているように、飛躍も大きいことがわかる。そして、範についてみると、Ⅱ型式は川原寺創建瓦と同範であるので、Ⅲ型式の範は、それを模倣して成立し、以後の瓦の原型になったと考えられる。また、Ⅱ型式の面違鋸歯文が三角形の右側に段をもつのにに対し、それがⅢ型式では左側になっていることも、その間の事情を物語っているのであろう。

高麗寺Ⅱ型式からⅧ型式までの軒丸瓦は、周縁を三角縁状に作って面違鋸歯文を巡らせ、中房を突出させて周環をもつ蓮子を配するという共通性によって特色づけられる。また、Ⅲ型式以降では、退化の過程において、割付比や間弁の変化に連続性をみいだすことができる。⁽¹⁴⁾瓦当面の断面形や文様は、範によって決まる要素であるので、それらに共通性や連続性がみられることは、軒丸瓦製作にあたって用意された範に、伝統ともいべき一貫性が存在することを示していると考えられる。

次に、製作技術に検討を加えよう。高麗寺跡出土軒丸瓦で枷型の使用が確認できるものは、Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅷ型式である。Ⅱ・Ⅲ・Ⅶ型式はいずれも顎面に丁寧な撫で調整が施されており、枷型痕の観察が不可能である。しかし、Ⅱ型式を除くと、顎面と瓦当裏面のなす角度が直角に近いことや、各型式のなかで瓦当下端厚にばらつきがないことなど、枷型痕をもつ型式と共通性がみとめられる。これらについても枷型が使用された可能性は高いと判断できる。ただし、Ⅱa型式は、他の型式に比べて瓦当が厚く、枷型の不使用、あるいは特別な製作手順の存在が考えられる。また、Ⅲ型式からⅧ型式まで、接合に際して刻みなどの特別な工夫を施すものは、ほとんどない。一方、瓦当裏面の調整の手法をみると、削りのちに撫でを施す調整から撫でのみになり、そして撫での範囲が全面から部分になり、最後には不調整になっている。すなわち、削りの省略、撫での粗雑化が全体の傾向としてみとめられる。顎面調整も、Ⅲ型式以降は、Ⅶ型式を除き撫でが丁寧でない。

以上の点から、高麗寺Ⅲ型式からⅧ型式まで、枷型の使用や接合の手法に共通性がみられる一方で、調整の手法にみられるように、Ⅱ型式からⅧ型式にかけて手順の省略が生じていることが指摘できる。⁽¹⁵⁾このように軒丸瓦製作における技術の共通性と粗雑化の流れをもとに、その生産にあたった一つの工人系列を復原することが可能になると考えられる。

範と製作技術の双方に対する検討の結果、高麗寺Ⅲ～Ⅷ型式の軒丸瓦は、範においても製作技術においても共通性を保持しつつ退化がみられることが明らかになった。また、高麗寺Ⅱ型式は、範は川原寺創建瓦と同範であるが、川原寺例にみられる瓦当裏面の凹みがみられないなど、製作技術においては相違がみとめられる。むしろⅡb型式は、瓦当の厚さや瓦当裏面と顎面のなす角度など、枷型を使用する他の型式との共通性が強い。よって、高麗寺跡出土の川原寺式軒丸瓦の製作技術の系譜は、Ⅱ型式まで遡ることが可能であり、これら一連の型式については、同一系譜の工人集団による製作を考えることが妥当であろう。高麗寺跡出土瓦のなかで、退化の過程をスムーズに追うことができることから、この工人集団は、高麗寺と密接な関係を保持していた、おそらく高麗寺によって維持され

表3 高麗寺系軒丸瓦の要素

出土地・ 型式	直径	中房 径	割付比 径 周	中房蓮子	間弁	周縁文様	枠型 痕	下端 厚	裏面調整	接合	図 番
高麗寺Ⅱ a			A 8等	①+⑤+⑨	Y	面鋸・右		4.3	削り撫で		31-1・2
高麗寺Ⅱ b	18.0	7.3						3.3	削り撫で	無	31-3
高麗寺Ⅲ	17.4	6.8	A 8等	①+⑦	Y	面鋸・左		3.3	削り撫で	無	31-4
高麗寺Ⅳ	19.4	6.9	B 8等	①+⑥	Y	面鋸・右	○	2.6	撫で	無	31-5
高麗寺Ⅴ	16.4	5.6	C 8等	①+⑥	Y	面鋸・右	○	2.2	撫で		31-6
高麗寺Ⅵ	16.8	5.8	C 8等	①+⑧+8	Y	面鋸・右	○	2.6	部分的撫で	無	31-7
高麗寺Ⅶ	14.6	4.5	C 8等	①+⑧	Y	面鋸・左		3.0	不調整		31-8
高麗寺Ⅷ	18.0	5.5	C16不等	①+⑥+⑥	無	面鋸・右	○	3.1	粗い撫で		31-9
里麿寺	19.0	6.1	C 8等	①+⑦	Y	面鋸・右	○	3.2	撫で		32-1
下狛麿寺	18.6	6.0	C 8等	①+⑦	Y	面鋸・右	○	3.2	撫で		32-2
正道遺跡Ⅷ	17.6	5.8	C 8等	①+⑧	Y	面鋸・右	○	2.5	撫で		32-3
山瀧寺			C 8等	①+?	Y						32-4
雪野寺	17.7	5.4	C 8等	①+⑧+8	Y	面鋸・左	○	2.6	部分的撫で	無/有	32-6
蟹満寺			C16不等		無	面鋸・右					32-5

※ 直径, 中房径, 下端厚は, 掲載資料の計測値, 単位cm。径の割付比については, A: 中房半径=弁区長, B: 中房半径=間弁(基部~頂部), C: 中房径=弁区長+周縁幅。中部蓮子の○囲みは, 周環を表わす。面鋸は面連鋸歯文で, 後に段の位置を示す。接合には, 刻み目などの工夫の有無を記す。

ていたとみることができよう。そこで, この工人集団の系列を高麗寺系列と呼び, その生産した軒丸瓦を高麗寺系軒丸瓦と呼ぶことにする。

3 高麗寺系軒丸瓦の展開

高麗寺跡出土の高麗寺系軒丸瓦と, 文様や断面形に共通性のみられる瓦が, 南山城を中心に分布している。それらの瓦について範と製作技術の双方から検討を行うことにより, その系列における位置を明らかにし, 高麗寺系軒丸瓦の展開を追求することにしよう。

京都府綴喜郡精華町下狛字里垣内に所在する里麿寺の出土例⁽¹⁶⁾(図32-1)は, 範の径の割付比, 蓮弁の配置, 間弁の形, 周縁の形態, 文様構成などが高麗寺Ⅴ型式に酷似している。ただ, 中房に周環をもつ蓮子8個を配する点が異なっている。顎面には, 範と枷型の境が突起として現れ, さらに, その突起とT字状に交わる突起が観察され, 枷型の合せ目と考えられている⁽¹⁷⁾。瓦当裏面には, 周縁に沿って撫でが施されている。瓦当下端厚は3cm弱である。

里麿寺のすぐ近傍, 精華町下狛字拜田の下狛麿寺の出土例⁽¹⁸⁾(図32-2)は, 瓦当面の文様と形態が里麿寺例に酷似し, 同範の可能性がある。顎面において, 範と枷型の境の突起が観察できる。瓦当裏面にはゆるい撫でを施す。瓦当下端厚は約3cmである。

城陽市寺田の正道遺跡から出土した正道遺跡Ⅷ類軒丸瓦⁽¹⁹⁾(図32-3)は, 高麗寺Ⅴ型式と似

高麗寺系軒丸瓦の展開

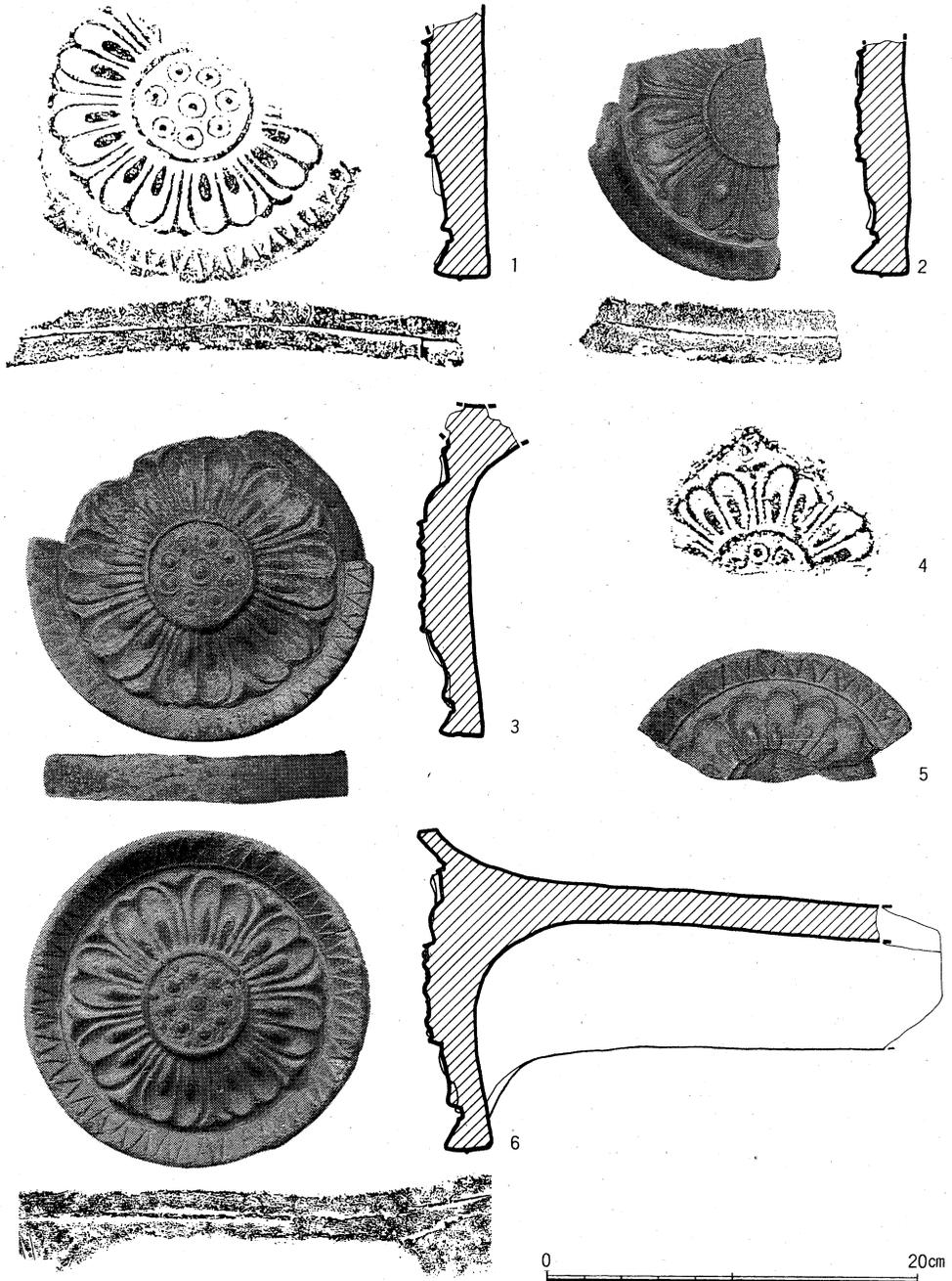


図32 高麗寺系軒丸瓦 (1 里麿寺, 2 下狛麿寺, 3 正道遺跡, 4 山滝寺跡, 5 蟹満寺, 6 雪野寺跡)
縮尺1/4 (1は注(6)文献, 4は注(20)文献, 5は注(22)文献による)

瓦の範と製作技術

た様相を示すが、中房の蓮子が9個である。顎面の撫では不徹底で、範と枷型の痕跡が明らかで、さらに両者に木目がみとめられる。瓦当裏面には、撫でが全面に施されている。瓦当下端厚は約2.5cmである。

綴喜郡宇治田原町荒木に所在する山滝寺跡の出土例⁽²⁰⁾(図32-4)は、拓本しか残っていないため詳細は不明であるが、範の径の割付比がCで、中房に周環をもつ蓮子を配していることがわかる。

滋賀県蒲生郡竜王町川守に所在する雪野寺跡の出土例⁽²¹⁾(図32-6)は、径の割付比がCで、中房には周環をもつ蓮子9個のまわりに周環をもたない小粒の蓮子8個を巡らせ、高麗寺Ⅵ型式に酷似している。しかし、周縁の面違鋸歯文の段が三角形の左側であり、相違点となっている。範痕、枷型痕は明瞭である。接合に際して、刻みなどの工夫を行わないものと、丸瓦広端部を歯車状に削り出すもの(図33)とがある。瓦当裏面には、ゆるい撫でが部分的に施されている。瓦当下端厚は、すべて約2.5cmである。

京都府綴喜郡山城町綺田の蟹満寺の出土例⁽²²⁾(図32-5)は、単弁16弁軒丸瓦で、文様は高麗寺Ⅷ型式に酷似している。同範と思われるが、距離も近いことから、製品が運ばれた可能性もある。

以上でとりあげてきた軒丸瓦は、範および製作技術の双方からみて、高麗寺系軒丸瓦に属すると考えられるものである。それらのうち、里廃寺出土例、下狛廃寺出土例、正道遺跡Ⅷ類は、範の要素についてみると、径の割付比、中房の蓮子、間弁の特徴などが、高麗寺Ⅴ型式に近い様相を呈している。製作技術についてみると、瓦当裏面の調整手法にやや差があるけれども、高麗寺Ⅴ型式との併行関係を考えても矛盾はない。また、山滝寺跡出土例も、高麗寺Ⅴ型式に併行するグループに属する可能性がある。雪野寺跡出土例は、高麗寺Ⅵ型式に酷似する範を使用しているが、面違鋸歯文の段の相違から、違う範によるものであることがわかる。製作技術の面からも、枷型の使用や、顎面、瓦当裏面の調整手法など、高麗寺Ⅵ型式との間に共通点がみいだせる。しかし、接合に際して、とくに工夫を施さないものに加えて、丸瓦広端部を歯車状に削るものもあり、新たな要素が現れていることがわかる。

このほかに高麗寺系軒丸瓦に属する可能性をもつものとして、奈良県生駒郡斑鳩町法起寺例⁽²³⁾、高市郡明日香村和田廃寺例⁽²⁴⁾がある。前者は、表採資料で1点のみであり、また高麗寺Ⅴ型式と同範とみられ、資料的に疑問があるが、後者の和田廃寺では発掘調査によって多数の出土が確認されている。和田廃寺出土例は、範の周の割付比がBで、中房には蓮子

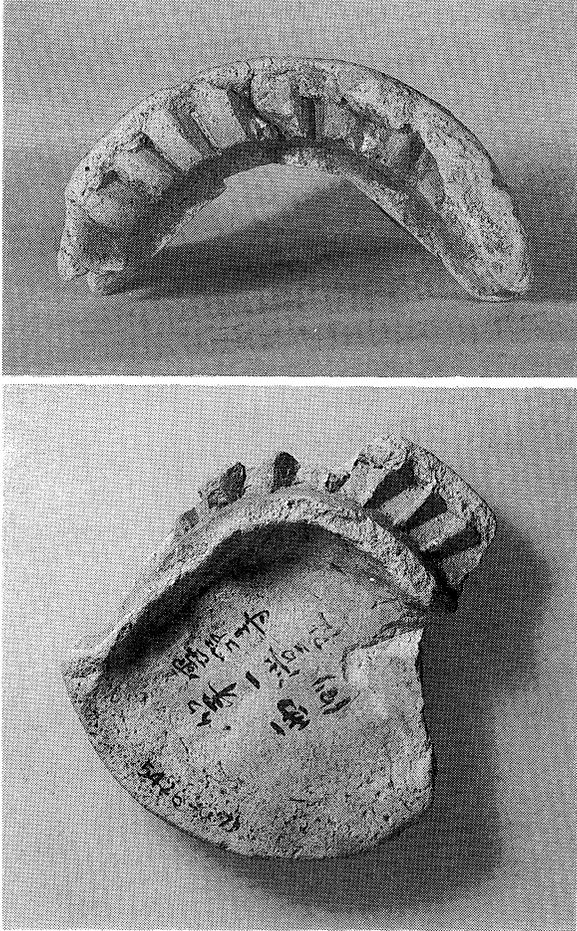


図33 雪野寺跡出土軒丸瓦の接合法
復弁8弁蓮華文軒丸瓦のうち、
丸瓦接合部分ではずれた同一個
体を示す。上は、丸瓦を広端側
よりみたもの、下は、瓦当を裏
面側からみたもの。接着面を大
きくするために、丸瓦の先端が
歯車状に削り出されていること
がわかる。

周環をもつ蓮子8個を配する。間弁の形が \cap 型で、高麗寺系軒丸瓦の特徴に一致する。顎面の撫でが丁寧で、枷型の痕跡はみとめられない。接合に際して、丸瓦端面を歯車状に削り出すものがあり、雪野寺例に近似する。和田廃寺からは、川原寺創建瓦と同範の軒丸瓦が出土しており、当例がその模倣によって成立した可能性も否定できないが、上述してきた特徴から、高麗寺系軒丸瓦に属する可能性は高いと判断できる。

高麗寺跡出土軒丸瓦と、南山城および雪野寺跡出土の高麗寺系軒丸瓦の比較を行った結果、少なくとも同一系譜の工人集団、すなわち高麗寺系列の工人集団によってこれらの瓦が生産されたことが推測できる。里廃寺例・下粕廃寺例、正道遺跡Ⅷ類、雪野寺例が高麗寺跡出土例と同範関係をもたないことからみて、それぞれの寺院の造営にあたって範が用意されて軒丸瓦の生産が行われていたと考えられる。とくに、範の製作において、中房の

蓮子や周縁の面違鋸歯文など、きわめて微細な部分のみを改変していることが注意される。各寺院の高麗寺系軒丸瓦の焼成については、雪野寺の瓦窯、横谷瓦窯（滋賀県蒲生郡蒲生町横谷）における焼成のほかに不明である。しかし、同範関係のないことのほか、焼成、色調に差がみられることを考え合わせると、高麗寺系列の工人集団が移動して、それぞれの寺院の近くで瓦を生産していた可能性が高い。各寺院の高麗寺系軒丸瓦は、高麗寺V型式、Ⅵ型式に併行すると考えられるものが中心であり、高麗寺系列において、ある特定の時期に、このような工人の移動をともなる瓦の生産と供給が行われていたことを示していると考えられる。

高麗寺系軒丸瓦出土寺院の多くが南山城に所在するなかで、近江にある雪野寺は特異な存在である。この雪野寺と高麗寺との関係を物語るものに、4重孤文軒平瓦がある。雪野寺の高麗寺系軒丸瓦と焼成や胎土の一致する軒平瓦は、4重孤文で、直線顎をもつものである（図34-2）。直線顎は、重孤文軒平瓦では異例であるが、高麗寺跡出土の4重孤文軒平瓦のなかにも直線顎のものがある（図34-1）。軒丸瓦ばかりでなく、軒平瓦の製作においても、高麗寺系列の工人集団の雪野寺造営への関与が想定できる。高麗寺では、高麗寺系軒丸瓦は、一貫して型挽きの重孤文軒平瓦と組合わさっている。この点も高麗寺系列の工人集団の特徴と考えてよいであろう。寺院造営をめぐる瓦工人の関与のあり方を知るためには、さらに一般の平瓦・丸瓦をも含めた広い見地から検討を行う必要があるが、少なくとも高麗寺系軒丸瓦の分析から得られた結果は、瓦工人の動向の一端を示していることは間違いないであろう。

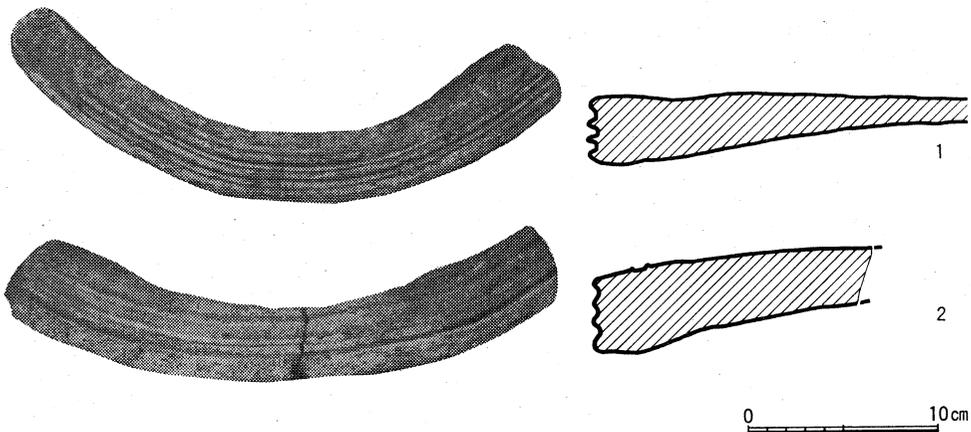


図34 4重孤文軒平瓦（1 高麗寺跡，2 雪野寺跡）縮尺1/4

寺院と瓦工人

南山城において、高麗寺を中心とする川原寺式軒丸瓦の展開をみてきたが、これとは別に、同種の文様をもつ軒丸瓦が隣接して分布している。城陽市平川の平川廃寺⁽²⁶⁾、および宇治市菟道の大鳳寺跡⁽²⁷⁾から出土した川原寺式軒丸瓦は、突出した中房に蓮子を2重にめぐらし、三角縁状の周縁に面違鋸齒文を配するなど、原型式に近い様相を呈する。しかし、文様の面では、蓮子周環が平川廃寺例では蓮子に接着し大鳳寺例では失われている点、周縁が直立縁に近い三角縁になり、大鳳寺例ではその幅が一定でない点など、高麗寺系軒丸瓦の変化のなかでは生じえない特徴をもっている⁽²⁸⁾。とくに、周縁の形態とともに、顎面と瓦当裏面のなす角度が鈍角になるという瓦当の形態からは、範が周縁の外側にかぶさる可能性も、枷型の使用の可能性も、きわめて低いと判断される。平川廃寺例と大鳳寺例は、範の要素ばかりでなく、瓦当の形態や擦痕をよくとどめる撫で調整を施す点など共通点が多く、同一の工人集団によって生産されたものと考えられるが、高麗寺系軒丸瓦とはほとんど交渉をもたなかったことが推測できる。すなわち、高麗寺系列の工人集団とは別に川原寺式軒丸瓦を生産した瓦工人の存在が示されることになる。

山城における古代寺院の軒丸瓦の分布については、古くから検討が加えられ、その偏在したあり方から、政治的な背景にまで論及されてきている⁽²⁹⁾。しかし、川原寺式軒丸瓦として分類される瓦のなかにおいても、異なる生産者によるものがあることが判明した。瓦の分布からその背景に議論を深めていく過程で、工人集団の系列の復原という作業が不可欠であるといえる。川原寺式軒丸瓦以外では、大宅廃寺⁽³⁰⁾、北白川廃寺⁽³¹⁾、醍醐廃寺⁽³²⁾、おうせんどう廃寺⁽³³⁾、法琳寺跡⁽³⁴⁾、法観寺跡⁽³⁵⁾から出土している紀寺式軒丸瓦⁽³⁶⁾が、山城において顕著な分布を示すものとして注意される。文様の面では、周縁のいわゆる雷文がよく似ており、瓦当面の断面形とあわせて、範の共通性がうかがえる。さらに、製作技術に検討を加えたならば、高麗寺系軒丸瓦についてみてきた工人集団の同定を行うことが可能となろう。このように、山城に分布するさまざまな瓦について、高麗寺系軒丸瓦をモデルとして工人集団の系列として整理を行うことにより、寺院造営の背後にある諸関係の解明が、より進展するものと考えられる。

4 寺院と瓦工人

古代寺院の多くが廃絶し、現在では廃寺として痕跡をとどめるに過ぎないという状況のなかで、寺院の屋根を葺いた瓦は、もっとも普遍的な遺物として研究に欠くことのできない資料となっている。その瓦の検討から、まず復原できるのは、生産や供給をめぐる諸関

瓦の範と製作技術

係である。本稿では軒丸瓦をとりあげ、範による要素と製作技術による要素とに分け、工人集団の系列関係を明らかにすることを試みた。その結果、高麗寺を中心に展開した瓦の生産者の存在が明らかになり、その所産が南山城をはじめ多くの寺院に供給されていることがみとめられた。このようなあり方は、各地における寺院の造営においてもみられるであろうが、とくに高麗寺のような中心となる寺院の検出が重要であると考えられる。

範と製作技術の対応から、一つの工人集団による瓦の生産、供給が検証されている例として、備後北部を中心に7世紀から9世紀にわたってみられる「水切り」瓦が挙げられる。⁽³⁷⁾これは、「水切り」と呼ばれる三角状突起を瓦当下端にもつ軒丸瓦で、その顕著な特徴から同一の製作技術の系統によるとみなすことができる。範についてみると、文様は単弁から複弁、そして単弁と複弁の混じった混弁へと変化しているが、周縁が平縁状で、外区に太い突線を巡らせている点など、最初から最後まで強い共通性を保持している。すなわち、範についても、製作技術についても、共通性を保持しつつ変化したことが明らかであり、同一系譜の工人集団による生産が推測できる。さらに、各段階の瓦をもつことから、その生産の中心となった寺院として三次市寺町廃寺(伝三谷寺)が想定でき、その寺院に属する工人集団が巡回して生産に従事していたとみなされているが、この状況は高麗寺系列の工人集団による瓦の生産・供給のあり方にきわめてよく似ている。このように、各地の寺院の造営をめぐる瓦生産において、高麗寺系列でみられた生産・供給形態と同様のあり方がみられる可能性は、大いにあると考えられる。

7世紀後半を中心とする地方寺院の成立は、全国的な規模でみられる大きな現象である。この動きを、仏教史のみならず、政治史上の事象として位置づけることが行われてきているが、各地方の寺院間、あるいは中央と地方の寺院間の諸関係については、考察が十分になされていないのが現状であろう。本稿では、各寺院の間に存在した関係の一つとして、造営における瓦生産の工人系列の問題を扱ったが、造営に際して用いられた建築技術、石工技術など他の諸技術についても同様に工人系列の問題として扱うことができると考えられる。このように、寺院の造営に際し、どのような工人集団が従事したかということから、寺院の背後に存在する支配層の間の関係が復原できると確信する。

なお、本稿は1983年に京都大学文学部に提出した卒業論文「瓦の範と製作技術」の一部を書き改めたものである。資料の実見にあたっては、上原真人、大脇潔、近藤義行、杉本宏、高橋美久二、西岡元廣の諸氏に大変お世話になった。記して感謝の意を表する次第である。

〔注〕

- 1 たとえば、岡本東三は東大寺式軒瓦の文様が、東大寺の仏像にみられる意匠に共通することを指摘し、文様が東大寺造営にあたっての統一的な装飾文様として図案化されたと考え、仏工による瓦範の製作を想定した。岡本東三「東大寺式軒瓦について」(『古代研究』9, 1976年) 一方、森郁夫は、文献記載の「瓦工」の職掌に範を作るという記事がみあたらないことや、同一意匠で異なる範によって製作された瓦が、複数の造営官司で使用されていることから、範が特定の工房で製作され、各造営官司に供給されたと考え、その製作に画工が関与した可能性が高いことを論じている。森郁夫「瓦当文様の創作」(『MUSEUM』第376号, 1982年)
- 2 同範関係の解明が重要な知見をもたらした例として、法隆寺若草伽藍と四天王寺の創建瓦が同範であることが藤沢一夫によって明らかにされたことが挙げられる。藤沢一夫「四天王寺出土の古代屋瓦」(『佛教藝術』56号, 1965年)。また、地方寺院間の瓦の同範関係についても、岡本東三の検討以降重視されている。岡本東三「同範軒平瓦について」(『考古学雑誌』第60巻第1号, 1974年)
- 3 木村捷三郎「平安中期の瓦についての私見」(『延喜天曆時代の研究』, 1969年)
- 4 近藤喬一「瓦の範と瓦当」(『考古学論考』, 1982年)
- 5 鎌谷木三次『播磨上代寺院址の研究』1942年 現在、加西市教育委員会蔵。立花聡氏のご厚意により実見させていただいた。
- 6 星野猷二「鑑瓦製作と分割型」(『考古学雑誌』第67巻第2号, 1981年)
- 7 近藤喬一「瓦の範と瓦当」(前掲) なお、この論文の中で、枷型の使用の開始を川原寺の創建瓦に想定する意見が述べられている。
- 8 田中重久「高麗寺創立の研究」(『考古学』第9巻第6号, 1938年) 梅原末治「高麗寺址の調査」(『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第19冊, 1939年)
- 9 山城町教育委員会『史蹟高麗寺跡第1次範囲確認調査概報』(「京都府山城町埋蔵文化財調査報告書」第1集, 1985年) 山城町教育委員会『史蹟高麗寺跡第2次範囲確認調査概報』(『京都府山城町埋蔵文化財調査報告書』第2集, 1986年) 山城町教育委員会『史蹟高麗寺跡第3次範囲確認調査概報』(『京都府山城町埋蔵文化財調査報告書』第4集, 1987年)
- 10 この7種類の区分は、すでに梅原末治「高麗寺址の調査」(前掲)のなかで行われており、同書の図版第44に、各類の拓影復原図が掲載されている。その復原図の番号と本稿の分類との対応は1がⅡ型式、2がⅢ型式、3がⅣ型式、4がⅤ型式、5がⅥ型式、6がⅦ型式、7がⅧ型式であり、Ⅵ型式の位置づけに相違がある。
- 11 本稿で取り扱った資料は、主として1935年の京都府調査時の出土資料である。
- 12 山城町教育委員会『史蹟高麗寺跡第2次範囲確認調査概報』(前掲) なお、高麗寺跡出土軒丸瓦の製作技術について、中島正氏から多くの御教示を得た。
- 13 中島正の検討によると、Ⅱb型式よりもさらに瓦当厚の薄いものがあり、この型式は3種類に分類しうることがわかる。山城町教育委員会『史蹟高麗寺跡第2次範囲確認調査概報』(前掲)
- 14 川原寺式軒丸瓦の退化の方向は多様な様相を呈し、たとえば、面違鋸歯文から線鋸歯文への変化、中房の小型化や蓮子周環の消失、蓮弁の8弁から7弁、6弁への変化などが挙げられる。そのなかで、高麗寺跡出土軒丸瓦でみられる退化は、面違鋸歯文や蓮子周環を保持したまま、中房の小型化や間弁の退化、消失という変化をたどる点に特色がある。
- 15 Ⅱ型式とⅢ型式、ならびにⅤ型式とⅥ型式は、それぞれ製作の手法において共通性が強く、同時に用いられた可能性がある。
- 16 星野猷二「鑑瓦製作と分割型」(前掲)
- 17 星野猷二「鑑瓦製作と分割型」(前掲)
- 18 鞍岡神社蔵。宮司の太田氏のご厚意により実見させていただいた。
- 19 高橋美久二・近藤義行「正道遺跡発掘調査概報」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第1集, 1973

瓦の範と製作技術

- 年 発掘調査の結果、大規模な掘立柱建物群が検出され、久世郡の郡衙跡であるとみなされているが、隣接して寺院が存在していた可能性も指摘されており、出土瓦が郡衙、寺院のいずれに用いられたのかは明かでない。
- 20 高橋美久二「宇治田原町山滝寺跡出土の古瓦」(『京都考古』第5号, 1974年)
 - 21 柏倉亮吉『雪野寺址発掘調査報告』(『日本古文化研究所報告』第7, 1937年)
 - 22 田中重久「平安奠都前の寺院址と其の出土瓦」(『夢殿』第18冊, 総合古瓦研究, 1938年)
 - 23 保井芳太郎『大和上代寺院志』1932年
 - 24 奈良国立文化財研究所「和田廃寺の調査」(『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』5, 1975年)
 - 25 上原真人氏の御教示による。
 - 26 平良泰久・近藤義行・奥村清一郎・辻本和美「平川廃寺発掘調査概報」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第1集, 1973年)
 - 27 宇治市教育委員会『大鳳寺跡発掘調査報告』(『宇治市文化財調査報告』第1冊, 1987年) なお、同範と考えられる瓦が、宇治市山本の山本瓦窯から出土している。柴田実「宇治古代登窯遺址」(『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第14冊, 1933年)
 - 28 文様の検討から、南山城の川原寺式軒丸瓦を「高麗寺式」と「平川廃寺式」に分ける見解が、大鳳寺の報告のなかで提示されている。八瀬正雄「山城の白鳳寺院と瓦の文様」(『大鳳寺跡発掘調査報告』前掲)
 - 29 高橋美久二「山城国葛野・乙訓兩郡の古瓦の様相」(『史想』第15号, 1970年)では、紀寺式軒丸瓦が近江朝系、川原寺式軒丸瓦が天武朝系であるとする見解が示され、また、壬申の乱との関係が説かれている。一方、森郁夫は、川原寺式軒丸瓦と紀寺式軒丸瓦の年代について整理し、両者が造寺活動に対する官の関与によってもたらされたことを論じている。森郁夫「古代山背の寺院造営」(『学叢』第8号, 1986年)
 - 30 有光教一・坪井清足「大宅廃寺の発掘調査概報」(京都府教育委員会『名神高速道路路線地域内埋蔵文化財調査報告』, 1959年)
 - 31 梅原末治「北白川廃寺址」(『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第19冊, 1939年)
 - 32 京都大学文学部『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第2部, 日本歴史時代 1968年
 - 33 田中重久「平安奠都前の寺院址と其の出土瓦」(前掲)に、深草寺址として記載されている。
 - 34 田中重久「平安奠都前の寺院址と其の出土瓦」(前掲)
 - 35 田中重久「法観寺創立の研究」(『考古学』第9巻第2号, 1938年)
 - 36 標式寺院の奈良県明日香村の紀寺が官寺的な性格をもつことが指摘されており、その分布は、中央と地方の関係をうかがう重要な要素になると考えられる。森郁夫「古代山背の寺院造営」(前掲)
 - 37 松下正司「備後北部の古瓦」(『考古学雑誌』第55巻第1号, 1969年)
 - 38 松下正司「備後北部の古瓦」(前掲)

京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和60年度

図 版

- 1 京都大学吉田キャンパスの地区割と調査地点
- 2～7 京都大学医学部構内 A N 18 区
- 8～11 京都大学北部構内 B J 31 区

Y = 1500 (構内座標)
Y = -20500 (国土座標)

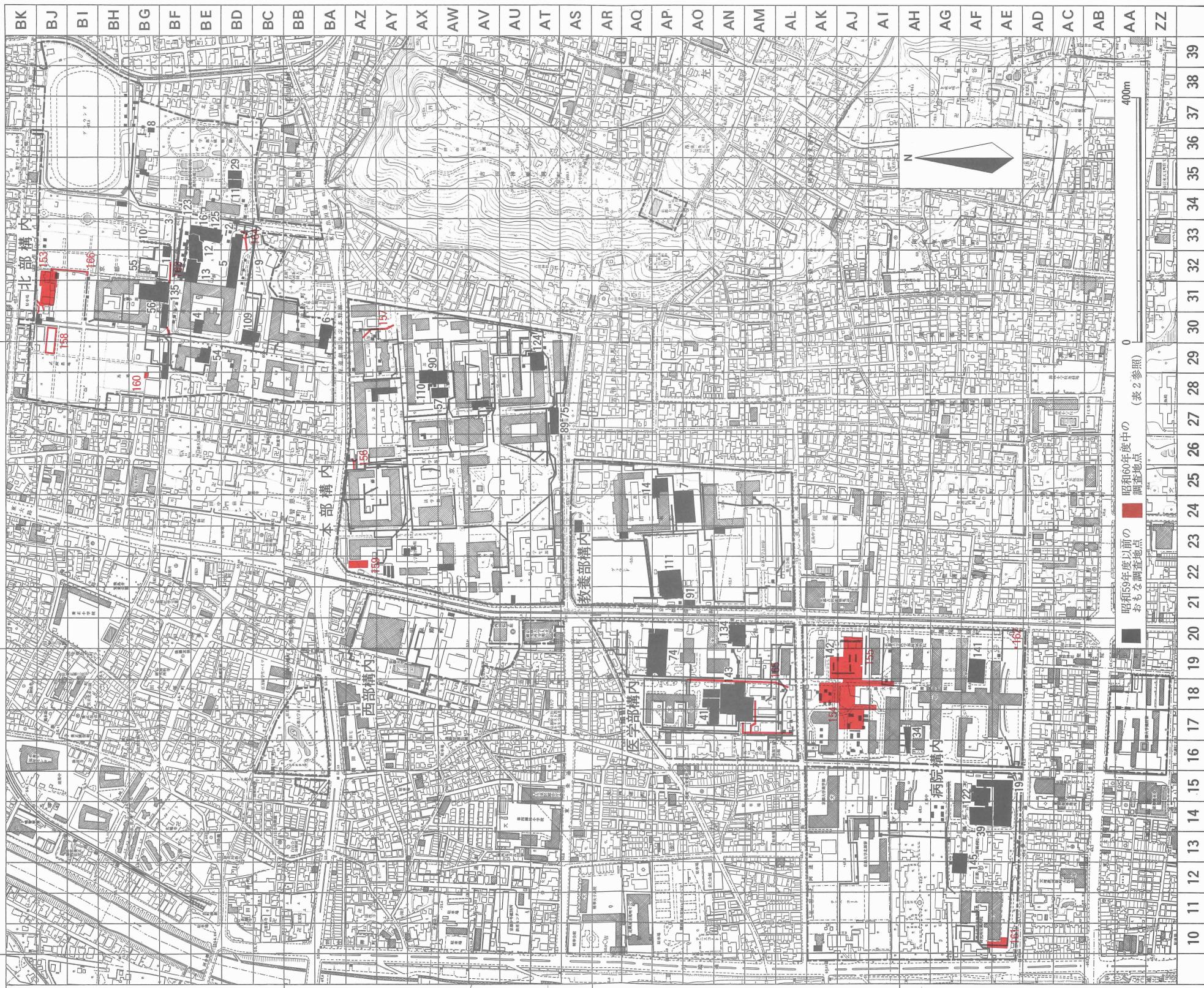
Y = 2000
Y = -20000

Y = 2500
Y = -19500

X = 2000 (構内座標)
x = -108000 (国土座標)

X = 1500
x = -108500

X = 1000
x = -109000

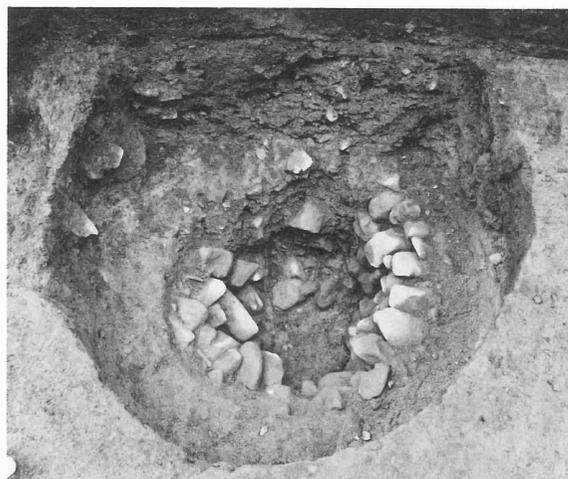




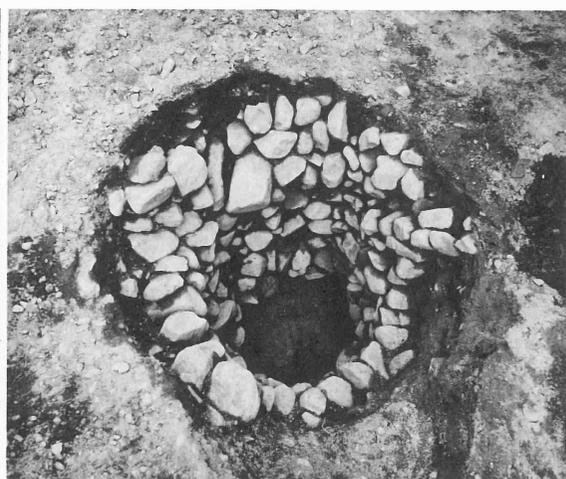
1 調査区全景（北東から）



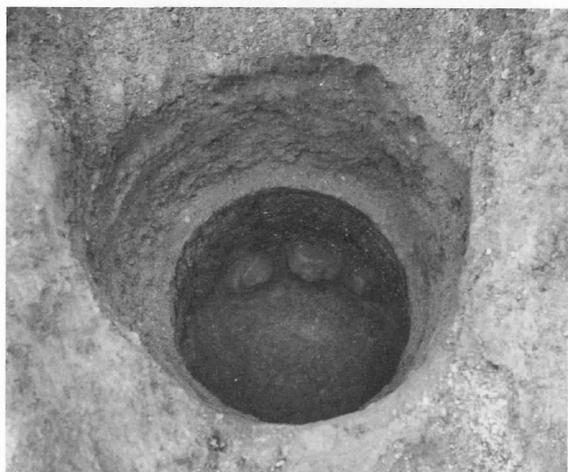
2 調査区北半全景（東から）



1 井戸SE5 (北から)



2 井戸SE36 (西から)



3 井戸SE8 (北西から)



4 土坑SK6 (西から)



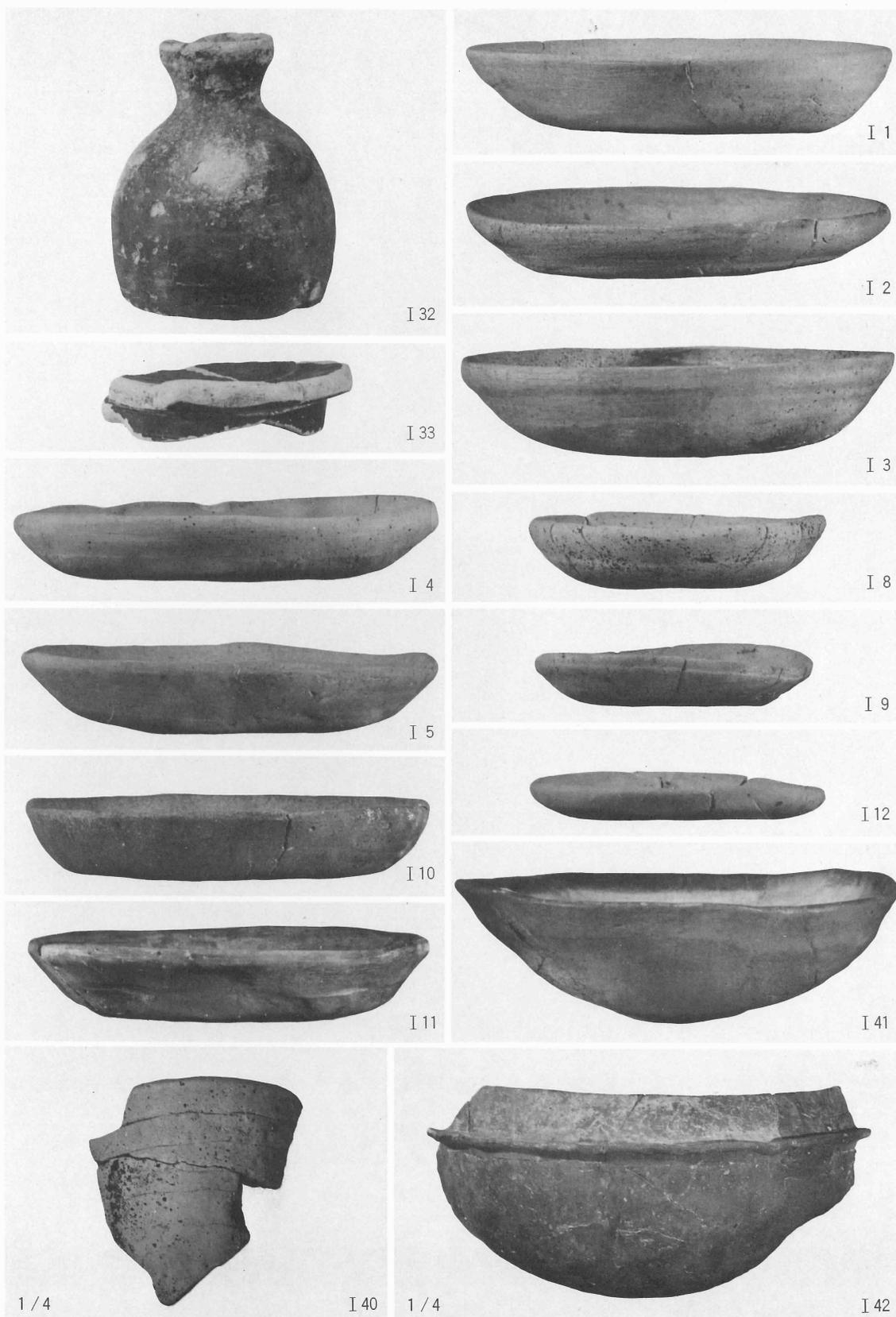
5 道路SF1断面, 溝SD3・SD9・SD11・SD12 (西から)



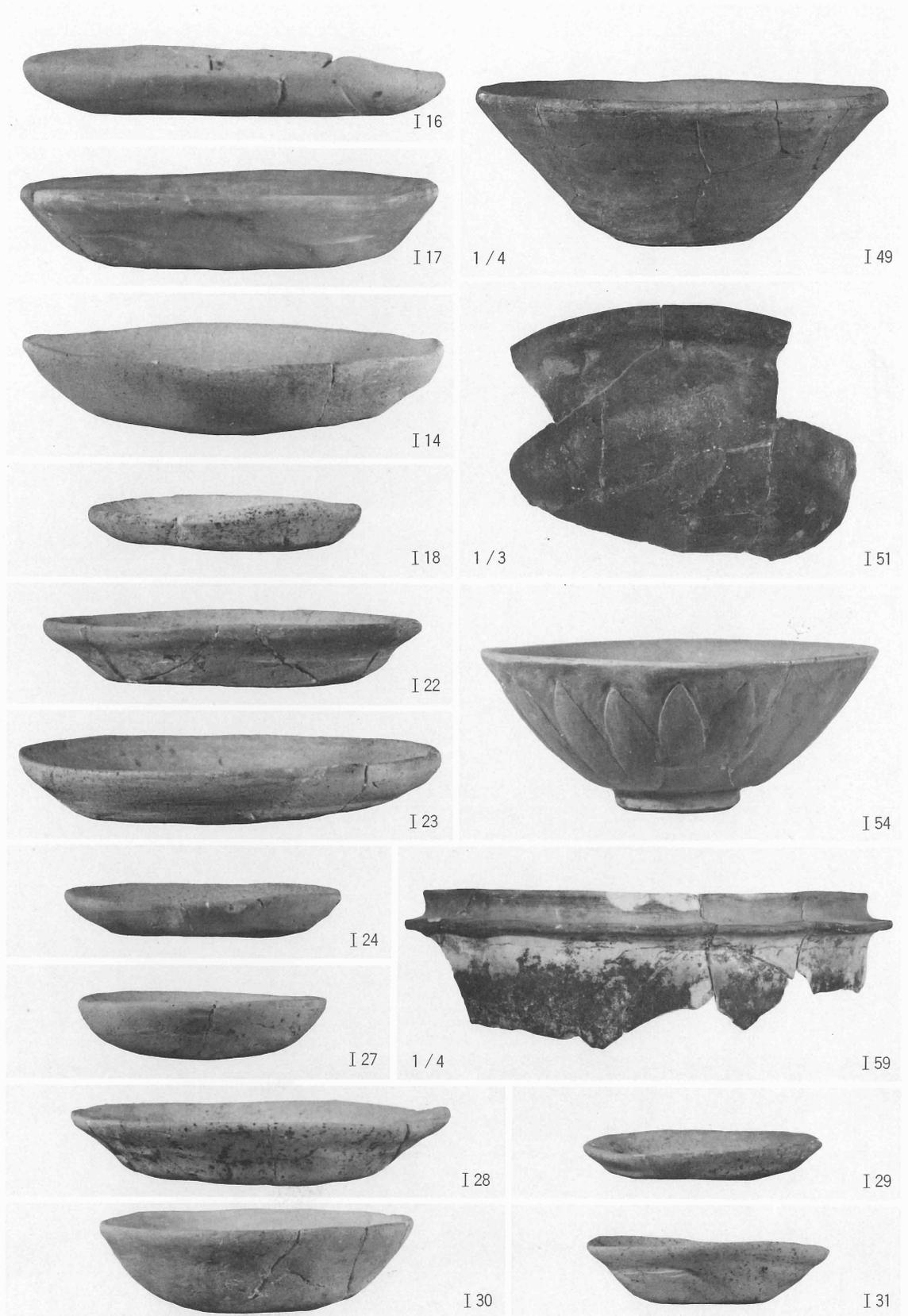
1 道路 S F 1 (東から)



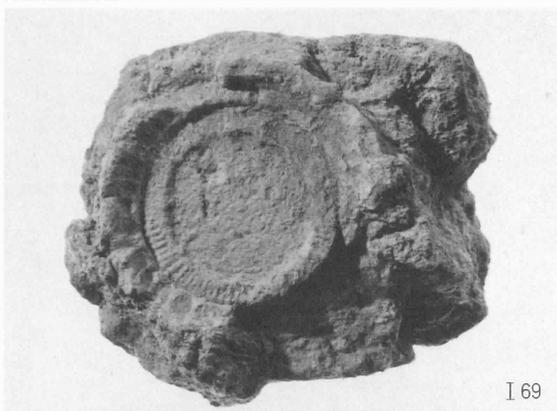
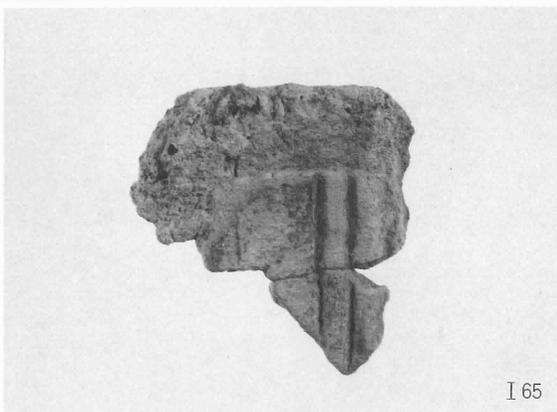
2 溝 S D 19 (北西から)



SE 36出土遺物 (I 1 ~ I 5 · I 8 · I 9 土師器), SK 31出土遺物 (I 10 ~ I 12 土師器),
 SR 1 出土遺物 (I 32 須恵器, I 33 緑釉陶器), SD 11 出土遺物 (I 40 土師器, I 41 · I 42 瓦器)



SD 9 出土遺物 (I 14・I 16~I 18土師器, I 49須恵器, I 51瓦器),
 SK 24出土遺物 (I 22~I 24・I 27土師器, I 54青磁, I 59瓦器),
 SX 6 出土遺物 (I 28~I 31土師器)



S X13出土鑄型



1 流路S R 2 (東から)



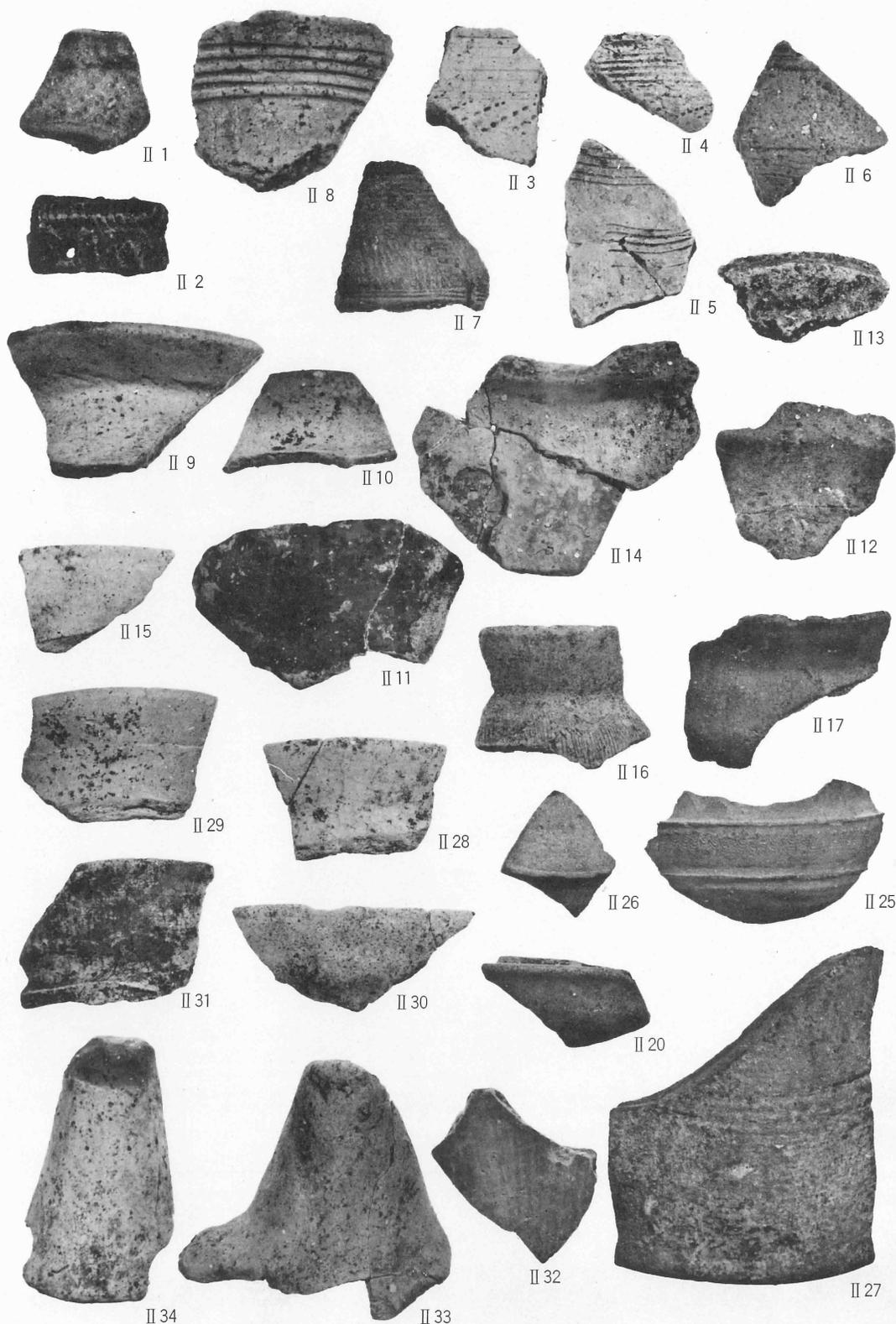
2 建物S B 1 (東から)



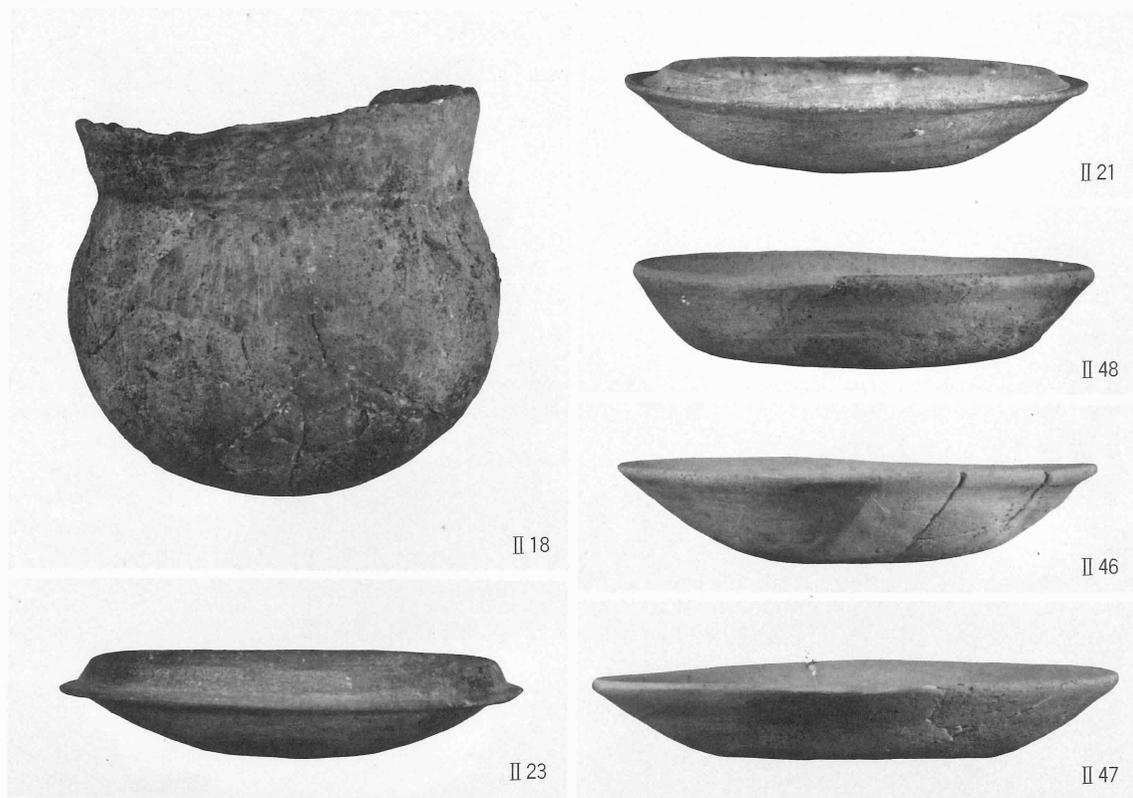
1 流路S R 2・建物S B 1と中世の溝群（東から）



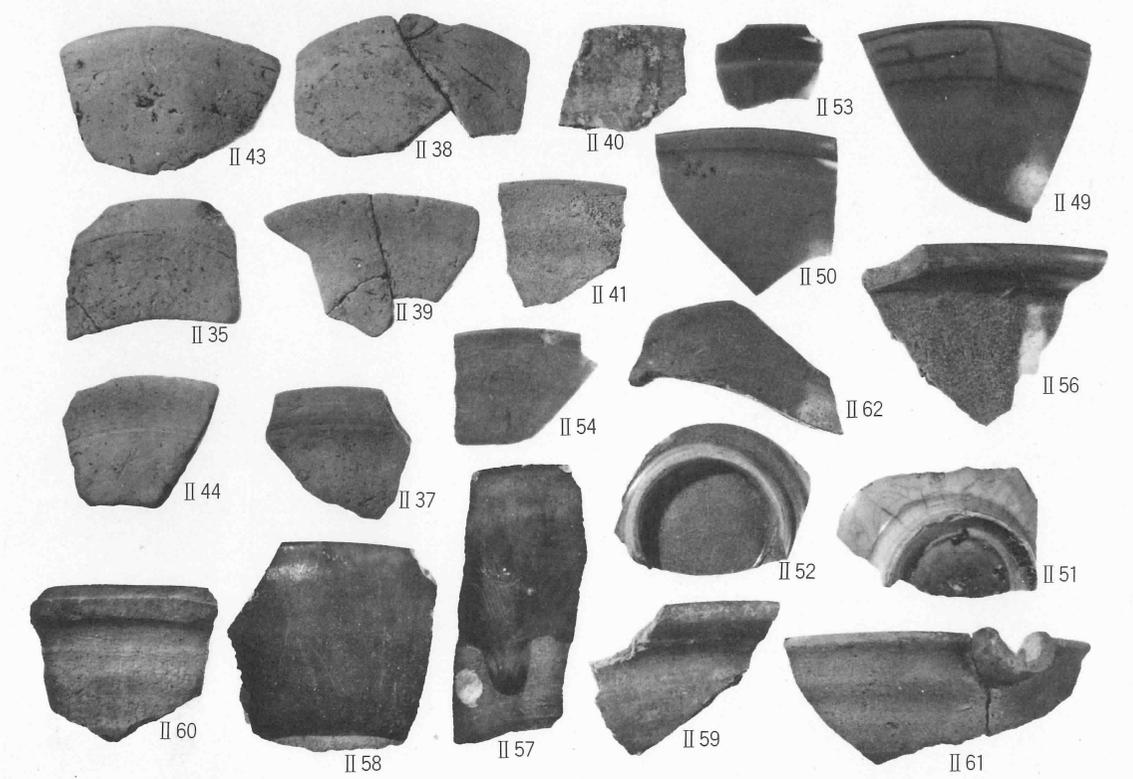
2 流路S R 1と近世の溝群（西から）



S R 2 出土遺物 (II 1・II 2 縄文土器, II 3・II 4 弥生土器, II 10~II 17 土師器, II 20・II 25~II 27 須恵器), 黄褐色砂質土出土遺物 (II 5~II 8 弥生土器), 茶褐色土出土遺物 (II 9 弥生土器), 茶褐色砂質土出土遺物 (II 28~II 34 土師器)



1 S R 2 出土遺物 (II 18土師器, II 21・II 23須恵器), 茶褐色砂質土出土遺物 (II 48土師器), 灰褐色土出土遺物 (II 46土師器), S D 6 出土遺物 (II 47土師器)



2 S R 1 出土遺物 (II 35・II 37～II 39土師器, II 40・II 41灰釉系陶器), 茶褐色土出土遺物 (II 43・II 44土師器, II 50・II 52～II 54・II 56・II 62青磁, II 57・II 58天目碗, II 60須恵器, II 61灰釉系陶器), 灰褐色土出土遺物 (II 49・II 59青磁, II 51青白磁)

昭和63年 3 月22日発行

京都大学構内遺跡調査研究年報

昭和60年度

編 集 京都大学埋蔵文化財研究センター
発 行 京 都 市 左 京 区 吉 田 本 町
印 刷 山 代 印 刷 株 式 会 社
製 本 京 都 市 上 京 区 寺 之 内 通 小 川 西 入